Rest In Peace

砂糖ノ塊

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人を欺き、人を殺め、人を堕とし、人を超える存在……

人々は彼らを恐れ、「悪魔」と呼んだ。

これは悪魔に感情を奪われた修道女と、記憶を無くした少年が、全てを取り戻し――

「残念ですが、神は既に死んでいます」

――そして安らかに眠るまでの物語だ。

目次

1：出会いと悲しみの村 ―― 1
2：旅立ちと雨上がり ―― 21
3：迷いの森と赤頭巾 ―― 42
4：赤頭巾と大樹の悪魔 ―― 59
5：修道女と悪魔祓い（エクソシスト） ―― 74
6：恐怖の悪魔と花園の守護者 98
7：花咲く教会と悪魔神父 ―― 117
8：骸ノ修道女と銃天使 ―― 133
9：天使と家族 ―― 147
10：姉と弟 ―― 161

悪魔の行進編

11：聖なる光と悪魔の行進 ―― 173
12：悪徳王子と開戦前 ―― 194
13．開幕と殲滅 ―― 210
14．奇襲と逆襲 ―― 231
15．天使と再会 ―― 245
16．不幸と旅立ち ―― 260

1：出会いと悲しみの村

昔々あるところに、二人の少女がいました。
互いに教会に拾われた孤児だった二人は、まるで姉妹のように仲が良く、とても楽しい毎日を過ごしていました。
たとえ本当の家族がいなくても、少女たちは幸せでした。
ですがそんな幸せは長くは続きません。
ある日少女の片方が病気で倒れてしまったのです。
もう一人の少女は必死で祈りました。
「神様おねがいします、どうかあの子を助けてください」
何度も何度も、
昼も夜もなく、
必死で、必死で、必死で、
少女は祈り続けました。
しかしどれだけ祈っても、少女の神様には届きません。
やがて病気で眠っていた少女は、目を覚まさなくなりました。

それでも少女は祈り続けます。
もう、それしか少女に出来ることがなかったのです。
そして長い年月が過ぎて、
遂に少女の祈りは届きました。

神ではなく、悪魔に。

～【人界歴６６６年・セルトグラへ村】～

「ふう……よし、今日の掃除もこのくらいでいいかな」
その日、僕はいつものように村の離れたところにある古びた教会の掃除をしていた。
ボロボロの壁に生えた苔を取り除き、カビの生えたひび割れた床を磨く。一日も欠かしたことのない僕の日課だ。
「あとは……」
さっき綺麗にしたばかりの床に跪き、目をつむって両手を合わせる。
僕が祈るのは一体の女神像。

もう顔も半分欠けてるし、他のパーツだってところどころ無いけれど……
それでも僕は祈る。
「神様お願いします。どうか……どうか……」
雨の降り続けるこの村の教会で、僕はひたすらに祈り続ける。
「この雨を、止ませてください」
だって、僕にはそれしかできないから。
「……本当にいつまで降るんだろ、この雨」
ガラスの割れた小窓の外は今日も雨がしとしと降っている。
「こんなにずっと降られると嫌になっちゃうよ……」
”ずっと”正確に言うなら僕がこの教会で記憶喪失になって倒れていたあの日から。
七年間、この雨は振り続けている。
僕には青空の記憶が無い。
きっともう村の誰も、空の青さを鮮明に思い出すことはできないだろう。
「はぁ……」
ため息をついて空を見上げてみても、そこに広がっているのはどんよりとした灰色の雲だけ。
「……そろそろ帰るか」

持ってきた傘をさして村へと帰ろうと教会の外に出たその時。
「え……」
僕は彼女と出会った。
いつにも増して大降りの雨の中、教会の外で傘もささずにこちらを向いて立っている彼女と。
見る限り僕よりも年上で、触れたら壊れてしまいそうな繊細な雰囲気を纏った女性だった。
周囲の風景に溶け込まない真っ黒な修道服。
対照的に、この仄暗い雨の日に溶け込む様な、灰色の長髪。
生気が宿っていないような白い肌と、この空と同じ色をした灰色の目。
そんな彼女の灰色の瞳に見つめられ、僕はまるで金縛りにでもあったかのようにその場に固まってしまった。
「……」
「……」
沈黙の中、雨の音だけがその空間を支配している。
「(ど、どうすれば……)」
声をかけてみようか？　しかしなんと声をかければよいのか？　まず〝アレ〟は声

をかけていい存在なのか？
もしかしたら、幽霊とかそういう類の……
「ゅん」
なんか喋った！　聞き取れなかったけど！
「（多分……生きてる人だ。でも何でこんなとこに……）」
「……ん」
ダメだ。また何か言ったみたいだけど全然聞き取れない。
仕方ない……こうなったらこっちから声を……
「あの……大丈夫ですか……？」
「……」
「……？」
教会の中から声をかけてみるが返事がない。
あれ……聞こえなかったのかな？
「その格好、修道女（シスター）の方ですよね？　どうしてこんなところに……」
「へ……」
「へ？」

「くしゅん」

「……」

「……」

それは彼女の冷たく怪しげな雰囲気とは正反対の、なんとも可愛らしいくしゃみだった。

「あ！」

そういえばこの人びしょ濡れじゃん！

「ちょ、ちょっとあなた傘はどうしたんですか!?」

「……ありません」

「ええ!?」

僕は急いで持ってきた傘を彼女に差し出した。

「と、とりあえずこれ使ってください！　あともう少し行ったところに僕の村がありますから一緒に行きましょう！」

「いえ……私は……」

「そんなにずぶ濡れじゃ風邪ひいちゃいますよ！」

そうして僕は無理矢理彼女を自分の村に連れ帰ることにした。

これが僕と彼女の最初の出会いだ。
もしも、この時僕が彼女に傘を差し出さなかったら……
きっと何も始まらなかっただろう。

～【セルトグリへ村】～

パチパチと音を立てる暖炉が、雨で冷えた僕の体を暖める。
「なるほどねぇー、それで連れ帰ってきたわけかい。グリフ」
「……ごめんなさい、キャンベラおばさん」
僕は彼女を村へと連れ帰り、事の経緯をこの家の主であるキャンベラおばさんに説明した。
「いや別に責めてるわけじゃないけどさ。何というか……」
「……」
「こりゃまた随分と濡れ鼠なこった。待ってな今着替え持ってくるから」
「その前にタオルか何かがいると思います！」
「あぁそうだね。それじゃあ……」
「ただいまー……ってええ!?」

「何でこんな立地最悪、国の果ての果て、辺境も辺境、山と森ばっかで良いとこなしの村に修道女（シスター）が……！」
「ミゲルさん、ここ自分たちの村ですよ。言ってて悲しくならないんですか……」
　外から帰ってきたなり大声で驚いたのは、キャンベラおばさんの息子のミゲルさんだ。
「お、丁度いいとこに帰ってきたねミゲル。お客さんにタオルを持ってきな！」
「え、てかこれどういう状況!?」
「グリフが連れてきたんだよ！　いいからさっさと行きな！」
「はぁ!?」
「あはは……」
「グリフ！　あんたもずぶ濡れじゃないか！　さっさと着替えてきな！」
「は、はい！」
　相変わらず仲がいい親子だ。でもミゲルさんが戸惑うのも無理はない。後でちゃんと説明しなきゃ。
「ほれ、タオル持ってきたぞ」
「ありがとうございます」
　ミゲルさんからタオルを受け取って、彼女は不自然なくらいゆっくりとその灰色の髪

を拭き始めた。
「(さっきも思ったけど、この人はどうしてあんなとこにいたんだろう?それにこの人何か変だ。さっきからずっと何かを気にしてるような……)」
「――の……あの……」
「あ、はい！　何です……かあああ!?」
　彼女の声に呼ばれ視線をあげると、目と鼻の先に人形のように白く整った彼女の顔があった。
「近い！　近いですよ!!」
「呼びかけても返事が無かったので」
　思わず後ろに飛び退く。どうやら僕よりも背の高い彼女は少し屈んでこちらの目線に合わせてくれたみたいだ。
「(って何を冷静に分析してるんだ僕は！　もう少しで鼻先が触れ合っちゃうくらいの距離だったぞ!!)」
　や、やっぱりこの人変だ……何というか、言葉で上手く言い表せない違和感が全身から溢れ出している。
「あの」
「な、何ですか」

今度は少し距離を取って話し始める。
「ここまで連れてきてくれてありがとうございます」
そう言うと彼女は礼儀正しく深々と頭を下げた。
「あ、どういたしまして……」
「改めまして、私の名前はスオンといいます。以後お見知りおきを」
そういえばここまで急だったからお互いに自己紹介もしてなかったな……
「僕はグリフです。よろしくおねがいします」
「グリフ……さん」
”さん”はいらないですよ。多分、というか絶対に僕の方が年下ですから」
「分かりました。それではグリフと呼ばさせていただきます」
「……」
「どうかしましたか」
「いや、何でもないです」
「そうですか」
この人の違和感の正体が少しずつ掴めてきた気がする。
「（話し方がちょっと変……）」
ちょっと変というか、彼女の発する言葉、そのどれもに感情がこもっていない。

抑揚の無い完璧な棒読み。表情だってずっと無表情のまま。まるで感情のない人形を相手している気分だ。
「着替え持ってきたよ」
「ありがとうございます」
「おばちゃんの服でごめんねー」
「いえ、気にしませんので」
そう言ってキャンベラおばさんから着替えを受け取ると、おもむろに自分の着ている修道服に手をかけた。
「ちょ、何やってるんですか！」
「何って……着替えようと」
「向こうで着替えてきてください！」
「分かりました」
もう……ホントに何なんだあの人は……！
「はぁ……何かすごい疲れた……」
「……ねぇグリフ」
「はい？」
「あの修道女（シスター）、やっぱり少し変じゃないかい？」

キャンベラおばさんがそう言うのも当然だろう。僕だってずっとそう思ってる。
「それにアイツのあの格好、どう見ても教会の修道女（シスター）だろ？　俺より若いってのも気になるが……それより、何でデカい都市にいるような人間がこんな辺境の村に来るんだよ」
「……分かりません」
ミゲルさんの言う通りだ。
本来、修道女（シスター）というのは大きな都市、王都なんかの教会に仕える人のことだ。こんな国の最果ての村へ来るなんておかしい。
「……何か、ここに来る理由があるんだと思います」
「理由？」
「この村に何があるって言うんだよ。マジで山と森しかないぜ？」
「それは……」
教会の修道女（シスター）がこんな村に来る理由……
「悪魔……とか」
「なっ……！」
「や、やめておくれよグリフ！　縁起でもない……」
「ですよね……ごめんなさい」

こんな辺境の村に悪魔なんて……そんなことあるはずがない。
でも……
「大丈夫ですよね……きっと僕の勘違いですよね……？」
「ああ！　そうに決まってる！」
「そんなに不安そうな顔をしなくても大丈夫だよ」
明るく笑う二人の笑顔は、いつも僕を元気づけてくれる。
この村にいる人たちの優しさに、僕は救われた。
もし……もしも、悪魔がこの村にいたとしても、今度は僕が皆を守らなきゃ……！
「どうかされましたか」
「何でもな……ってまた近いですよ！」
「そうでしょうか」
「もうちょっと距離感を考えてください！　あと早く着替えてきてください！」
話を聞いていたのか、ビショビショの修道服のままシスター・スオンは目の前に立っていた。
「なぁ、あんた」
僕らの間にミゲルさんが割り込んでくる。
僕が『悪魔』という単語を出してしまったからか、心なしか少し警戒しているようだ。

「確かスオンさんとか言ったよな？」
「はい」
「俺の名前はミゲル。単刀直入に聞くが、あんた修道女（シスター）なんだろ？」
「一応は」
一応……？
「その修道女（シスター）がこんな村に何の用で来たんだよ」
「ちょっとミゲル」
ミゲルさんの言い方はだいぶ荒っぽいけれど、この人が怪しいということは確かだ。
「この村ではずっと雨が振り続けていると聞きました。そうですよね」
「……あぁ」
「それは悪魔の仕業です」
悪魔。
人には扱うことのできない”魔法”を操り、人間に災いをもたらす異形の者たち。
僕らに向かって、彼女は抑揚の無い声で断言した。
「私はそれを退治しに来ました」
僕はその言葉に、諦めかけていた希望を見出した。
この雨を終わりに出来る。

七年間、村の皆を苦しめてきた雨を。
やっと青空が見られるんだ……!
「……この雨が悪魔の仕業だっていう確証があるのか?」
「グリフ、この雨がどのくらい前から降っているか分かりますか?」
「え、えっと……」
「七年前。ちょうどこの子があんたのいた教会で倒れてた時からだよ」
僕の代わりにキャンベラおばさんが答えた。
「倒れていた……」
「あぁ、この子はね。七年前より昔の記憶が無いんだ」
「本当ですか、グリフ」
「……はい」
どうやら僕があの教会で倒れていた時にはすでに雨が降り始めていたらしい。
僕にはその辺りの記憶もあやふやになってしまっている。事実、僕が目を覚ました場所もキャンベラおばさんの家だった。
「確かに僕は記憶喪失です。親の顔も名前も知りません。ただ『自分は”グリフ”という名前の人間だ』ということしか、僕は覚えてません」
ずっと……僕の中は空っぽだ。

「もしかして、僕が記憶喪失になったのも、この雨が止まないのも、全部悪魔の仕業なんですか……？」
「グリフの記憶については何とも言えませんが、七年間も雨が降り続けているのは明らかに異常事態です」
「そして先程の質問の答えですが、このような天変地異を起こせるのは悪魔の使う魔法以外に考えられません」
「で、でもよ……俺たちは七年間で一度もそんな悪魔に遭遇したことないぜ？」
　こんな小さな村だ。悪魔が出たとなれば村中大騒ぎになるだろう。
「悪魔の中には人間に取り憑くものもいます」
「人間に取り憑き、身体を乗っ取って、まるで人間のように振る舞い周囲を騙す……”悪魔憑き”と呼ばれる者たちです」
　え……それって……
「この村の誰かに、悪魔が取り憑いている可能性が高いということです」
「な……！」
　この村はとても小さい村だ。だからこそ皆が助け合って暮らしている。
　僕だって目が覚めてからの七年間、村の人たちにはたくさんお世話になった。
　でも……この村の人たちの中に悪魔が紛れてる……？

そんな……そんなのって……

「いい加減にしやがれ!!」

そう怒鳴るとミゲルさんは彼女に掴みかかった。

「他所から急にやってきて『俺らの中に悪魔が紛れてる』だ!?　適当なこと言ってんじゃねぇぞテメェ!!」

「ちょっとミゲル！　やめなさい！」

「適当ではありません。第一おかしいとは思いませんか？　七年間も雨が降り続けているなんて――」

「そんなの……もう慣れちまったってだけだ！　雨が降るなら降るなりに俺たちは支え合って生きてきたんだよ!!」

「そこが異常だと言っているんです」

怒りをあらわにするミゲルさんに対して、全く怯むことなく続ける。

まるで恐怖という感情そのものが欠落してるみたいに。

「なぜ七年間も雨が降っていて、この村の人たちは生きているのでしょうか」

「は……?」

「もし今日のような大雨が七年もの間続いているのなら、こんな小さな村、すぐに水没してしまうでしょう」

「それだけじゃありません。土砂災害、食糧危機、他にも多くの問題が発生します。そんな環境で人間が生きていける訳がない」
「ではどうやって、あなたたちは『支え合って生きて』これたのでしょうか」
　淡々と続く彼女の言葉を遮ることが出来る人はもうこの場にいなかった。
「考えられる可能性は二つ」
「一つ。悪魔が村の誰かに化け、この雨を魔法によってもたらしている」
「つまり今降っているこの雨が、ただの雨ではなく悪魔の魔法だということです」
「しかし、通常、悪魔の使う魔法というものは一度発動しただけでここまで長期間に渡って継続しません」
「この村で雨を降らせ続けない限りは」
　彼女はまるで感情が無いかのように淡々と説明をしていった。
「だから、村人に紛れてずっと雨を降らせているってことですか……？」
「その通りです。グリフ」
　……理にかなっている、気がする。
　でも何でそんなことを……この村に雨を降らせ続けて、一体悪魔に何の得が……
「グリフ、こいつの言うことを真に受けないほうがいいぞ」
「え？」

「この女、何を企んでるか知らねぇが悪魔だ何だって言って俺たちをたぶらかす気だ」
ミゲルさんは僕の肩を痛いくらい強く掴んで離さない。
「大体、あいつは何であんな使われてない教会にいたんだよ！　悪魔がいるんだとしたらあいつがその悪魔でもおかしくないじゃねぇか！」
「ミゲル……さん……？」
あ、あれ……？
「グリフ？　おい聞いてんのか！」
おかしい……だって……だって……
「ミゲルさん」

「どうしてこの人が教会にいた事を知ってるんですか……？」

「貴様のその願い、叶えてやろう」
悪魔は少女に言います。
「だがな、命を生き返らせるにはそれなりの代償が必要になる」

「貴様は命の代償に、何を差し出す？」

2：旅立ちと雨上がり

「あなたの欲しいものは何でもあげる！」
「だからお願い！」
「あの子を生き返らせて!!」
少女のそんな願いは、神に祈るにはあまりに愚かで、
悪魔に祈るにはあまりに無垢でした。

「グリフ、その人から離れ――ッ」
シスターは人のものとは思えない力に吹き飛ばされ、家の壁に叩きつけられた。
シスターを吹き飛ばしたのは……
「おい！　もう誤魔化すのは無理だ!!」
「キャンベラおばさん……？　一体何を……」
「仕方ねぇ。ガキの方は少し惜しいが女諸共ここで殺すか……」
え？

殺す？　誰を？
……僕を？
ミゲルさんは何を言ってるの？
キャンベラおばさんも、何でそんなに怖い顔をしてるの？
あれ？　あれ？
「二人とも……どうしちゃったの……？」
「まだ分かんねぇのかこのガキは!?」
「それもまぁ仕方ないねぇ～」
「う、うそだ……ねぇ！　ミゲルさん！　キャンベラおばさん！」
今までの二人とはまるで別人のようなその雰囲気に、僕は二人の名前を叫ぶしかなかった。
まさか……二人がシスターの言ってた……
「”悪魔憑き”ですね」
「あ？　……ぶぇッ」
「あなたも邪魔です」
「がっ……！」
ミゲルさんは後ろから蹴り飛ばされ、キャンベラおばさんも自分がされたように壁ま

で叩きつけられた。
「シスター……」
そこにはさっき吹き飛ばされたはずのシスターが何も無かったかのような顔で立っている。
「一度退きますよ」
「えっ」
そう言うとシスターは僕の首根っこを掴んで、とてつもない力で引っ張っていった。
「うわあああああああ!!」
「静かにしてください」
速い！　速すぎる!!　というか僕どこに連れていかれるの!?
「っ……外……!?」
シスターに引っ張られたまま僕は雨の降る外へと飛び出した。
「大丈夫ですか、グリフ」
「そ、それよりどういうことなんですか！　あの二人が悪魔なんて!!」
「正確に言えば彼らは”悪魔憑き”です。人間の肉体に悪魔が取り憑いている状態のことを言って――」
「……？　シスター？」

「……どうやら、想定していた最悪の事態が起きているようです」
周りを見るといつの間にか村の人達全員に取り囲まれていた。
こんなに雨が降っているのに誰一人傘も差していない。
それどころか全員ミゲルさんやキャンベラおばさんと同じ、別人のような目をしている。
「先程私が言った考えられる可能性の二つ目」
「皆……おかしくなっちゃったの……？」
「話が早くて助かります」
”悪魔憑き”……村の全員が悪魔に取り憑かれている……？
もう、皆は優しかった皆じゃないってこと？
そんなの……そんなのって……！
「そんなのってないよ神様ッ!!!」
「僕達が一体何したっていうんだ!!」
「普通に生きてきただけなのに！　なんで!!　どうして!!!」
空に向かって叫んでも一層強くなった雨があざ笑うように降りつけるだけ。
そんな僕をニヤニヤと嫌な笑みを浮かべ見つめる村の皆。
「無駄ダゼ～？　グリフ～」

「っ！」

　腕や足が変な方向に折れ曲がった、ミゲルさんの姿をした悪魔が僕に話しかけてくる。

　話し方も、雰囲気も、もう完全に僕の知っているミゲルさんじゃなくなっていた。

「テメェラハ二人トモ、俺ラニ殺サレテココデ死ヌンダヨ！」

「イクラ泣キ喚イテモ、コンナ辺境ノ村ニハ誰モ助ケニハ来ネェ……」

「ソレニナァ……グリフ!!」

「神様ナンテコノ世ニイネェンダヨォ!!!」

《font:u87》ハハハ《／font》!!!!!

「……うそ……だ……こんなの……」

　こんなの……何かの間違いだ……そうに決まっている……

「グリフ、一つ言っておきます」

「……」

「あいつらの言う通り、この世に神なんていません」

「え……？」
「ギャハハハ!!!　オイオイ！　シスターガソンナコト言ッテイイノカヨ!?」
「残念ですが、神は既に死んでいます」
そう言うとシスターは首にかかった真っ黒な十字架を両手で握って祈りを捧げた。
「【Ｇｏｔｔ　ｉｓｔ　ｔｏｔ】」
「ギャハハ……ハ？」
「なに……これ……？」
すると、どこからともなく吹いてきた黒い風が、シスターを取り囲むように吹いてくる
そうしてその黒い風は徐々に”何か”を形作っていった。
「ハ……ハァ!?」
それは……人だった。
人。真っ黒な骨の人。
「骸骨……」
それも僕らの大きさを遥かに超える、この雨雲に届きそうなほど巨大な骸骨。

「骸骨の……神様」
なぜだがは僕にも分からない。けれど、それを僕は『神様』と呼んだ。
「ナ、ナンナンダヨ！　テメェハ!!」
「修道女（シスター）ですよ。……あなた達悪魔に全てを奪われた、ただの愚かな人間です」
「カマワネェ！　グリフモロトモブッ殺セェ!!」
悪魔達が僕らに向かって一斉に襲いかかってくる。
「【制裁（ザンクツィオーン）】」
シスターがそう唱えると、その骸骨の神様はその巨大な腕を悪魔達へ振り下ろした。
轟音とともに悪魔達が吹き飛ばされていく。
「ンギャァァァァァァ!!!」
「オレノカラダガァァァァ!!!」
「あなたの身体では無いでしょう」
腕を一振りするたびに、皆の身体が黒い灰に変わっていく。
「一体……何がどうなって……」
「悪魔に身体を奪われ、魂までも完全に呑み込まれたら、もはや救う方法はありません。このように肉体を破壊しても灰となって消えるだけです」
そう言ってまたシスターは悪魔達を灰へと変えていく。

「ヤ、ヤハリオマエノソノチカラ……”神ノ加護”カ……！」
「”神の加護”……？」
「私達修道女（シスター）が使う力、その名の通り神から賜った力のことです」
「この力なら、悪魔を消し去ることができます」
そして、その悪魔に取り憑かれた彼らの肉体も。
そうシスターは付け加えた。
「待っていてください。すぐに開放してあげますから」
「ソノ禍々シイ加護ノ力……ッ！　マサカオマエハ!!」
「アノ方ガ言ッテイタ、『骸ノ修道女（シスター）』シスター・ローズ!?」
「骸の修道女……」
シスター・ローズ？　え、でも確かシスターの名前は……
「何ですかそのおかしな呼び方」
「オ、オカシナ!?」
「私はそんなおかしな呼ばれ方をされた覚えはありません」
「それに、シスター・ローズはあの日、死にました」

「今の私は茨(スオン)」
「奪われたものは、必ず取り戻す」
骸骨の目が光り出し、周囲の空気がより一層重くなった。
「ナ、ナンカヤベェゾ……！」
「カラダヲステロ！　ジャマニナル！」
「空ダ！　空ヘニゲロ!!」
皆の身体から、羽をはやした異形の姿をした化け物が空に向かって逃げていく。
「【天罰(ネーメズイス)】」
シスターがそう唱えると、空中へ逃げていく悪魔達へ向けて、骸骨の口から黒い光線が放たれた。
「エ――
その黒い光は悪魔達を飲み込み、そして、
「あ……」
この曇天の空をも突き抜けていった。
そこから差し込む太陽の光は暖かくて、優しくて、
「グリフ、なぜ泣いてるのですか」
なぜだか涙が溢れて止まらなくなった。

「ありがとう……ございます……」
このとき、これは運命だと僕は本気でそう思った。
きっと神様が僕達を出会わせてくれたんだと。
愚かな僕はそう信じていた。
神様なんていないと、本当は分かっていたはずなのに。

「これで最後ですね」
「本当、何から何までありがとうございました」
「構いませんよ」
「死者を弔うのも、我々修道女（シスター）の仕事ですから」
あの後、僕はシスターと共に村の皆の身体を出来る限り集めて埋めた。
黒い灰になった人達。
悪魔が脱ぎ捨てていった肉体。
判別がつく人は全て僕の知っている人達だったけれど、そこに生きている人は一人もいなかった。
「悪魔に取り憑かれた時点で、人の魂は消滅してしまう」

シスターの力を借りてお墓も建てた。
簡易的だけど、眠れる場所があったほうが皆だって嬉しいはずだ。
「シスター」
「なんですか」
「シスターはどうして皆が悪魔に憑かれているって分かったんですか？」
「例の教会から何者かにつけられていたことは知っていました」
……僕は全然気づかなかった。
「それが人間である可能性もありましたが、私達の後に家へ入ってきた彼を見て確信しました」
「ミゲルさんを？」
「ええ、私達を追っていたのは間違いなく彼でしょう」
やっぱり、ミゲルさん……の肉体に取り憑いていた悪魔は、シスターを警戒していたんだ。
「そして家に入ってきた彼の身体は明らかに不自然でした」
「……？」
「彼の身体が綺麗すぎたんですよ」
「あ……」

「あの雨の中私達はずぶ濡れになりました。でも彼は違った」
「濡れてないだけならまだしも、足元にも泥の汚れが全くありませんでした」
　シスターが気にしていたのはミゲルさんだったのか……
「そのことについてあの女性も触れなかったことからこの村に悪魔が、それも複数いるということを推測しただけです」
「……じゃあもしかして僕のことも疑っていたんですか？」
「いいえ、最初からグリフは悪魔ではないと分かっていました」
「え？」
　何で僕だけ？
「悪魔が神に祈りを捧げるなんて話は聞いた事ありません」
「み、見てたんですか……」
「はい」
　何でもないかのように淡々と根拠を告げていく彼女は、やはりどこか現実感が喪失しているようで、人と話している感覚が薄れていく。
「……」
「浮かない顔ですね。まだ何か不安なことでもあるんですか」
「えぇ……まぁ……」

「今まで……僕が記憶を失くしてからの七年間だけですけど、村の皆にはとてもお世話になったんです」
「記憶も無い僕にとって……皆は家族同然だった」
「キャンベラおばさんもミゲルさんも、まるで本当の親みたいで……って言っても二人の方が親子なんですけどね！　あはは！」
「……」
「は……はは……」
　僕の空元気を見破ってかは分からないが、シスターは何も言わずに真っ直ぐこちらを見つめている。
「だから……今まで僕を育ててくれた皆が人間じゃなかったって分かって……今までの皆は最初から偽物だったんだなぁって。そう思って悲しくなっただけです」
「そうでもないみたいですよ」
「……？　どういうことですか？」
「つい先程、悪魔に話を聞きました」
「え！　それ大丈夫なんですか!?」
「はい。消滅寸前だったので。今は完全に灰になりました」
　危機感が微塵も感じられない話し方だ……

「……それで、その悪魔が何か言ったんですか？」
「その悪魔曰く、『最初から村の人間に憑いていた訳ではない』と」
「え……！」
「どうやらバレないよう徐々に時間をかけて村人達に取り憑いていたようです。村人全員が”悪魔憑き”になったのもつい最近だと言っていました」
「つまり、教会で倒れていたグリフを助け、村で引き取って育てる決断をしたのは、紛れもなく村の”人間”達だったということです」
「……」
そう……だったんだ……
僕は……僕は確かにこの村の人達に助けられたんだ……
「ありがとう……皆……」
どうか安らかに。
「……」

『あなた、まだ意識がありますね』
『ナ……ンダ、オマエ……』

『少し質問があります。消滅する前に答えなさい』
『ケッ……嫌ナコ……ッタ』
『先程あなた達の仲間が言っていた”あの方”というのは一体誰のことですか』
『知ラ、ネェ……』
『そうですか。では次の質問です』
『無駄ダゼ……？　シスターサンヨ……オレタチ悪魔が人間ノ言ウコトナンテ聞クワケ……』
『あなた達の中には低級の悪魔しかいませんでした。なのになぜ七年間も雨を降らせるような魔法を操れたのですか』
『聞ケヨクソ女ァ……!!』
『答えなさい』
『……シラネェ……ヨ……』
『そうですか。なら最後の質問です』
『（コイツ、バカナノカ……？）』
『なぜあのグリフという少年だけは悪魔に憑かれていなかったのですか』
『……』
『答えなさい』

『ケ……ケケ……』
『オレタチハナ……スイヨセラレタンダヨ』
『吸い寄せられたとは』
『アノガキニハ……オレタチヲヒキツケル……ナニカガ……アルンダヨ……！』
『オレタチハ……ソレニ……ヒキヨセラレテ……ココヘアツマッテキタノサ……！』
『それはどういう意味ですか』
『ケケケ……セイゼイキヲツケロヨ、ムクロノシスター……』
『アノカタハ……イマモオマエヲ……』

「シスター？　聞いてます？」
「……すみません、少し考え事をしていました。もう一度お願いします」
「えっと……改めてありがとうございました。皆を助けてくれて」
「……彼らを、真の意味で救えたかは分かりません」
「それでも、シスターは悪魔から皆を開放してくれました」
　それだけで、いくら感謝してもしきれないくらいだ。
「それで、シスターはこれからどうするつもりなんですか？」

「私は旅を続けます。悪魔から奪われた物を取り返すために」
「……シスターは、悪魔に何を奪われたんですか？」
「私の……大切なものです」

「感情と、そして家族を奪われました」

「それを取り戻すまで私は旅を続けます」
この人は感情が表に出ない人だと思っていた。
でも違った。
感情を出さないんじゃなくて、出す感情それ自体が欠落している。
この人には感情が無いんだ。
「信じられませんか」
「そんなことは！　……少し、納得しただけです」
話し方や表情に生気を感じられなかったりしたのも当たり前だ。
人間から感情を取り除いたら、それこそ人形と変わりないじゃないか。
「グリフ、あなたこそこれからどうするんですか」
「え、僕ですか？」

もうこの村には僕以外誰もいなくなってしまったし、かと言って他にやりたいことも……

「シスター」

いや、本当はある。やりたいこと。

「僕、一緒について行きたいです」

「……」

「ダメ、ですか……？」

「理由を聞かせてください」

「……僕は今日、初めて悪魔という存在をこの目で見ました。とても怖かったけど、それ以上の”何か”を感じたんです」

「その”何か”とは？」

「上手く言えないですけど……どこか懐かしい感じがしたんです。……多分それは、僕の失くした記憶に関係がある」

何の確証も無い、ただの妄想。

「だからお願いします！　僕も連れていってください！」

だけど縋らずにはいられない。

だって……僕にはもうそれしか無いから。

もしも僕の失くした記憶が、この村の悪魔達に関係があるとしたら……
なぜ僕だけが悪魔に憑かれなかったのか、
なぜ僕だけが生き残ったのか、
僕を助け、そして生かしてくれた村の皆のためにも。
「僕は知らなきゃいけないんです！」
もう、祈ってばかりじゃいられない。
少しだけ考えるような素振りを見せたあと、無感情に告げた。
「分かりました」
「……！」
「私も、あなたの過去には興味がありますので」
「……え？　シスターが、ですか？」
「はい」
「……」
「どうかしましたか」
「……何でもないです」
ダメだ。この人が何を考えてるかは顔を見ても分からない。
「私はすぐにでもこの村を発ちます。ついてくるなら準備をしてください」

「も、もう行くんですか!?」
「はい、もうこの村でやることはありませんので」
「ちょ、ちょっと待っててください！　すぐに準備してきますから！」
雨上がりの空の下、僕達は旅立つ。
感情を失ったシスターと、記憶を失った僕。
得たものは少なく、失ったものは多く、
けれど僕らは前に進み、
……そして安らかに眠るまでの物語だ。

気がついたときには、少女から感情が抜け落ちていました。
これであの子が生き返るという喜びも、
人知を超えた存在に対する驚きも、
悪魔に全てを捧げる恐怖も、
悪魔への嫌悪も、
感情が奪われた悲しみも、
あの子を奪っていった悪魔への怒りさえも、

もう少女にはありませんでした。

3：迷いの森と赤頭巾

「シスター！　シスターー!?」
　こんな深い森の中でシスターを呼んでみてみても、返ってくるのは不気味な木々のざわめきだけ。
「はぁ……もう、どこに行っちゃったんですかシスター……」
　セトルグラへから一番近い街まで、この森を通るのが近道だって……
「言うんじゃなかったかなぁ……」
　事の始まりは数時間前、僕が荷物をまとめ終わり、いざ出発というときになってからの事だった。

「……あれ？　シスター、そういえばどこか目的地はあるんですか？」
「先程も言いましたが、私の目的は悪魔を――」
「いや、そうじゃなくて……どこか目的の街とかは」
「ありません」

そ、即答……

この人、感情が有る無いとかそういうの抜きにしてもだいぶ大雑把だぞ……？

「グリフ、ここから一番近い街はどこにありますか？」

「えーっと……地図によると、こっちの森を抜けた先に少し大きめの街があるみたいです」

「そうですか……」

「……？　どうしたんですか？」

「本当にその荷物持っていくんですか？」

「はい、そうですけど……」

旅に必要そうな着替えとかそういうの諸々詰め込んだカバンだけど、もしかしてこれだけじゃ足りなかった？

「いえ、足りないというより寧ろ多すぎ、大きすぎかと」

きっとシスターは僕が小さいから心配してくれてるんだ。

でもこれくらい僕だって……両手持ちなら！

「大丈夫ですよ！　これくらい持って歩けます！」

「……」

おかしい。感情が無いはずのシスターから疑惑の視線を向けられている気がする。

「とにかく！　僕は大丈夫ですから!!」
「そうですか」
「……というか、シスターは何も持ってないんですけど……今までどうやって旅してきたんですか」
「私にはこの十字架があればそれで十分です」
　こんなやり取りをしているから、地図に書かれた『迷いの森』という文字も見落とすんだ。
　まぁ、今更後悔しても遅いけど。

～【迷いの森】～
「結構深い森ですね……」
「そのようですね」
「……なんか暗すぎませんか？　今はお昼の筈なのに全然日光が届いてない」
「木々の葉が太陽光を遮っていますね」
「多分ここ、夜になったら真っ暗ですよ……」
「では急ぎましょう」

薄暗くて嫌な雰囲気の森だな……森に生えてる木もちょっと怖いっていうか……壁のシミが人の顔に見えるみたいな、そんな感じで木の形とかが――

「っと、ごめんなさい」

いけないいけない。考え事をしていたら前を歩いていたシスターとぶつかっ……

「え？」

シスター……じゃない。

僕がぶつかったのは大きな枯れ木、その幹のあたりに頭をぶつけてしまった。

「シスター？」

周りを見渡してもあるのは一面の雑木林。

「……え？」

そして現在に至る。

「とりあえずシスターを探すしかないか……」

探すって言ってもどこを？

「んー……こっちかな」

僕がぶつかった枯れ木から左右に道が別れている。僕はその右側を選んで進み始めた。

「シスターー！　どこですかー！」

歩きながらシスターを呼んでみるが、やっぱり返答はない。

やがて喉は乾き、足も重くなってくる。

「はぁ……おもっ……」

持ってきたカバンを半ば引きずりながら進む。

「ハァ……ハァ……」

出口が見えない。一本道なのが唯一の救いか……

「ちょっと休憩……」

カバンを地面に置き、そばに生えていた枯れ木に背を預ける。

ん？　枯れ木？

「え……この枯れた木……」

間違いない。僕がシスターとはぐれたことに気づいたときの……

「もしかして……戻ってきた？」

背中に嫌な汗がじんわりと滲んでいく感覚を覚えた。

「……ッ！」

休憩を早めに切り上げ、カバンを持って走り出す。
今度は左側の道へ、嫌な予感を振り払うように全力で走った。
「あがッ！」
地面から飛び出した木の根っこに躓いて頭から転んでしまう。
「いったぁ……あ」
人の嫌な予感ほど的中すると言ったのはミゲルさんだったっけ？
まぁ、僕にそれを言ったミゲルさんが人間だったかどうかは分からないけれど。
悪魔だろうと人間だろうと、ミゲルさんの言ったことは正しかった。
起き上がった先にあったのは一本の枯れた木、そして分かれ道。
「……戻ってきてる」
行けども行けども出口が見えないわけだ。ずっと同じところをグルグル回っていたんだから。
「え、でももう道は……」
ない。
右の道も左の道も、どちらの道を選んでもここに戻ってきてしまう。
というかこの分かれ道の先が僕が今いるこの場所に続いているなら、僕とシスターはどこから来たんだ？

「この森、普通の森じゃないぞ……？」
地図を開いてこの森の全体像を把握しようと試みる。
「迷いの森」
遅すぎた。
こんな丁寧に名前がつけられている。『迷いの森』なんて名前が。
「ど、どうすれば……」
このままじゃシスターと合流するどころかこの森から出られないぞ!?
でも、こんな同じような木ばかり生えている森からどうやって出口を見つければ……
「……待てよ？　そういえばなんでこの木だけ枯れてるんだ？」
他は全部同じような木なのに、何でこの木だけ……
「あれ、何これ？」
よく見ると木の根っこに光るなにかが刺さっていた。
「……斧？」
銀色に光り輝く、片手で持てそうな大きさの両刃斧が枯れ木の根っこに深々と突き刺さっている。
思わず手にとってみる、がびくともしない。
「うわっ、結構深く刺さってる……」

カバンを置いて、今度は両手で思いっきり引っ張ってみる。
「ぐぬぬぬぬ……」
「とりゃあああ!!!」
勢いで手から飛んでいきそうになったが、無事銀の斧は木の根っこから抜けた。
一面銀色に光る斧。装飾品のように飾りがあしらえてある。
「綺麗な斧だ……あとだいぶ重い」
何だこの斧、僕のカバンくらい重いぞ？　両手じゃないととてもじゃないが持ち上げられない。
「僕って、自分が思ってるより非力なのかなぁ……」
『深く突き刺さった斧を抜く』という一仕事を終えた後だったからだろうか……
そんな隙をつかれてしまった。
「え？」
斧が刺さっていた部分から、無数の木の根が僕に向かって伸びてきた！
「え!?　ちょ、待っ――」
どうやら僕は、自分が思ってるより非力で、どんくさかったみたいだ。
あっという間に全身を木の根っこに縛り上げられた。
「う、うわあああ!!!!!」

すごい力で締め上げられ身動きが取れない。
「抜け出せない……！　誰かた――むぐ!?」
マズイ！　口をふさがれた!!
「（この木……成長、いや再生してる……!?）」
さっきまで枯れ木だったのに、もう他の木と同じような木になっている。
唯一違うのは、僕に攻撃してきているという所だけだ。
「（息が……もう……）」
僕は……死ぬのか……？　こんなところで……？
「（いや……だ……）」
やっとなのに……やっと変われると思ったのに……！
あの村でただ祈っていただけの僕から、やっと変われるって！　そう思っていたのに!!
「（死にたく……ない……！）」
死にたくない。
まだ、死ねない。
「（死にたくないッ!!!）」
動け、動け！　動け!!

こんな木の根っこが何だって言うんだ！　簡単に諦めるな!!

「（この斧なら……もしかしたら……！）」

もし僕が斧を抜いたことで枯れ木が再生したのなら、それはこの斧でもとに戻すことが出来るということ！

幸い斧は手に持っている、後は腕を動かせれば！

「（千切れろ……千切れろッ……!!）」

腕を封じているこの根を……千切れば……

「（だめ……か……いや、まだだ……！）」

最期の……一瞬まで……

「（あきら……める……な……）」

――ダァン!!

「……っ！　ゴホゴホッ!!」

息が、出来る。

僕を締め上げていた根っこはバラバラに切り落とされ、僕の身体は自由になった。

誰かが助けてくれたのか……？

「シスター！　……じゃない」
また間違えたけれど、今度は木じゃなくて女の人だ。
ベージュ色のボサボサとした長髪。
まるで宝石のように紅く、獣のように鋭い瞳。
そしてその瞳と同じくらい赤いフードを羽織った女の人。
その手には古びた猟銃と、そして僕が拾った物と同じ、銀の斧が握られていた。
「あ、あなたは……」
「話は後だ！　とっととずらかるぞ！」
「え！　あ！」
首根っこを掴まれ、すごい速さで引っ張られる！
「またこんな風に引っ張られるのぉぉぉぉぉぉ!!??」
どうやら僕は非力でどんくさい上に、雑に運びやすいらしい。

「ここまで逃げりゃあ十分だろ」
「うぇ……おぇ……」
なんなんだこのひと……めがまわる……

「ったくよ……何だってこんな森に迷い込んでやがんだよテメェは」
「え……えっと……」
「……まあいい」
　僕の目の前に手が差し出される。
「……？」
「その斧、返せ。オレのだ」
「あ！　どうぞ……」
　やっぱりこの人の斧だったんだ……
「よかった……」
「あの……あなたは……」
「ほら、この道を真っ直ぐ行きゃ森を抜けられるだろうよ」
「……え？」
　指を指した先には、確かに今まで通ってきた道とは違う一本道が続いている。
「ガキはさっさとママのところにでも帰んな」
「ま、待ってください！」
「あ？」
　この人……なんか怖いな……

喋り方もぶっきらぼうだし……でも、悪い人じゃない……のかな？

「何だよガキ、何かあんのか？」

「まだ森の中に残ってる人がいるんです！」

「……はぁ!?」

彼女はその紅い瞳を大きく見開いた。

「おいおい……テメェらこの森が今どんだけ危険なのか知ってんのか!?」

「い、いいえ……」

「何も知らずにこの森に入ったのかよ……」

呆れられてる……

「いや、まぁ知ってたら普通入んねぇよなこんなとこ……」

「この森ってそんなに危険なんですか……？」

「チッ……ああ、そうだよ」

全身から面倒くさいというオーラを出しながらも、紅い瞳の彼女はこの森について説明してくれた。

「この『迷いの森』はな、名前の通り一度入ったものを迷わせるっー厄介な森なんだよ」

「テメェも見ただろ？　あの動く木を。あいつらのおかげで出口までの道のりが漏れなく潰されるってわけだ」

「だからいくら歩いても同じ場所に戻されたんだ……」
　やっぱりこの森を通るのはマズかった……
「だがな、こういう物には必ずタネがあるもんだ」
「タネ？」
「当たり前だろ。んなクソ面倒くせぇ木が勝手に生えるわけ無ぇだろうが」
「そうですよね……じゃあ」
「悪魔」
「……え？」
「どっかのクソ悪魔が裏で操ってやがんだ。んでオレがそれを討伐しに来たってわけだ」
「ま、また……？」
　不気味に笑う村の皆（悪魔）の顔が、僕の脳裏をかすめていく。
「だから危ねぇんだよ。ガキは帰りやが……」
　ほとんど反射的に、僕は彼女の赤いフードの裾を掴んでいた。
「……おい、何してんだ」
「僕も連れてってください」
「は？」

「まだ森の中に残ってる人がいるんです……放っておけません！」
「はぁ……んなもん、知らずにこの森に入ったそいつの自業自得だろ。いいから離せ」
「……嫌です」
「離せ」
「嫌です!!」
「ッあーーークソがッ!!　テメェ何なんだよマジで!!!」
「連れてってくれるまで絶対に離しませんから!!」
「テメェみたいなガキは足手まといになるのがオチだ!!　死にたくねぇならとっとと――」
「ないですよ！　帰るところなんて!!」
「……ッ！」
　少し怯んだのか、赤いフードの彼女は驚いたような顔でこちらを見てきた。
「今、森の中で彷徨ってる人は僕の恩人なんです」
「ここで逃げたら、僕はあの人を見捨てたことになる……そんなの、出来るはずがない!!」
「……じゃあ、テメェには一体何ができんだよ」
　僕に……出来ることは……

非力で、どんくさくて、シスターみたいに特別な力もないけれど……

「……ぁ」

「聞こえねぇよ、もっとデカい声で喋れ」

「諦めないこと!!」

「……」

「ができます……」

「……ハッ」

「アッハッハッハッハッハッハッハッハ!!!」

涙目になりながら彼女は笑う。

「あーあ、笑った笑った」

「なんで笑うんですか……」

「いや悪い、思ってもみなかった返事が返ってきたからよ」

「……」

「でもよ、口だけなら誰だって言えるぜ?」

「覚悟はあんのかよ　あ?」

「約束します！　僕は何があっても諦めません!!」
　こちらを見定めるように見つめてくる紅い瞳を、精一杯真っ直ぐ見つめ返す。
「……お前、中々いいじゃねぇか。見どころあるぜ」
「え？」
「手伝ってやるよ、お前の恩人探し」
「本当ですか!?」
「ああ、だがさっきも言った通り、この森は今悪魔がいる可能性が高い。オレの側を離れたら死ぬと思え」
「……わ、分かりました」
　待っててくださいシスター……今行きます……！

4：赤頭巾と大樹の悪魔

～【迷いの森・深部】～

「おいガキ、お前が探してる奴とはどこではぐれたんだ？」
「それが、気づいたらいなくなっていたというか」
「なるほどなぁ……」
「あ、でもこんな森の奥深くじゃなかったと思います」
「だろうな」
「だろうなって……一緒に探してくれるんじゃなかったんですか？」
今、僕……というかこの人は森の奥深くへと迷うことなく進んでいっている。
〝迷うことなく〟というのも、彼女は道を通らず、木を斧で傷つけながら、その間を縫うようにして進んでいっている。
「バカお前、先にこの面倒くせぇ森の元凶ぶっ潰す方が早ぇだろ」
「それは確かにそうかもしれませんけど。その元凶がどこにいるか分かるんですか？」
「あぁ、この森の中から悪魔の気配を感じるんだよ」
「……そういうのって分かるもんなんですか？」

「奴ら悪魔は言うまでもねぇが人間とは全く違う存在だ。人知を超えた生命力、それに加えて”魔法”なんてもんを使う奴らだっている」
魔法……僕の故郷、セルトグラへに七年間雨を降らせ続けた悪魔が使っていたっていう……
「じゃあこの森にいる悪魔も……」
「使ってるだろうな、魔法」
「しかもこんな森全体を操るデケェ魔法なんて、そんなん上級の悪魔くらいしかできねぇ」
「ビシビシ感じるぜ……この森の奥から、クソ悪魔のどす黒い気配が」
不敵な笑みを浮かべながら、彼女は邪魔な木の枝を銀の斧で切り落として道を開いていく。
「な、なんだかどんどん周りが暗くなってきてませんか……？」
「それだけ奥に進んでるってことだろ。離れんじゃねぇぞ」
「はい……！」
僕はより強く彼女の赤いフードを握りしめた。
「……おい」
「な、なんですか……？」

「『離れんな』って、別に『ずっと掴んでろ』って意味じゃねぇからな」
「で、でも！　さっきは真後ろに付いていったのにいつの間にかはぐれたんです！」
「チッ……クソガキが……」
「……歩きにくいですか？」
「まぁいい。好きにしろ」
　この人、口は悪いけどそんなに悪い人じゃないのかな……シスターを探すのだって協力してくれるみたいだし……
「あれ……？」
「あ？　んだよ、何かあったのか？」
「あ！　いや何でもないです！」
　この人、何でこの森に来たんだろう？
　悪魔がいるって分かってるのに、わざわざ……
『どっかのクソ悪魔が裏で操ってやがんだ。んでオレがそれを討伐しに来たってわけだ』
　悪魔退治……？　この人も修道女（シスター）なのか……？
　いや、でもシスターとは格好も喋り方も全く違うし……
「何見てんだよ」

僕の視線に気づいたのか、こちらを振り返ってきた。
「斧……」
「あ？」
やば……声に出てた……
「その斧、何であんな場所に刺さってたんですか？」
「あんな場所？」
「僕を襲ったあの木に刺さってたんですよ。それで僕が斧を抜いたら急に襲われたんです」
「ほーん」
「……その斧、普通の斧じゃないんですか？」
「なかなか鋭いじゃねぇか。この斧は特別製……」
「……？」
「悪いなガキ。その話はまた後だ」
歩き始めて数十分、僕たちは森の奥の開けた場所へとたどり着いた。
不自然なくらい広い空間の中央に、他の木より一際大きい木が一本だけそびえ立っている。
「いかにもって感じだな……」

あれが……元凶……？

そう思ってその大木に一歩近づいたその時、

「ッ！　ガキッ!!」

「え？」

僕は後方思いっきり突き飛ばされ、地面に倒れてしまう。

「なにを……!?」

「ボサッとすんな!!　さっさと邪魔にならねぇとこに逃げやがれ!!」

彼女の方を見ると既に無数の木の根に囲まれていた。

それだけじゃない。さっきまで何もなかった地面から、木の根が大量に生えてきている。

「だ、大丈夫ですか!?」

「テメェは自分の心配だけしてろ!!」

そう吐き捨てると、彼女は両手に持った二丁の銀色の斧で自分に纏わりつく根を切り始めた。

「ウゼぇんだよ！　クソ植物がッ!!」

「すごい……」

彼女の斬撃は、素早く、そして荒々しく根を切り落としていく。

しかし……

「ッ！　キリが無ぇ!!」

切り落としても、切り落としても、次から次から根が生えてくる。

やはり大元を叩かなければ……

「……！　あの木、光ってる……！」

大木の中心部分から紫色の光が漏れている。

「やっぱりこの根っこはあの木のか！」

「おいガキ!!　何ボーッとしてやがる!!」

「あの大きな木の中央！」

「あ!?」

「あそこだけ変に光ってます!!」

「……ハッ！　やっぱり核持ちかよ……！」

〝核持ち〟?　……よく分からないけど多分それを壊せばこの木は止まるってことか!?

「よく見つけたガキ！　後は任せ――」

『後は任せろ』そんな彼女のセリフが言い終わらない内に、大木の根が一斉に襲いかかってきた。

「……ッ!?」
「ガキ!!」
僕に。
「なんのッ……!!」
思いっきり横に飛び退く……というより受け身を取らずに地面へと倒れた。
顔が地面に擦り付けられて痛いが、今度は掴まれる前に間一髪避けることができたようだ。
「油断すんな！　すぐに立て!!」
「うわっ!!」
続けて二回、三回と木の根が僕に向かって伸びてくる。
この木の根のスピード、僕を縛り付けるというよりそのまま貫く気だ……！
「うわあああああ!!!」
やばい！　やばい!!　やばいぃ!!
捕まったら死ぬ！　いや、捕まらなくても死ぬ!!
「おいおい……何で急にガキを狙い始めやがった……」
「来ないでえええ!!!」
「そのまま死なずに逃げてろ！」

「無茶言わないでください!!」
　いくら山奥の村で育ったからって無茶だ!!
「オレはその隙に核を……ッ！」
　追撃。しかし僕にではない。
「二人に同時に攻撃してる!?」
「そりゃ人間じゃなくて木だからな！　根数(手)はいくらでもあるってわけだ！」
「この木！　やっぱり悪魔が取り憑いてるんですか!?」
「１００％悪魔憑きだ!!　ったく……面倒くせぇ物に憑きやがって……！」
「ハァ……ハァ……僕はどうすればいいですか!?」
　やば……もう体力が……
「チッ……喋ってねぇで足を動かせ!!」
「(どうする……このままじゃジリ貧だぜ……かと言ってここから銃で狙おうにも木の根で斜線切りやがる……)」
　何とかしてあの木まで彼女の攻撃を届かせないと、逃げてばっかりじゃ僕たち二人ともここで死ぬ……
　だけどあの木に近づけば近づくほど根の攻撃は強まる……
　圧倒的に絶望的。

神に祈りたくなるほどに。
でも僕は祈らない。
だって……
『残念ですが、神は既に死んでいます』
「スウゥゥゥゥ……」
「……？　あのガキ、何を――」
「シスタアアアアアア!!!!」
僕が祈るのは”神に”ではない。
”人間に”だ。

「【Ｇｏｔｔ　ｉｓｔ　ｔｏｔ】」

「シスター！」
「な……なんじゃありゃあああああ!?」
千切れんばかりの僕の叫び、それに応えるようにシスターが飛び出してきた。
「【制裁（ザンクツィオーン）】」
暗く、黒い骸骨の拳が、突如現れたシスターを迎撃しようと伸びてきた根ごと、大木

の中心部に光る核を貫いた。

「ありがとうございますシスター！」
「どこに行ったのかと思っていましたが、こんなところにいたのですかグリフ」
「ご、ごめんなさい……怒ってます？」
「怒っていません。〝怒り〟も私の中にはありませんので」
　なんか、安定の棒読みと無表情で安心するなぁ……
「それで、この人はどちら様ですか」
「えっと……この人は僕を助けてくれた人で……」
　あれ、そういえばまだ名前を聞いてなかったっけ……
「オレのことはレフでいい」
「レフ……さん。僕はグリフと言います。さっきは助けてくれてありがとうございました！」
「はじめまして。私の名前はシスター・スオン。以後お見知りおきを」
　僕を助けてくれた赤いフードのレフさんに、丁寧にお辞儀をするシスター。
「んなことはどうでもいいんだよ。おい骨女」

「ほ、骨？」
「……私、ですか」
「テメェ以外にいねぇだろ」
確かにシスターの”神の加護”は骸骨のような形だけど……普通、初対面の人にそんなこと言う？
「さっきのは一体何だ？　見た感じテメェ、修道女（シスター）だろ」
「はい、私はシスターで、先程使ったのは”神の加護”の力です」
「バカ言うな！　あんな邪悪の根源みてぇな神がいるかよ!?」
「そう言われましても、今はあれが私の加護の力です」
高圧的なレフさんの質問に、無表情で淡々と返すシスター。
怯えたり嫌悪感を一切示さないシスターに、レフさんは少しだけ怯んだようだった。
「……なんかお前、気持ちわりぃな」
「そうでしょうか」
「ちょっと、流石に言いすぎじゃ……」
「だってよ、人間と話してる感じがしねぇ」
「それはおそらく私の”感情”が無いからだと思われます」
「はぁ？」

「シスターは……その……」
　僕はレフさんにシスターが悪魔に感情を奪われたこと、それを取り返すために旅をしていることを伝えた。
「なるほどなぁ……悪魔に感情を、ねぇ……」
「はい」
「おい骨女」
「スオンです」
「テメェから感情を奪った悪魔ってのはどんなのだ？」
「え？」
　何でレフさんはそんなことを？
「……よく覚えていません。私の前に現れた悪魔は名乗りませんでした。それに――」
「七年も前のことですから」
「……え？」
　七年前？
「シスター……」

「はい、グリフの記憶が失くなったのと同じ時期です。……てっきりそれを知っててついてきたのかと思っていました」
「いや！　全く知りませんでしたよ！」
　シスターが感情を奪われたのと、僕が記憶を失くした年が一緒……
「単なる偶然……？」
「にしては出来すぎだぜ」
「レフさん？」
「オレも悪魔に目の前で家族をぶっ殺されてる。七年前にな。この斧と猟銃は家族の形見だ……ったく、何の冗談だよ……」
　レフさんの苦々しい表情は、それが勘違いや嘘の類ではないことを物語っていた。
　シスターが感情を奪われ、僕が記憶を失くし、そしてレフさんの家族が殺された七年前。
「やっぱり同じ悪魔の仕業ってことなんでしょうか？」
　レフさんの言った通り、偶然にしては有り得ないくらい出来すぎだ。
「さぁな、とりあえずお前ら、オレと一緒に来い」
「どこへですか？」
「この近くに街がある。オレのギルドがある街だ」

「ギルド？」
「やはりあなた悪魔祓（エクソシスト）いでしたか」
「まぁな」
「エク……なんですかそれ」
「話はギルドについてからしてやる。とにかくこんな森からはさっさと出ようぜ」
「待ってください」
　レフさんをシスターが呼び止めた。
「なぜあなたは私達にそこまでするんですか」
「……別に、大した理由はねぇよ」
「テメェらには世話になっちまったからな。あの木を殺した”報酬”として色々教えてやる……オレも、お前から感情を奪ったっていう悪魔について、色々聞きてぇし――」
「？」
　少し言葉を濁したレフさんは苦々しくこう続けた。
「オレは家族を殺した悪魔を、死んでもぶっ殺さなきゃならねぇんだ。それに少しでも繋がるってんなら、喜んで協力するぜ」
「……どうしますシスター？　この人、ちょっと怖いですけど悪い人じゃ……」
「分かりました。案内をお願いします」

そ、即決……

「よし、じゃあついて来な」

僕たちは迷いの森でレフと名乗る赤頭巾の狩人と出会った。

悪魔を殺すことに異常なまでの執着を見せる彼女。

彼女の物語もまた、僕とシスターの物語に交錯し、複雑に絡み合っていく。

が、その前にまず……

「あ!!」

僕がカバンを森の中に忘れてきたのに気づいたのは、レフさんの案内で街に着いた後だった。

5：修道女と悪魔祓い（エクソシスト）

～【商業都市ホリー】～

レフさんの案内で森を抜け、商業都市ホリーへとたどり着いた僕とシスター。

「着いたぜ。ここがオレのギルドだ」

「大きいですね」

「はぁ……」

「どうしたグリ坊、元気ねぇじゃねぇか」

「だって僕の荷物が……というか何ですかその”グリ坊”って？」

「テメェの名前だよ」

「僕の名前はグリフです！」

「どっちも変わんねぇだろ」

……これがレフさん流のコミュニケーションの取り方なのだろうか。

「それにしても……この街には人がたくさんいますねシスター」

「そうですね」

「僕のいたセルトグラへとは比べ物になりませんよ！」

「この街は商業都市ですから、人の通りも多くて活気があります」
周りを見渡せば、村じゃ見たことないようなお店が多く並んで、そこを更に多くの人々が行き来している。
そして何より目を引くのが街の中心にそびえ立つこの建物。
レフさんが言うには悪魔祓(エクソシスト)いギルドだとか何とか……
「シスター、悪魔祓(エクソシスト)いってなんですか？」
「名前の通り、悪魔を祓うことを生業とする人間たちのことです」
「……？　修道女(シスター)と同じってことですか？」
「いや、修道女(シスター)とオレたち悪魔祓(エクソシスト)いは、確かにやってることは似てるが本質は全然違ぇ」
「基本的に悪魔ってのは不死身の化け物だ。普通の武器じゃ絶対殺せねぇ」
「不死身の悪魔を殺せる力、それが修道女(シスター)の使う”神の加護”っつう力だ」
シスターが呼び出していた、あの黒い骸骨のことか……
「”加護”ってのは悪魔が使う”魔法”みたいなもんだな。でもオレたち悪魔祓(エクソシスト)いにはそれがない」
「え？　でも悪魔祓(エクソシスト)いって悪魔を倒すんですよね？」
「あぁ。だからオレたちはコレで悪魔をぶっ殺すんだよ」
そう言って、レフさんは銀の斧を自慢気に僕の目の前に差し出した。

「悪魔の弱点は”神の加護”ともう一つ、それが銀だ」
「彼女たち悪魔祓いは、銀で出来た武器を使って悪魔を殺します」
「普通の武器じゃ刺そうが切ろうが奴らは殺せねぇ」
　レフさんが斧を振り回す。危ない。
「けどコレで殺せば奴らは死ぬ。まぁ上級の悪魔とかになると核をぶっ壊さなきゃ死なねぇけどな」
「核……あの森にいた悪魔が持ってたっていうやつですか？」
「そうです」
「そういえば僕、悪魔について全然知らないんですけど……」
「おい、さっさと入るぞ！」
「え！」
「知りてぇなら中で話してやるよ！」
　レフさんに腕を引っ張られ、僕とシスターはギルドの中へと足を踏み入れた。
「悪魔祓いたちが集まり仕事の依頼を受ける集会所、それがギルドです」
「ちょ、引っ張らないでください！」
「骨女の説明で基本的には間違いねぇよ」
「そんでもってようこそ！　オレたちのギルド、『御伽話の人形達』へ！」

鼻をツンとさすお酒の匂い、いかにも屈強そうな人たちの豪快な笑い声、そして人々の活気に溢れた空間。
ここが……悪魔祓いギルド（エクソシスト）……！
「歓迎するぜ？　グリ坊、骨女」

～【御伽話の人形達（グリムドールズ）】～
「『赤頭巾』！　どうよ調子は？」
「まぁまぁだな」
「お、『赤頭巾』そっちのチビとべっぴんの姉ちゃんはなんだ？」
「オレの客だよ、テメェら手出すんじゃねぇぞー」
「ガッハッハ!!」
自分よりも遥かに大きい男の人たちに、物怖じすることなく堂々と話しをしているレフさん。
「よぉ姉ちゃん、子連れかい？」
「いえ、グリフは私の子供ではありません」
「姉ちゃん中々にイイ体してんじゃねぇか……」

「ありがとうございます」
　僕、というかシスターは既に怖そうな人たちに囲まれてます。
「おい！　手出すなっったろうが！」
「分かってるよ。この姉ちゃん修道女（シスター）だろ？　もうあんな体験はしたかねぇぜ」
「あぁ、全くだ」
「……？」
　まるで思い出したくないことを思い出したような苦々しい顔をして、なぜか男の人たちはシスターから距離を取った。
　この人たちもレフさんと同じで、怖そうだけど悪い人じゃないのかな……？
「マスターはいるか？　コイツらと会わせたい」
「マスターなら……」
「儂を呼んだか？」
　野太い声が僕らの背後から聞こえた。
　『マスター』と呼ばれたその人は、茶色い髪に、立派な髭を生やした、まるで熊のような大男だった。
「……」
「……」

あまりの大きさに僕もシスターも言葉を失う。
「よく帰ってきたなレフ」
「よおマスター。早速だがオレが受けた仕事なんだけどな……」
「何か問題でも起こったか？」
「『赤頭巾』が受けた仕事って言ったらよ、あの『迷いの森』の悪魔討伐だろ？」
「噂じゃ上級悪魔らしいぜ？」
「マジかよ！　……まさか仕留めそこねたのか？」
「バカ言うな！　返り血でフードが真っ赤になるまで悪魔をぶっ殺し続けたっていう、あの『赤頭巾』の異名をもつレフだぜ？　万が一にも有り得ねぇよ！」
『赤頭巾』というのはどうやらレフさんの通り名的なものらしい。
「倒したことには倒したんだけどよ、オレじゃなくてそこの骨女がやったんだ」
「ん……？」
鋭い眼光がこちらへ飛んできた。
「はじめまして。シスター・スオンと申します」
「こ、こんにちは！　グリフです！」
「儂はこのギルドのマスターをやっているヴィルヘルムという者だ。ようこそ我らがギルドへ」

意外と言ったら失礼だけど、ヴィルヘルムさんは物腰柔らかく僕らに挨拶した。
「おい……あの姉ちゃんが上級の悪魔を殺ったのか……」
「何者だあの姉ちゃん……」
「だからまあ、今回の仕事の報酬はオレじゃなくてコイツらにやってくれよ」
「そうか……だがレフ、そういうわけにもいかん」
「はぁ!?　何でだよマスター!」
「悪魔祓い（エクソシスト）ギルドが受注した仕事というのは、悪魔祓い（エクソシスト）で完遂するのがルールだ。余所者……しかも修道女（シスター）にその報酬をやるというのは規則に反する」
「チッ……頭固ぇな」
「気持ちは分かる、が仕方ないことなのだ」
レフさん、悪魔にとどめを刺したのがシスターだから、シスターに自分の報酬をあげようとしてたのか……
やっぱりこの人はいい人だ。
「そういうことだ。すまないなお客人」
「私たちは元々報酬が目当てではありませんので」
「ならよ!　コイツらに情報をやるってのはどうだ?」
「情報?」

「コイツら訳あって旅をしながら悪魔を狩ってるんだとよ。だからなんか情報くれ！」
「……レフ、お前はもう少し丁寧な説明を心がけろ」
「あの……僕で良かったら説明します……けど……」
「頼む」
僕はレフさんに説明したのと同じ内容を、なるべく丁寧に説明した。
恐怖から口が回らず途中で何回か噛んだけど。
「……というわけで、僕たちはシスターから感情を奪った悪魔を探してるんです」
「なるほど。だからその悪魔についての情報が欲しいと……」
「マスター！　別にいいだろ？　情報くらいさ」
「情報というのもバカにならんぞ」
「……知ってるよ。言葉の綾ってやつだ」
身長的なこともあってか、一気にレフさんが子供っぽく見えてしまう。
「はぁ……やれやれ。まあいいだろう」
「悪魔についてはまだまだ解っていないことも多い。知っている限りの情報なら、こちらも教えることが出来る。……それでどうだ？」
「構いません。というよりこちらとしては願ったり叶ったりです」
……案外滞りなく話は進んだ。

悪魔祓い（エクソシスト）という人たちは修道女（シスター）と仲が良かったりするのだろうか？　それともここの人たちが単にいい人なだけか……

「それで、お客人はどんな悪魔を追ってるんだ？」

「……実はよく分かっていません。なので最近起きた悪魔関連の妙な出来事などを教えてください」

「妙な出来事……最近はやけに上級の悪魔が多く出現しているということくらいか」

「上級ですか」

「うむ。上級悪魔は個体数も少ないはずなのだがな……」

「しかもよ、その上級の悪魔も変なやつばっかで調子崩されちまうぜ」

「レフ、その”変”とは？」

「悪魔、とりわけ上級の奴らってのは基本的に調子乗ってるやつが多いんだよ」

　ちょ、調子に乗ってる……？

「奴らは他の悪魔より力を持っている分より饒舌になるんだ。人間と同じさ」

　ヴィルヘルムさんからの付け足しが入る。ありがたい。

「けど、オレたちがあの森で会った、木に憑いてた悪魔は一言も喋んなかったろ？」

「あ、確かに」

「それに上級なんてのは、他の生物に取り憑くなんてまどろっこしい真似はしないで自由気ままに行動するもんなんだよ」
「人なんかの肉体に憑かなくても、奴らには十分すぎる力がある」
「レフさん、その上級の悪魔ってなんですか？」
「悪魔ってのは、簡単に言えば核を持ってるか持ってないかでランクが分けられるんだよ」
「核がねぇ奴らは下級の悪魔。ほとんどの悪魔がこれに該当するな」
「コイツらは不死性があるっても雑魚同然だ。”魔法”も使えねぇしぶっ殺しゃ死ぬ」
　殺せば……それは死ぬんじゃないのか……？
「もちろん銀製の武器か修道女（シスター）の加護の力で殺せばだけどな……だが上級はまるで違え」
　下級と違うってことは……
「……殺しても死なない？」
「核をぶっ壊さない限りは、だ。どんな強ぇ悪魔もそれをぶっ壊しゃ灰になって消える」
「”上級”なのに核（弱点）があるんですか？」
「その代わり”魔法”が使えんだよ」

「魔法……シスターの使う”神の加護”っていう力とは違ったものなんですよね？」
「ああ、まぁそうだな……」
「その”神の加護”というのは”魔法”と何が違うんですか？　そもそも”神の加護”って何なんですか？　悪魔が使う”魔法”ってあの森の悪魔が使っていたのの他にどんなのが――」
「ッだあ!!　いっぺんに聞きすぎだグリ坊!!　それにオレは修道女（シスター）じゃねぇんだぞ！”神の加護”についてなんか知るわけねぇだろうがッ!!」
「ご、ごめんなさいぃ!!」
　怒らせちゃった……でも『知りたいなら教える』って言ったのはレフさんなのに……
「子供相手にそう怒鳴るなレフ」
「チッ！」
「すまないな少年。この子は悪魔狩りに関しては天才なんだが、少々性格に難があってな。根はいい子なんだ。許してやってくれ」
　どうやらこの人はレフさんのことを深く理解しているみたいだ。
「レフ、お前は何を子供相手にムキになっているんだ……」
「……クソが」
「二人はとても仲がいいみたいですね」

確かに、口の悪いレフさんが、この人相手にはほとんど言い返していない気がする。
「互いが互いをよく理解している、まるで親子のようです」
「親子……」
レフさんにとってヴィルヘルムさんは、僕にとっての……
「……羨ましいな」
……僕にも、あんな父親がいるのだろうか？
「中々鋭いじゃねぇか修道女（シスター）の姉ちゃん」
『赤頭巾』……レフはな、昔、家族を悪魔に殺されて身寄りがなくなったところをマスターが拾ってきたんだ。だからあいつにとってマスターは父親の代わりみたいなもんなんだよ」
「おい！　余計なこと喋んな！」
「へへっ、わりぃわりぃ」
全く悪びれていない様子のおじさんは、レフさんに睨まれていち早く退散していった。
「ったく……ここの連中は……」
「話が逸れてしまったな。ここ最近の異変だったか」
「はい、上級の悪魔の数が増加しているというところまで聞きました」

「そう。ここ最近、国のあちこちで上級の悪魔の出現が報告されている」
「本来上級の悪魔は個体数が少ないものだったが……ここ最近の個体数の増加は、はっきり言って異常だ」
　そう言うヴィルヘルムさんの顔は、苦虫を噛み潰したようにとても深刻そうだった。
「それに上級の中でも高度な知能を持つ個体も増えている。一体何が起こっているのか見当もつかん」
「そうですか」
「……思ったのだが、お客人は修道女（シスター）なのだろう？　こんな悪魔祓い（エクソシスト）ギルドではなく自分の教会の方がもっと多くの情報を収集出来るのでは？」
　そっか……教会も悪魔を倒す組織なんだからそっちにも当然情報は入ってくるはず。
「……残念ですが、私は既に教会を破門されました」
「「破門……!?」」
「はい。色々あって破門になりました」
　絶対『色々』だけで済ませちゃいけないと思うんだけど……
「参考までに聞きたいんだが、お客人はどこの教会にいたんだ？」
「ブルーティアスにあるブロッサム教会という――」
　『ブロッサム教会』

その言葉がシスターの口から出た瞬間、あれだけ賑やかだったギルド中の空気が凍りついた。
「ブロッサム……だと……？」
「はい。そうです」
「あ……ああ……」
なんか他の人の様子が……
「あああああああああッ!!!!
「うわあああああああッ!!!!!
「なさまそ２５ｐｊｄａｊｐｍ@!!!!
「え、え？　え!?
「……？」
僕も、そしてシスターも、一体何が起きているのかさっぱり分からなかった。
今やこの空間は阿鼻叫喚の地獄絵図と化している。
「ヴィルヘルムさん、ブロッサム教会ってそんなに怖いところなんですか……？」
「いや……そうだな……まあ……」
明らかに動揺してる……！
「『悪魔神父』がああああ!!!」

「落ち着け!!　大丈夫だ!!」
「いやだあああ殺されるうううう!!!」
「『悪魔神父』？」
「ブロッサム教会のトップだよ。人間のくせに悪魔みてぇに強ぇからそう呼ばれてる……」
　こころなしかレフさんの顔が引きつっている。
「……そんなに怖い人なんですかシスター？」
「いえ、そんな人ではないはずです。むしろ可愛い部類に入るかと」
　悪魔の話をしていたときよりもよほど深刻そうな顔で、ヴィルヘルムさんが事情を説明してくれた。
「昔、うちの馬鹿共がブロッサムのとこ修道女（シスター）にちょっかいを出したことがあってな……奴はその復讐をしにきたことがあるんだ。あのときの暴れっぷりと言ったら……」
「オレも流石にビビったぜ……この大所帯相手に剣一本で暴れまくりやがったからな……」
「おかげでギルドは全壊。死者こそ出なかったものの向こう側に片足突っ込んだ奴は何人もいる」

「ギルド真っ二つにしやがったしな」
「……思い出させないでくれ」
　この人数とこの建物を真っ二つ……？　ど……どんな人なんだ……というか人なのか？　『悪魔神父』というのは……
「想像もできません」
「だろうな。儂も奴とは古い付き合いだが、あれだけ怒り狂った姿を見るのは初めてだった……」
「ま、そういうわけで『ブロッサム教会』って名前を聞けば、うちの連中はこういうふうに、この世の終わりみたいビビり上がるってわけだ」
「ギルドにいた人間全員が問答無用で叩きのめされたからな……」
「その、『悪魔神父』さん一人にですか？」
「ああ……オレもこっぴどくやられた」
　『悪魔神父』……その名の通り人間じゃなさそう……
「ところでお客人、君は”ローズ”という名前に聞き覚えはないか？」
「ローズ……って確か」
『アノ方ガ言ッテイタ『骸ノ修道女、シスター・ローズ』ダナ!?』
「……それは既に捨てた名前です」

「そうか……なら君はブルーティアスに向かうといい」
「なぜですか？　先程も言いましたが私は――」
「奴も君に会いたがっていた」
「これは儂の推測だが、奴は君の欲しい情報を持っている。行く価値はあるはずだ」
　何となくだけれど……シスター、あまり行きたくなさそう……
「シスターどうしますか？」
「分かりました。ブルーティアスに行ってみます」
「それがいい」
　ブルーティアス、ブロッサム教会、『悪魔神父』……当たり前だけど僕の知らないことがたくさん出てくる。
　それに気になるのはシスターが感情を失ったのと、僕が記憶を失くしたこと、そしてレフさんの家族が悪魔に殺されたのが、すべて7年前だということ。
　その辺りの謎も、ブルーティアスに行けば分かるのだろうか？
「レフ、お客人をブルーティアスまで案内してやりなさい」
「はぁ!?　何でオレが……」
「お前はブロッサム教会の人間と何度か顔を合わせているからな。それに彼らには”借り”があるのだろう？」

「……チッ」
「まあ、無理にとは言わん。誰か他の人間を――」
「頼む『赤頭巾』！」
「俺たちまだ死にたくねぇよ!!」
　必死の形相でレフさんに縋り付くギルドの方々。
「情けねぇなテメェら……グリ坊のがまだ根性あるぜ」
「あはは……」
　ギルド人たちが余り怖くなくなっていくのに比例して、『悪魔神父』さんへの怖さがどんどん増えていく。
「しゃあねぇな、送ってってやるよ」
「ありがとうございます！　よろしくおねがいします！」
「言っとくが、これで貸し借りはなしだからな」
　レフさんが一緒に来てくれる……なんて心強いんだ！
「んじゃ、さっさと行くぞ。ブルーティアスまではこっから馬車で一日はかかる」
「結構遠いんですね」
「『悪魔神父』は走って半日だって話だ」
　やっぱり人間じゃないよ『悪魔神父』!!

「じゃ、ちょっくらコイツら送ってくるわ」
「気をつけてな」
「おう」
「貴重な情報をありがとうございました」
「神父によろしく伝えておいてくれ」

――フ――リフ……
「グリフ」
「ん……んん……しすたー？」
「おはようございます」
心地よい馬車の揺れで目を覚ますと、僕の視界いっぱいにシスターの色白な顔が……
「近いですシスター！」
「そうでしょうか」
「もっと距離感を考えてください!!」
「朝っぱらから何やってんだテメェら……もうブルーティアスに着くぞ」
朝……そうか、だんだん思い出してきたぞ。

あの後僕らは馬車に乗って、それて僕は今の今まで寝ていたんだ。
「ってもう着くんですか!?」
「グリ坊、爆睡してやがったからな。ほら見てみろ」
レフさんが指さした先には、様々な建物が乱立する、セルトグラへとは比べ物にならないくらい大きい都市が広がっていた。
「おっきい……」
「そりゃあ王都だからな」
「王都!?」
「あ？　知らなかったのか」
「太陽に恵まれた国、サンナ王国の中心部、それが王都・ブルーティアスだ」
シスターって王都の教会の修道女(シスター)だったの!?　それってめちゃくちゃすごいんじゃ!?
「王都って……あの……その……王様とかがいたりするんですか!?」
「そりゃいるだろ」
「はわぁぁぁ……」
「ハハハ、いい驚きっぷりだね少年」
僕に話しかけてきたこの人は、ホリーの街から僕らをここまで送ってきてくれた馬車

の御者のおじさんだ。
「あと数十分すればブルーティアスだ。楽しんでおいで」
「ありがとうございます！」
「観光じゃねぇっての」
「そ、そうでした……」
　確か、そんな風に新しい街に心躍らせていたときだった。
　アレが、僕たちの目の前に現れたのは。
「ん？　なんだ？」
「どうかしました？」
「いや、あそこに人が……」
　御者さんの言った通り馬車の進行方向に人が立っている。
　たいして寒くもない……むしろ暖かい気候にも関わらず、真っ黒なマフラーとコートを羽織った白髪で長身の男。
「つとっと……おいどうした？」
　突如、馬車を引っ張ってくれていた馬が進むのを止めてしまった。
「止まっちゃいましたね……」
「おかしいな……」

御者さんが馬にムチをいれるが、一向に動こうとしない。
「グリ坊……」
「レフさん？」
「下がっててください、グリフ」
レフさんに腕を引かれ、馬車の後方へと押し込まれる。
「おい骨女」
「分かってます」
二人とも、険しい顔で道に立っている男を見ている。
「骨女、顔色悪いぞ」
「すみません……何故か頭が……」
「まぁいい。お前、アレが何か分かるか？」
「分かりません」
「だろうな。オレもだ」
「人……いや、悪魔でしょうか……」
「さぁ……どっちだろうな？　さっぱり分からねぇ……」
「……か」
男が一歩、また一歩とこちらへ進んでくる。

なんだ？　シスターたちはあの男の人の、何をそんなに警戒しているんだ？
「……え？」
震えてる……あの人が近づいてくるにつれ、僕の身体が……！
「な、なにが……おきて……」
「おい！　早く馬を動かせ!!」
「ダ、ダメだ！　全く動かない！」
何だこの震えは……？　僕は……怖がっているのか？
何に……僕はあの人の何をそんなに……
「あ、震えが止」
「お前が……そうか」
頭に……声が……
――パァン
――パァン
「え？」
バカに軽やかな音が二回鳴って、一瞬にして僕の視界は真っ赤に染まった。
僕がその状況を理解するには多少の時間を要することになったが、それは仕方ないことだと思う。

一瞬で御者さんと馬の頭が同時に吹き飛んだなんて……

そんなの即座に理解出来る方がどうかしている。

6：恐怖の悪魔と花園の守護者

御者さんの頭が吹き飛んだ。
頭があったはずの場所からは真っ赤な血を噴水のように吹き出し、頭部を失った胴体はゆっくりと倒れた。
嗅いだことがないくらい濃い血の匂いと、御者さんの返り血で、視界と思考が真っ赤に染まる。
動けない。叫ぶことすらできない。
「グリ坊ッ！　骨女ッ！　今すぐこ――」
今までにないくらい焦った表情のレフさんと目があって、僕は理解した。
「お前……」
人間は本当の恐怖の前では、震えどころか身動き一つ取れないということに。
空気すら凍りつくような声が、僕のすぐ後ろから聞こえる。
「（いる……）」
振り向かなくても、振り向けなくても分かってしまう。
御者さんを殺したのも……今、僕の後ろにいるのも。

全て、この悪魔が。
「（どう……やって……）」
修道女や悪魔祓（シスター　エクソシスト）いじゃない僕でも分かる。
コレは悪魔だ。しかもそこらの悪魔とは格が違う。
二人には気づかれない速さで、顔も見えないくらい遠いところから一瞬で僕の後ろに回り込んできた。
「（なんなんだ……この悪魔……！）」
僕とレフさんが一歩も動けない中で、唯一シスターだけは臨戦態勢に入ることができた。
もっとも、言葉通り臨戦態勢に入っただけだが。
「Ｇｏｔｔ　ｉ――」
詠唱が終わる前に、シスターは馬車の外へと蹴り飛ばされる。
まるで蹴られた小石のように、シスターが……人間が道を転がり、そして止まった。
道に突っ伏したまま、ピクリとも動かない。
「今の女は……そうか、なるほどな」
「しす……た……」
「グリ坊伏せろッ!!」

遅れてレフさんが猟銃で僕の後ろを狙う。
ダァン!!
「な……!」
「銀でできた弾丸か。確かに悪魔に有効であるが、当たらなければ意味が無いな」
硝煙の匂いに交じって、レフさんの絶望に似た表情が僕の鼓動を更に加速させる。
「この距離で……避けた……ッ!?」
”恐怖”しているな、人間」
「……っ!」
恐る恐る後ろを振り返ってみる。
そこにいたのは人間、の姿をしたなにかだった。
白い短髪に冷たい目をした青年。真っ黒なコートと、寒くもないのに首には真っ黒なマフラーを巻いている。
見た目は人間、でもその雰囲気は僕が今まで出会ったどの生き物のものとも違う。
恐怖。
この世の恐怖を一身に集めたような……そんな雰囲気を感じた。
「だが恥じることはない。恐怖という感情は生物が生きていく上で必要な感情だ」
「生きとし生けるものは全て、己より格上、己より上位の存在に恐怖を感じる」

「恐怖があるからこそ、人は自らに危害を加えるものから距離をとろうとし、結果自分の命を救う」
「もし恐怖という感情がなければ……あの女のようになってしまう」
「俺からすれば恐怖という感情がないあの女にこそ”恐怖”を感じる。……まぁ、アレの場合は例外とも言えるか」
何だ……何なんだよこいつ……
こんなに目の前で悠長に話して、無防備で隙だらけに見えるのに……
何もできない。
僕も、それにレフさんも、
かろうじて銃口を向けながら、しかしその場から一歩も動こうとしない。動くことができない。
「っ……何なんだよ……テメェはッ!!」
蹴り飛ばされたシスターに声をかけることも、レフさんに助けを求めることも、ここから逃げだすことも、
まるで僕の行動すべてを封じられたように、動けない。
「それより、俺が恐怖しているのは……」
男が僕を見つめてくる。

怖い、怖い……怖い怖い怖い怖い……！

「お前……」

鼓動がうるさい。呼吸ができない。全身がこわばって何もできない。

「グリ坊ッ!!　逃げろッ!!!」

死が、こちらへ向かって伸びてくる。

「ッ!?」

その時だった。

馬車が大きく揺れ、僕の身体は何かに巻き取られた。

「あぁ!?」

「んだよこれ!!」

レフさんのやったことではない……？　じゃあ何これ!?

この感触、まるで迷いの森の……

「「植物!?」」

僕とレフさんは突如どこからか伸びてきた植物のツタに絡まれて、その場から引っ張り出されたみたいだった。

あの迷いの森の大木と似た力？　でもこの植物のツタからは、どこか温かい力を感じる。

「これは……」
白髪の男を僕たちから遠ざけるように植物のツタが男へと向かっていく。
「なるほど、加護の力か」
周囲から向かってくる無数のツタを、驚異的な速度で何でもないように避ける。
その動きは明らかに人間を超越していた。
「『加護の力』？」
「やれやれ……久しぶりに娘が帰ってきたと思ったら、とんだ招かれざる客が来ているようですね」
声の主はツタが伸びてきているところにいるようだった。
「お前はブロッサムのところの……」
「白髪の悪魔よ、大人しく立ち去るか、ここで私に四肢を引きちぎられるか、好きな方を選びなさい」
声の方に顔を向けると、灰色がかった後ろでに短く纏められた髪と、鋭い目つき。片眼鏡をかけ、そして年齢を感じさせないほどしゃんと伸びた背筋をしたおばあさんがいた。
「私は、どちらでも構いませんよ」
そのおばあさんは悪魔を全く恐れることなく、むしろ相手を震え上がらせるような口

調でそう言ってのけた。
「あの修道服、シスターと同じだ……」
　ということは、王都にある教会の修道女（シスター）？
「ふむ……ここは引くとしよう。ヤツにもまだ手を出すなと言われているからな」
「臆したのですか？　白髪の悪魔」
「……人間よ、一つだけ教えておいてやろう」
「俺の名はフィア・ヘルズゲート。俺の存在は恐怖によって確立される」
「恐怖こそが俺の存在そのもの。その俺が貴様ら修道女（シスター）を脅威として警戒するのは至極当然の道理だろう？」
「格上の相手に恐怖を持つことなく、無謀にも戦いを挑むそこの人間より、よほど人間的だ。怖いもの知らずほど早死する者もいないだろうに」
「そうは思わないか？　我らが同胞よ」
　同胞？　一体誰のことを……
「と言っても聞こえないか……まぁいい。いづれまた会うことになる」
「さらばだ人間たちよ」
　空気を引き裂いたような音がして、その男……フィアと名乗った悪魔は、どこかへと去っていった。

「は……はは……」
レフさんの乾いた笑いが聞こえる。
「おいグリ坊……生きてるか？」
「は、はい……」
「だよなぁ……オレも生きてる……はははっ……！」
生きている。
間違いなく、生きている。
「僕……生きてる……」
今度こそダメかと思った。けれど今、僕の心臓は確かに動いている。
「は……あはは……」
笑いと一緒に、なぜか涙が出できた。
恐怖から開放されたからか、それとも度重なる命の危機で心身ともに疲弊していたからか、
「おい、グリ坊？しっかりしろ！おい！」
僕の意識は薄れていった。

……リ……マ……

「こ、ここは……？」

どこだここ……周りが真っ暗で何もない……

確か僕はさっきまで……

……リー……マ……

「……！」

どこから女の子の泣き声がする。

「そこに誰かいるんですか？」

辺りを見回してみると僕に背を向けてうずくまる小さな女の子を見つけた。

ここからじゃよく見えないけれど……多分、この泣き声はあの子のものだ。

聞いているだけで胸が張り裂けそうになる、悲痛な泣き声。

マ……リー……マ

「……？」

泣きじゃくりながら、女の子は誰かの名前を呼んでいるような気がした。
思わず彼女に一歩近づいたその時。
「っ!?」
誰かに、何かに引っ張られる感覚がして、僕の視界がだんだんと光で覆われていく。
「待って！　君は――」

「君はッ!?」
「おはようございます。グリフ」
目覚めると、そこはどこかの建物の中だった。
「こ、ここは……」
石造りの高い天井にどこか懐かしさがある内装。天井付近には僕らを囲むように綺羅びやかなステンドグラスが。
そして奥の壁に設置された、女性が赤ん坊を抱いて微笑んでいる一番大きなステンド

グラスと祭壇に向けて、等間隔に配置された木製の長椅子。
「教会？」
「はい、目的地のブロッサム教会です」
すごい……僕の村にあった教会とは比べ物にならないくらいに大きい……
「というか、なんで僕はシスターの膝の上で寝てるんですか？」
「ベンチでは首を痛めるかもしれないので」
「顔！　顔が近いですシスター！　もっと離れ……」
「グリフ」
起き上がろうとした僕の頭に、シスターの白くて細い手が添えられる。
「痛いところは無いですか？　どこも怪我はしていないですか？」
心配そうに僕の頭を優しく撫でる。
恥ずかしいような、けど少し安心するような、そんな不思議な感情に包まれた。
「は、はい……大丈夫です……」
「申し訳ありません。私がついていながらグリフを危険な目に合わせてしまいました」
感情が無いはずのシスターが悲しそうな顔でこちらを見つめてくるのに耐えられず、僕はシスターの膝の上から飛び退いた。
「待ってくださいグリフ」

「いや！　もう大丈夫ですから！　ホントに気にしないでください!!」
「しかし」
「何やってんだテメェら」
　僕とシスターの座っている椅子から離れた位置に立っていたレフさんが、呆れ顔で話しかけてくる。
「レフさん！」
「ったく……随分とうなされてたみてぇだな。悪夢でも見たか？」
「夢……」
　あれ……僕は確かさっきまで……
「思い出せない……？」
「マジで見てたのかよ……ま、どうでもいい話か。それより――」
「どうやらお目覚めのようですね」
　僕らがいる部屋の入口らしき扉から、修道服を着たあのおばあさんが入ってきた。
「具合はどうですか」
「あ、あの……ありがとうございました。助けてくれて」
「お礼にはおよびません。修道女（シスター）として当然のことをしただけですから」
　口調にどこかシスターに似た冷たさがあるこのおばあさんは、やはりと言うべきか、

自らを修道女（シスター）と名乗った。
「修道女（シスター）……」
「これは失礼しました。まだ名乗っていませんでしたね」
「私、このブロッサム教会で修道女（シスター）長を務めている、ガーデン・ブロッサムと申します。以後お見知りおきを」
　聞いたこちらの背筋が伸びてしまうくらいに礼儀正しい自己紹介。
「は、はじめまして！　グリフといいます！」
「なんでテメェはそんなに緊張してんだよ」
「それは……いや仕方ないじゃないですか！」
　王都の教会の、それも修道女（シスター）の代表って、それは物凄く偉い人じゃ……
「緊張する必要はありませんよ。代表と言っても形だけですから」
「バァさんもよく言うぜ。どこの世界に”形だけ”の加護持ちがいんだよ？」
「貴方の減らず口も相変わらずですね『赤頭巾』」
「そっちこそ、余生を謳歌してそうで何よりだよ」
　レフさんと、このガーデンさんは知り合いなのか？
　友人というわけではなさそうだけれど……
「仕事で何度か顔見ただけだっての」

「修道女（私たち）と悪魔祓（彼女たち）いは、いわば商売敵のような関係ですから」
修道女（シスター）は基本慈善活動ですが。と、ガーデンさんとレフさんは互いに微笑み合う。
……朗らかとは言えない顔で。
「つーかよ、仲良しつったらそっちの骨女のほうがそうだろうぜ？」
「え？」
そういえば……
『やれやれ……久しぶりに娘が帰ってきたと思ったら、とんだ招かれざる客が来ているようですね』
「……娘？」
「オレのことでもなけりゃ、当然グリ坊のことでもねぇ。そうなったら一人しかいねぇだろ」
ならどうして、シスターはずっと黙ってるんだ……？
「おい骨女、テメェ確か『破門された』つったな」
「あ！　でもそれなら……」
シスターは本当ならここにいちゃダメってことに――
「破門と言っても大したことではありません」
「いや、十分大したことですよね!?」

「そういえば、まだしっかりと挨拶していませんでしたね」
　すると、ガーデンさんはシスターの方へしっかりと向き直った。
「お帰りなさい。元気そうで何よりです。ロゼ……いえ、今はスオンでしたか」
「お久しぶりです、シスター・ガーデン」
　あれ？　意外と……
「……なんともねぇな」
「そう……ですね」
　自分からふっかけたのに心配そうな顔をするレフさんに、僕も同調した。
「我々ブロッサム教会は確かに彼女を破門にしました。しかしそれはあくまでも聖教会による決定……我々としては彼女を手放したくはなかった」
「聖教会？」
「簡単に言えば、全ての教会を統括する組織のことです」
「本来は悪魔による被害の集計や、討伐のための情報を管理しているのですが、私のような規則を破った修道女（シスター）に罰を与えるのも彼らの役目なんです」
　シスターが破門になるほどの罰……一体この人は何をしたんだ……？
　正直すごい知りたいけど、やはりどこか聞きにくいので大人しく口をつぐむ。
　そういうのはレフさんが聞いたりするものだ……無神経に。

「あ？　んだよグリ坊」
「何でもないです」
「……ならなんで目そらしやがる」
「何でもないですから！」
訝しげにこっちを睨むレフさんの目から視線をそらした。
「ふーん……ま、どうでもいいか」
「それで？　骨女がその聖教会とやらに破門させられたのは分かったけどよ、んな真似したらアイツが黙っちゃいねぇだろうが」
「アイツ？」
「お前らのとこにはいんだろうが。修道女（シスター）に手を出すやつ絶対殺す神父」
言い方は不自然だけれど、僕にはレフさんが言わんとすることが分かった。
レフさんは今、僕たちがレフさんのギルド『御伽話の人形達（グリムドールズ）』で聞いた人のことを言っている。
「『悪魔神父』……」
「僕を呼んだかい？」

「うぇあ!?」
「ッ!?」
祭壇の方から声がする。
咄嗟に僕とレフさんが振り返ると、そこにはシスターの着ている修道服と似たデザインの祭服に身を包んだ……神父？
「お久しぶりです。ロザリオ神父」
「よく帰ってきたねロゼ。また会えて嬉しいよ」
祭壇からゆっくりこちらに近づいてくる。
一歩、また一歩と歩を進める度に、レフさんの警戒心が強まっていく。
「そんなに怖い顔しなくてもいいじゃないか、レフィリアちゃん……もしかして君のギルドを真っ二つにしたこと、まだ怒ってるのかい？　あの後ちゃんと謝っただろう？」
「……オレはレフだ。そのガキみてぇな呼び方でオレを呼ぶんじゃねぇよ」
「はっはっは！　相変わらずだね君は」
その人はとても〝悪魔〟なんて呼ばれるような容姿ではなく、けれど話している内容は悪魔並に物騒だ。
「……ハッ、テメェも相変わらずだな」
遂に『悪魔神父』は僕の目の前で足を止めた。

「君は……グリフくんだったか。君がロゼをここまで連れてきてくれたんだね。ありがとう」
「え、あ、いや、その……」
「ガーデンが先に紹介を済ませてしまったかもしれないが……」
「安心してください。どうせ自分で名乗りたいと言い出すと思ったので、あえて紹介はしませんでしたよ」
「それは助かる！　それじゃあ改めて」
肩まで伸ばした黒髪を揺らした『悪魔神父』と、僕は少し見下ろすような形で目を合わせた。
「ようこそ我らがブロッサム教会へ！　僕がここの神父、『悪魔神父』のロザリオ・ブロッサムだよ！」
ロザリオ・ブロッサム……『悪魔神父』……
「お……」
今度の僕は、思ったことをそのまま口に出さずにはいられなかった。
それくらい彼は……いや、彼女の姿は僕の思い描いていた『悪魔神父』とかけ離れていたからだ。
「お……お……!?」

「女の子ぉ!?」
僕より少し背の低いその少女は、幼さが残る瞳と、それに不釣り合いなほど穏やかな落ち着いた声で、
自らを『悪魔』と名乗った。

7：花咲く教会と悪魔神父

僕の素っ頓狂な絶叫が教会中に響き渡った。

「女の子ぉ!?」

どう見ても僕と同い年かそれより下の女の子にしか……いや、でも確かに神父って……

「ロザリオ神父は男性ですよ、グリフ」

「ええ!?」

華奢な身体、整った顔立ち、金色の大きな瞳、肩の辺りまでで綺麗に切り揃えられた艶やかな黒い髪。

やはり、どこをどう切り取っても”悪魔”と呼ばれる神父の面影はない。というより男性でもない!?

「付け加えますと、この人は私と同い年です」

「ハッ、珍しく面白くもねぇジョーク言うじゃねえかバァさん」

「……」

「……は？　マジ？」

ガーデンさんしれっと凄いこと言わなかった!?
「はっはっは！　やっぱり驚かせてしまったか」
「えっと……」
「なんなら今ここで見せようか？」
「何をッ!?」
「やめろクソ神父!!」
「ははっ！　ただのジョークさ！」
冗談めかして笑うその人の笑顔は、どこか少年じみたものを感じさせる笑顔だった。
「でもまぁ、僕が男ってのは冗談でもなんでもないから。こんな姿をしているが、これでも君より数段長く生きている大人の男さ」
ロザリオ神父はやれやれといったふうに肩をすくめてみせた。
「信じてくれるかい？」
「信じます……というよりごめんなさい。僕、驚いて失礼なこと言っちゃって」
「気にしないでいい。もう慣れてる」
満面の笑みで肩をポンポンと叩かれる。
この人が僕より年上の男の人というのも驚きだが、やっぱりこんな曇りのない笑顔をする人が、『悪魔神父』なんて物騒な二つ名で呼ばれてるのも不思議で仕方ない。

「さて、自己紹介も済んだことだし、話の続きに戻ってくれていいよ！」
「あー……オレたち何の話してたっけか」
「私の記憶が正しければ、ロゼの破門についてだったかと」
「あ、あの……」
「ん？　なんだいグリフくん？」
　せっかくこの教会の神父様に会えたんだ。前々から気になっていたことを聞いてみよう。
「その『ロゼ』って……」
「あぁ！　君の言う『シスター・スオン』というのは彼女の作った偽名でね。本名はローズ・ブロッサム、だからロゼって呼んでいたのさ」
『骸ノ修道女、シスター・ローズ』
　ん？　ローズ……
「ブロッサム……教会？」
「そ、ロゼは僕の子供だよ」
「え、えぇっ!?」
　シスターが神父様の子供!?
　思わずシスターを見る。

人形みたいに白い肌、腰まで伸びた白銀色の髪、くすんだ灰色の瞳、全く動かない表情筋……

「全然似てない……！」

「ハッハッハ!!」

「血は繋がっていないので当たり前です。というより、不用意に驚かせて反応を楽しむのはやめなさい」

「ごめんごめん！　グリフくんがいいリアクションするからつい、ね」

ガーデンさんから親切な注釈が入った。

えっと……血は繋がっていなくて、でも神父様の娘……？　ということは？

「ここにいる子たちはロゼを含めてほとんど全員孤児なんだよ。だからここの責任者である僕が義理の父親ってわけ」

「ここにいる子たちと言うと……」

するとガーデンさんが入ってきた扉から背の高い青年が入ってきた。

「わああ！　たかああい！」

「ずる～い！　わたしもわたしも！」

「あ！　しんぷさまここにいたんだ！」

「……ロザリオ神父」

両腕に小さな男の子と女の子、そして肩の上にもう一人女の子を乗せた異様な青年が。

肩の上の少女の隙間から、目までかかった羊のようにモコモコした黒髪と、気だるそうな黄色の瞳がこちらを覗いている。

ケガでもしているのか、その頭には使い古された包帯が巻かれていた。

「やぁ！　クローバー、みんなと遊んでくれてたんだね！」

「ちがうよ！」

「わたしたちがクローバーとあそんであげてたのよ！」

「そうだそうだ！」

「……違う」

『クローバー』と呼ばれたその人は、とても苦々しい表情で否定した。

「はっはっは！　今日も仲が良くてよろしい！」

「（あれは仲良いのか……？）」

「紹介するよ。こっちの小さい女の子がコスモス、もう一人がアイリス、男の子の方がロータス。あとこの大きいのがクローバーだ」

「しんぷさまこのひとたちだれー？」

「みんなのお姉さんのお友だちだよ～」

コスモスにアイリスにロータスにクローバー……あとローズ。
「この教会は孤児院としての役割も担っているんです」
三人の子供のうち寄ってきた一人を相手にしながら、ガーデンさんは僕に説明をしてくれる。
「子供たち素敵な名前ですね。皆花の名前だ」
「ここに引き取られる子供たちの中には名前がない子や、過去にトラウマを植え付けられたも子も多いので、あの人が一人一人新しい名前をつけているんですよ。『家族の証だ』と言って」
優しく頭を撫でる慈愛に満ちたその笑顔には、『母親』という言葉がシックリくる。
「そうなんですね……」
きっと、僕のこの『グリフ』という名前にも、両親が込めた思いがあったのだろう。
全てを忘れてしまっても、残っている特別な思いが。
「……会ってみたいなぁ」
僕を産んだ人たちは、どんなことを考えてこの名前をつけたのか。
……どんなことを考えて、僕をあの村の教会に置いていったのか。
会って、話してみたい。
「いつか会えますよ」

「ですね……って聞いてたんですか!?」
「はい。聞いてました」
顔色一つ変えずにシスターが言う。
もしシスターに感情があったなら、今どんな顔して言ったのだろうか？
「ん？」
ふと僕の服の袖が引っ張られる。
視線をやると、そこにはこちらに興味津々な男の子がいた。
「さっきいた子……じゃない」
さっきの――クローバーさんの周りに纏わりついていた三人の中のどの子とも違う。
じゃあこの子は？
「へ？」
気づけば僕とシスターを囲むように大勢の子供たちが集まってきている。
子供たちに紛れて修道服を来た人たちもちらほら見える。
総勢およそ四十、五十、いやそれ以上……!?
「あなたたちだれ？」
「どこからきたのー？」
「あそんであそんで!!」

「これは……私がいた頃よりも多いですね……」
「ちょ！　神父さま!?」
　見ると神父様は僕たちよりもっと多くの子供に囲まれていた。
「呼んだあー!?」
「（埋もれてる……というか流されてる！）」
　そりゃあ背の高い男の子に囲まれたら、神父様の身長じゃそうなるか！
「この子たちは何なんですか!?」
「んーとねえ！　この子はアベリアで、この子はガーベラでー！」
「いや！　名前じゃなくて!!　この子たちも――ッ！」
　あっちこっちから押されたり引っ張られたりするから体のバランスが!!
「あーあ、流されてやんの」
　遠く離れた所に避難していたレフさんに助けを求める。
「レフさん!!」
「嫌だ」
「まだ何も言ってないですよ!?」
　拒否された。こうなったらレフさんしか頼れないと思ったのに……！
「ガキは好きじゃねぇ。だから自分で何とかしろ」

「そんなぁ……」
　子供たちは皆キラキラした目でこちらへ押し寄せてくる。
「シスターは……」
「初めまして。私の名前はスオンと申します。以後お見知りおきを」
「おみしりおき？」
「なにそれ？」
「さあ？」
「……どう説明したらいいでしょうか」
　こっちはこっちで大変（？）なことに!!
「なあなあ！　おまえあそんでくれよ！」
「あなたどこからきたの!?」
「皆、お、落ち着いて……！」
　あーもうどうすればいいんだ!?
「いい加減にしなさいッ！」
　その一声で教会の中は一気に静まり返った。
　声の主は誰であろう、この教会の修道女（シスター）代表、ガーデンさんその人である。
「まったく……気持ちは分かりますがはしゃぎすぎです！　もう少し落ち着きを持ちな

さい!!」

すごっ……見事に全員静かになった……

「申し訳ありません。子供たちが失礼を……」

「い、いえ！　僕なら大丈夫ですから！」

「ほら貴方達も！　謝りなさい！」

「ごめんなさい……」

「ごめん……」

ガーデンさんの一声で嘘みたいに落ち着きを取り戻す子供たち。

「まぁまぁ、そんなに怒らないで、ね？」

「元はと言えば教会の代表である貴方が子供たちを教え導くものでしょう!?　大体貴方は昔から適当すぎるんです！　もっとここの神父である自覚を……!!」

「あ、はい、ごめんなさい」

少年のようにシュンと落ち込んでしまった悪魔神父。

何となくだけど、この教会のパワーバランスみたいなものが分かってきてきた。

言うなれば……そう。

「なんつーか……母は強しってことなのかもな……」

「僕もそう思います」

ガーデンさんに説教される子供たちと神父様を眺めながら、僕とレフさんはそう思った。
「……あの」
「はい？」
振り向くと、僕の後ろには既に子供たちを肩から下ろしたクローバーさんが。
「……」
……？　何故黙る……？
「どうかしました？」
「怪我……」
「怪我？」
「怪我、ない、か？」
「あぁ！　大丈夫ですよ。流石に子供たちに押されたりしたくらいじゃ怪我しません！」
「そう、じゃなくて」
「へ？」
こちらに何かを伝えようとしているのは分かる。けれどそれが何かがイマイチ分からない。

緊張している……とは少し違うような、上手く言葉が出てこないような、そんな不思議な話し方をする人だ。
「この教会運ばれてときには、君たち怪我してたからね。彼がその治療をしてくれたんだよ」
ガーデンさんのお説教から解放された神父様の説明に、クローバーさんは深く頷いた。
「そうだったんですか……ありがとうございます。でももう大丈夫です！」
「それなら、よかった」
「これからも怪我したら彼を頼るといい。彼の持つ加護の力は、人を救う力だから」
人を救う加護の力……？
「神父様、いろいろ気になってることが多いんですけど……修道女（シスター）のこととか、神の加護の力とか」
「子供のあやし方とか？」
「いや、それは別に……」
「コツは目を合わせて笑顔で語りかけることさ」
「……ロザリオ」
「嫌だなあガーデン！　ほんのジョークだよ！　だからそんなに怖い顔しないで!!」

「あの、そ、その前、に」
　ガーデンさんの怒りを遮るように、クローバーさんが切り出した。
「そろそろ、帰ってくる」
「帰ってくる？」
　一体誰が？　って、普通に考えればこの教会の人間か。
「そういや、あのアホ天使がいねぇな」
「姉さんは、出張。だから、子供たちの、お世話、ほとんど俺」
「ふーん……テメェも大変だな。黒モジャ」
「黒モジャ、じゃない。それに、他の、修道女（シスター）も、手伝って、くれる」
「そうかよ……ったく、どいつもこいつもオレが折角つけてやったあだ名を嫌がりやがって……」
　黒モジャに、アホ天使……どこか悪意を感じるあだ名だ。
「んーそうだなぁ……よし！　ロゼとグリフくん、あとレフィリアちゃん。悪いけどあの子を迎えにいってくれないかい？」
「え、いいんですか？」
「はぁ!?　なんでオレがあのアホ天使の迎えに行かなきゃいけねぇんだよ!!」
「久しぶりの再開だし……てか君たち互いにあーだこーだ言ってるけど、実は結構仲良

いでしょ」
「なわけあるかクソ神父ッ!!!」
　レフさんの大絶叫が教会中にこだました。
　というかレフさんって本当はレフィリアって名前なんだ……結構可愛い名前……
「あと僕が行くよりロゼが行った方があの子も喜ぶからね」
「……？　それには何か理由があったりするんですか？」
「この教会にいる孤児たちは全員が家族で兄弟みたいなものなんだ。その中でも特にあの子は、ロゼを本当の姉のように慕っていたから……」
「ロゼが破門になったときも、あの子だけは最後まで反対していました。教会を出ていく時も泣きながら引き止めていましたし」
　そこまで慕われてたんだシスター……あれ？
「そういえばシスターは……」
「こんな感じでしょうか」
「たかーい！　けどクローバーのほうがたかい!!」
「すみません」
「ねえちゃんおれもおれも!!」
「私の肩の上は一人が限界です」

「じゃあうでだ！」
「おっと……」
「あたしはこっち！」
　……クローバーさんがもう一人出来そうになっていた。
「はいそこまでー、そのお姉ちゃんは今からパキラ姉ちゃんを迎えに行くからみんな離れて離れて」
「えー？」
「パキラねぇ帰ってくるの!?　やったあ!!」
　パキラ……それがレフさんの言う『アホ天使』か……
「パキラ……懐かしい名前です」
「シスターと仲が良かったんですよね？」
「最後に会ったのは二年も前です。向こうは私の名前すら忘れているでしょう」
　……なんか、神父様とガーデンさんとクローバーさんが凄い首を横に振ってるんだけど……
「……とにかく！　とりあえず迎えに行きましょうよ、ね？」
「グリフがそこまで言うなら」
「つーか、グリ坊は何でそこまで乗り気なんだよ」

そんなの、決まっている。

8：骸ノ修道女と銃天使

「わぁぁ……!!」

街中に溢れる活気。老若男女、様々な人たちが行き来していた。

建物の造りからなにからセルトグラへとは比べ物にもならない。というかあのレフさんのギルドがあったホリーの街よりも発展しているように思えた。

「シスター！　お城がありますよ！　お城が！」

「王都ですから」

「城壁？　って言うんですかあれ！　街を囲むみたいにぐるーっと!!」

「王都ですから」

「はわあああ……」

これが王都……！　これがブルーティカス……!!

「ブロッサム教会って中も広かったけど、外から見たらこんなに大きかったんだ！　お城くらいある！」

「あの悪魔神父が国の連中にメチャクチャ言って作らせたらしいな。孤児院もあるからもっとデカくしろだとか言って……いや、”脅して”か？」

「人も沢山います！　見たことないお店がいっぱい!!」
「……おい、グリ坊？」
「見たことない服も見たことないアクセサリーも見たことない人たちもいっぱいですっ!!」
「グリ坊??」
「わああ!!　石畳!!!」
「グリ坊落ち着けッ！　それはホリーにも普通にあっただろ!!」
「はっ……！　僕は今何を……」
　ついつい興奮しすぎて暴走してしまった……
「ったく、大人しいやつだと思ってたがそうでも無いらしいな」
「ごめんなさい……」
「グリフは新しいものに目が無いんですね」
「本当にごめんなさい……」
「チッ……ほらさっさと迎え行くぞ！」
　早足で歩くレフさんの後ろをついて行く。
　向かう先はブルーティカスの東門。
「そういえば神父様に聞くのを忘れたんですけど、そのパキラさんってどんな人なんで

すか？　容姿とか分からないと困ると思うんですけど」
「年はグリ坊と同じくらいだな」
「私の昔の記憶では、金色の髪をこう二つ、横に結んでいました」
シスターが手でツインテールを実演してると、なんかちょっとシュールだ。
あとちょっとかわいい。
「どうかしました？」
「あ！　なんでもないです！」
「ってことは今のあいつは昔から変わってねぇってことだな」
「じゃあ見ればすぐ分かるってことですね！」
そうこうしている内に目的地に到着した僕ら。
「でっか……」
シスターが呼び出す、あの黒い骸骨が楽々通れるくらいの門だ。
「……なんか街の連中がやけに騒がしいな」
「何かあったんでしょうか？」
「行ってみましょう」
小さかった周囲のざわめきは門に近づけば近づくほど大きくなっていく。
街中の明るいざわめきではなく、不安や恐怖がにじみ出るような……

「おい！　空を見ろ！」
そんな誰かの声が聞こえ、僕らは自然と視線を城壁の向こうを見上げる。
「……鳥？」
青空の中に羽の生えた生き物が数匹、こちらへ接近してくる。
「いや、ただの鳥じゃねぇ。この嫌な感じは……」
「悪魔憑きです」
「っ！」
悪魔憑き……!!
身体が強ばり、頭の中をセルトグラへでの皆の姿が駆け巡る。
キャンベラおばさん……ミゲルさん……
「しゃあねぇ、ぶっ殺すか」
「城壁に辿り着く前に全て落とします」
「……っ！」
今さら何やってるんだ僕は！　どれだけ後悔したってキャンベラおばさんもミゲルさんも帰っては来ないんだぞ!!
「（ここにいる人たちが、村の皆みたいにならないように頑張るんだ……！）」
悪魔退治はシスターとレフさんに任せて、僕はここにいる人たちの避難誘導に専念し

よう。
　そんな決意をしたのもつかの間、僕の誘導の声は大衆の歓声にかき消された。
「おい来たぞ！」
「すげぇ本物だ!!」
「天使様……！」
　城壁の上に、見覚えのある修道服。
　一瞬シスターかと思ったけれど、隣で僕と一緒に見上げるシスターと、風にたなびく金色の二つ結びの髪を見て、すぐに違うと気づいた。
「あれが……」
「アホ天使、もとい『銃天使』パキラ・ブロッサムだ」
「銃天使……ってもしかしてひとりで退治するつもりですか!?」
「まぁ落ち着け。面白ぇもんが見れるかもよ……っと！」
「ちょ！　レフさん!?」
　レフさんが僕の下に潜り込み、そのまま肩車の体勢に持ち込まれる。
「この方が見やすいだろ？」
「もう……」
　でもレフさんがそこまで言うなら、きっと相当すごい人なんだろう。

「見逃すなよグリ坊。あれが”神の加護”を持ってるやつの、本来の戦い方ってやつだ」

～【ブルーティカス東門・城壁上】～

ブルーティカスに帰ってきて早々これとか、本当についてないなアタシ……早く帰ってシスター・ガーデンのクッキーが食べたい……

「本当にお一人で大丈夫ですか？」

は？　何を言っているのかしらこの衛兵は？

「ご心配どうもありがとう。けど無駄な心配ね。アタシを誰だと思っているの？」

「はっ、失礼しました。銃天使様」

「分かればよろしい！」

「本当に大丈夫か……？　あんな小さい女の子が……」

「さぁ……」

「やっぱり教会のちゃんとした聖職者を呼んできた方が……」

はぁ……全部聞こえてんのよ衛兵どもが……

まぁいいわ、面と向かって言う勇気もないウジ虫なんて気にするだけ時間の無駄よ。

「☒天眼（キューピットアイズ）☒」

数は七匹、しかももれなく全員核までもってる。
「偉そうな鳥ね。捕まえて教会の皆で食べてやろうかしら」
なんて、どうせ悪魔憑きは持ち主の魂が死んだ時点で、身体が死ねば勝手に灰になるんだけど。
「さてと……さっさと終わらせましょうか」
アタシの問いかけに答えるように、太陽の光に反射して、相棒が今日も白く輝いた。
「⊠天使の回転式拳銃（エンジェリックリボルバー）⊠！」
核に照準を合わせ、引き金を引く。
引く。
引く。
引く。
引く。
「ふう……」
「あ、あの？　まだ六発しか撃ってないのでは……？」
「え？　ええそうよ、私の相棒の装填数は六発だもの」
「まだ一匹残っていますけどおおお!!??」

「うるさいわね！　知ってるわよそんなこと!!」
「もうすぐそこまで来てますッ!!!」
　あら、案外速いのね。
「墜ちなさい」
　全く関係ないけれど。
「☒天泪（ヘブンズクライ）☒☒！」
　この距離じゃ外しようがないわね。
「アタシの勝ち」

～【ブルーティカス東門】～

「な……」
　言葉が出なかった。
　あの修道女（シスター）が持っているのは……白い拳銃？　あそこから放たれた光は何だ？
「あれがあのアホ天使の加護の力、天使の回転式拳銃（エンジェリックリボルバー）。装填してある銀の弾丸に光の力を乗せて撃つ」
「あの拳銃で……？」

「それ以外ねぇだろ」
シスター以外の人の神の加護を初めて見た。
まさに光の弾丸、神々しさすら感じる。
あれが普通なら、確かにシスターの加護の力は禍々しいかも……？
「でもあんなに離れてる鳥を……そんなことが出来るんですか？」
「不可能な事象を可能にする。それが神の加護の力です」
「じ、じゃあ最後の七発目の弾丸は!?　あれだけ弾が強く光っていたように見えたのは僕の気のせいですか!?」
「気のせいじゃねぇよ。あれはアイツの……まぁ奥の手みたいなもんらしい。詳しくはオレも知らねぇ」
あれだけ遠く離れた標的を、ただの拳銃で正確に撃ち落とす。人には到底できない芸当だ。
レフさんが彼女を『天使』と呼ぶ理由が何となく分かった気がする。
正確無比な高速射撃と、そしてあの眩い光の弾丸。
風にたなびく金色の髪と、光に反射してキラキラと煌めく硝煙を纏う彼女の姿は、どこか人間離れした高貴な存在を想起させた。
あれが『銃天使』パキラ・ブロッサム……！

「お見事です、流石は銃天使様」
「ふん！　当然よ！」
衛兵と何やら話をしながら、城壁の上にいた彼女が降りてくる。
すると途端に歓声が湧き上がった。
「銃天使様が降りてきたぞ！」
「我々を悪魔から救ってくださったのだ！」
「すごい……かっこいい……」
僕はと言うと、何も言えずにただボーッと彼女の姿を眺めていた。
おもむろに彼女が右手を上げると、あれだけ人々の歓声に包まれていた周囲が一気に静まり返った。
誰もが彼女の言葉を待っている。
僕も彼女が何を言うのか、期待で鼓動が速くなる。
「すぅぅ……」
「アンタたち!!　いつまでボサっとしてるわけ!?　悪魔はアタシが退治してあげたから!!」
「さっさと仕事に戻りなさああいッ!!」
「……へ？」

なんか……想像していたのとは大分違うような……？

豆鉄砲食らったのはどうやら僕だけだったらしく、街の人たちは素直に彼女の言ったことに従って帰って行った。

「流石銃天使様だぜ！」

「あぁ！　悪魔を退治してくれただけじゃなく、俺たちのことを元気づけてくれるんだからな！」

「いやーあんな可愛い銃天使様に激励されると、自然とやる気も出るってもんよ！」

「午後からの仕事もいっちょ頑張るか！」

え、えぇぇ……？

「ほらよグリ坊、そろそろ降りろ」

「え、あ、はい。ありがとうございました……」

あれが『銃天使』パキラ・ブロッサム……？

「はぁ……やっぱり天泪（ヘブンズクライ）を撃つと疲れるわね……ん？」

少し疲れた顔色の彼女が、僕らに気づいて、

「げっ……」

「チッ……」

そして一気に空気が最悪になった。

やっぱり本人が言ってたみたいに『赤頭巾』と『銃天使』は仲が悪いのか……
「最悪……なんでアンタがここにいるのよ『赤頭巾』」
「テメェんとこのクソ神父に頼まれたんだよ」
「相変わらず下品な口調ね」
「黙れ『アホ天使』」
「うるさいわよ『バカ頭巾』」
『久しぶりの再開だし……てか君たち互いにあーだこーだ言ってるけど、実は結構仲良いでしょ』
神父様。この二人、普通に仲悪いです。
「あら？　アンタ見ない顔ね」
「あ、はい。グリフといいます」
「ふーん……」
なんでジロジロ見られてるんだ僕は？
「背はアタシがほんの少しだけ勝ったわね」
「あの……何か……？」
「アンタ、年はいくつ？」
「え……十二です。多分」

「勝ったわね」

「何が!?」

「アタシはパキラ・ブロッサム！　アタシの方が年上よ！」

　やっぱり想像していた人と違う!!

「で？　わざわざ迎えに来たのには何か理由があるんでしょ？」

「あ？　あぁ、そいつとテメェを合わせてぇんだろ？」

「そいつ？」

　パキラさんとシスターの目が合う。

「久しぶりですね、パキラ」

「…………………ろ」

「……やはり覚えてな——」

「ロゼおねえさまああ!!!」

　僕はシスターに物凄いスピードでタックルをかます彼女の姿を見て、『銃天使』の本当

の姿が分かり始めてきたのだった。

9：天使と家族

僕には兄弟がいないから分からないけど、きっと妹をあやすというのはとても疲れるんだろう。
「ぐす……お姉様がいなくて、アタシがどれだけ寂しい思いをしたか…………」
「すみません」
「仕事もアタシに沢山まわってくるし……ずっとひとりで大変だったんですよ……」
「ごめんなさい」
「他の修道女（シスター）もクローバーも頑張ってくれてるけど……でもアタシひとりじゃ心細くてぇ……」
「申し訳ありませんでした」
「どうじでいなぐなっぢゃっだんでずがあぁぁぁあ！！！！」
「泣かないでください」
「おねえさまのばがぁぁぁぁぁぁぁぁあ！！！　でもすきぃぃぃぃぃいいいいいいい！！！」
「…………」

「こっち見んなグリ坊」
　こんなやり取りを繰り返して約二時間。心なしかシスターの顔に疲れの色が出てきた。
「アレ、一体いつまで続くんですか？」
「知るかよ。けどアホ天使がずっとあんな調子じゃ、教会に戻ろうにも戻れねぇ」
　けどいつまでもここにいたら、流石に街の人たちの視線が……
「ずっとシスターにしがみついて動こうとしませんからね……」
「待ってんのも疲れたろ、ほれ」
　レフさんは僕に串に刺さった焼き鶏肉を差し出した。
「ありがとうございます！　あ、お金」
「ガキが気使ってんじゃねぇよ」
「あ……ありがとうございます」
　別に忘れてたって訳じゃないけど、レフさんってたまに大人だよな……
「じゃあ……いただきます」
　王都の景色にはしゃぎすぎたからか、すっかり空腹だった僕は、思い切り焼きたての肉にかぶりついた。
「あっつ！　けど美味しい！」

「がっついて喉につまらせんなよ」
「はふ……んん……これ本当に美味しいですね！　なんていう鳥ですか？」
「スカイブルー、さっきアホ天使が撃ち落としてた鳥だよ」
「んぐっ!?　ゴホッゴホッ!!」
「言ったそばからつまらせてんじゃねぇよバカ」
　これが……さっきの鳥!?
「言っとくが同じ種族ってだけで、さっきの撃ち落としたやつらは全員灰になって消えたよ」
「あ、あぁそういう……」
「スカイブルーってのは大人しい鳥で、普通の人間にも簡単に捕まえれて味も美味いから人気なんだよ。知らなかったのか？」
「まぁ僕の村では見ない鳥で……ん？」
　今のレフさんの説明、何か変じゃないか？
『大人しくて、普通の人間にも簡単に捕まえられる』？
「やっぱ気づいたかグリ坊」
「……」
　レフさんは以前、核を持っている上級の悪魔が他の生物に取り憑くことはほとんどな

いと言っていた。
強すぎるが故、下級の悪魔のように他の生物に擬態する必要が無い。
僕の村、セルトグラへにいた悪魔は全部下級で、人間に悪魔だとバレないように皆の肉体を奪っていた。
決して許せないが、肉体を奪う理由がある。
じゃあ迷いの森にいたあの大木の悪魔は？
あの悪魔は森の中心にあった大木に取り憑くことで、森全体のあらゆる植物を操っていた。
……それは果たして、あの場から一歩も動けないというデメリットに釣り合うほどのものだったのか？
それに今回の鳥……
「レフさん、悪魔って自力で飛べますよね？」
「断言はできねぇが……オレが今までぶっ殺してきた悪魔は、どんだけ下級の雑魚でも再生能力と飛行能力くらいはあった、と思う」
「レフ、私もお腹が空きました」
「知るかよ。テメェで買ってこい」
「ケチケチしないでさっさとお姉様に買ってきなさいよ!!」

「誰のせいでこんなとこで足止めくらってると思ってんだよアホ天使!!　そんなに食いたきゃグリ坊の食いやがれ!!」
悪魔が他の生物に取り憑くのは自らの正体を隠すためだとするなら、あの鳥の悪魔は明らかに変じゃないか？
僕はレフさんやシスターのように悪魔の専門家ではない。彼らの存在を認識したのもつい最近だ。
けど……そうだ。
これもレフさんから聞いた。悪魔はもとい、上級ともなればその知能の高さからかなりの饒舌になると。
「分かりました。グリフ、一口ください」
「ダメですお姉様！　関節キスになってしまいます!!　こんな何処の馬の骨とも分からないようなガキと……」
「私は気にしません」
「とにかく！　ダメったらダメなんです!!」
あの木の悪魔は？　僕らを攻撃したときはおろかシスターに核を貫かれるまで一言も発してはいなかった。
あの鳥の悪魔は……近くでは見えなかったが、少なくとも知能があったようには見え

なかった。
「グリフ、あなたも気にしませんよね」
「……そう……」
「ほら」
「ええ!?」
「コイツ集中すると周り見えなくなるんだな」
　そうだ……そうだよ……！
　セルトグラへの悪魔たちは下級だったけどあれだけ喋ってたじゃないか！
　だとしたら僕らが出会ってきた核を持っている悪魔は……
「……あれ、僕の焼き鳥」
「ごちそうさまでした」
「え!?　食べたんですかシスター!?」
「グリフが食べていいと言ったので」
「言ってな……ていうか、か、か、関節キ……／／／」
「こんのガキ……ッ!!」
「なんで!?」
「あーあ、せっかくの集中が途切れちまったな」

気づけば僕の手元には鳥が刺さっていた串しか残っていなかった。
「グリ坊、何か分かったか？」
「……僕は悪魔に詳しくないので、なんとも」
「オレはテメェをかってるんだよ。遠慮なんかすんな」
「……」
「……悪い、流石に期待をかけすぎたな」
僕みたいな素人が下手に口出して、レフさんを余計混乱させてもいけない。ここは何も言わない方がいい。
「じゃあそろそろ教会に戻るか」
「……はい」

～【ブロッサム教会】～
「やああっと帰ってこれたぁ……」
そう言ってパキラさんは心底疲れた溜息をもらした。
「つかよ、テメェ今までどこ行ってたんだよ」
「なんでアタシがアンタに教えなきゃいけないわけ？」

「パキラ、一体どこに行っていたんですか？」
「神父様のお願いで東の国まで行ってきたんです！」
「……」
「無言でこっち見ないでくださいレフさん」
　本当、なんでこんなに仲悪いんだろう……？
「東の国……ですか」
「東には何かあるんですか？」
「まぁね。最初は訳も分からず神父様に言われたままに行ってみたけれど……多分神父様が望んでたものを見つけられたと思うわ」
　神父様が望んでたことって……
「とにかく早く中に入りましょ。もうクタクタだわ」
「あー！　パキラねぇちゃんだー!!」
「クタクタだって言ったばかりなのに……」
　パキラさんを見つけた子どもたちが、笑顔で教会の中から駆け出してくる。
「おかえりパキラねぇちゃん！」
「あーはいはい、ただいま」
「どこにいってきたの？　ねぇどこどこ??」

「とおーいとおーい国よ」
「おはなしきかせて!!」
「あ！　ぼくもぼくも！」
「わたしも！」
　あっという間に子どもたちに囲まれてしまった。
「すごい人気ですね」
「それもそうさ。パキラはいまや皆のお姉さんだからね」
「神父様!?　いつの間に!?」
　気配なく背後に忍び寄られると心臓に悪い。
「神父様、シスター・パキラただいま戻りました」
　深々と頭を下げるパキラさんの頭を、ニコニコしながら撫でる神父様。
「お疲れ様、ゆっくり休んで……と言いたいとこだけど、どうやら面白い情報を掴んできたみたいだね」
「面白いかどうかは分かりませんが……」
「まぁいい、とりあえず中で話を聞こうか。ちょうどガーデンがクッキーを焼いた所だしね」
　あの人がクッキーを?　意外、でもないかな。孤児院(教会)の実質トップみたいだし。

「シスター・ガーデンのクッキー!?」
「ど、どうしたんですか？　急に興奮して……」
「シスター・ガーデンのクッキーよ!?　これが興奮しないわけないじゃない！」
　若干、目が血走ってる。
「パキラ、グリフはブロッサム教会の人間ではないので何のことか分からないかと」
「あら、そうなんですね。てっきり私が遠出している間にまた神父様が連れ込んだのかと思いました」
「連れ込んだなんて、人聞きが悪いなぁ」
「パキラの言うことは事実です」
「……何の話でしたっけ？」
「シスター・ガーデンのクッキーが美味しいって話よ!!」
　グイッとパキラさんとの距離を縮められる。
「ちょ、顔近っ……」
「口に入れた途端にホロっと崩れるちょうどいい硬さ！　くどくない甘さ！　鼻から抜ける花の香り！　一度あれを食べたら二度と市販のやつなんか食べる気になれないわ！」
「あの！　近い！　すごい近いから!!」

「とにかく！　シスター・ガーデンのクッキーを――しかも焼きたてを食べられるなんてとっても運がいいってことよ!!　分かった!?」
「分かりました！　分かりましたから離れてください!!」
　間近にあったパキラさんの顔を引き離す。
「ブロッサム教会の人たちは皆距離感がおかしいのか……」
「私の顔に何か付いてますか？」
「……いいえ」
　シスターにその自覚は……無いよなぁ……
「はっはっは！　君も大変だねぇ！」
「笑い事じゃないですよ！」
「とにかく君たちも入りたまえ。ロゼはともかく、レフィリアちゃんには関係のある話かもしれないからね」
「オレに……つかおいクソ神父」
「あぁごめんごめん。レフちゃんには関係のある話かもしれないから」
「ちゃん付けもやめやがれ！」
　やっぱりレフさんがちゃん付けされてるのって不思議な感じがする。神父様にいいように遊ばれてるようだ

それにレフィリアという名前も……
「レフィリア……」
「あ？　何だグリ坊、オレの名前に文句でもあんのか？」
「あ、いや……いいと思います！　可愛らしくて！」
「あ」
神父様、その『あ』って何ですか？
「……グリ坊、どうやら一回死にてぇらしいな」
「なんでですか!?」
人は本当に怒りを覚えると笑顔を浮かべる。
そんなことを昔本で読んだことがある気がするけれど、今それを思い出したのは、目の前にいるレフさんが笑顔でこちらを見てくるからだろう。
『赤頭巾』に”可愛らしい”は禁句だよ。グリフくん」
「そんなの知りませんよ！」
「ちょうどいい、ちょっとオレのストレス発散に付き合えよ」
「パキラさんへのストレスを僕で解消しようとしないでください!!」
「騒がしいですね……何事ですか？」
そんなやり取りを続けていると、教会の中からガーデンさんが現れた。

「パキラ、戻っていましたか」
「ただいま帰りました、シスター・ガーデン」
ロザリオ神父の時と同様に深くお辞儀をする。
「いつまでも外にいないで、早く中へ入っていらっしゃい」
「はーい」
「ふぅ……助かった……」
ガーデンさんに従い教会の中へ入っていく。
その途中、僕はある人の視線に気づいた。
「クローバーさん？」
教会の入口を抜けた先、聖堂へと続く大きな庭からクローバーさんがこちらを覗いている。
「グリフ、どうかしましたか？」
「シスターたちは先に行っててください！　僕も後から追いつきますので！」
「おい！　グリ坊……チッ、あの野郎どこ行く気だ？」
「仲良くしてくれると助かるよ、グリフくん」
「あ？　なんか言ったかクソ神父」
「いや？　なんでもないよ」

「というかアンタ、神父様に向かって失礼すぎよ！」
「チッ……うっせぇなアホ天使」
「アンタねぇ……！」
「まぁまぁ、こっちも久しぶりの再会なんだ。二人とも仲良くしようじゃないか」
「「絶ッ対無理!!」」
「ははっ、息ピッタリ」

10：姉と弟

「あの、クローバーさん？」
「っ!?」
　こちらに振り返る彼は、目を大きく見開き心底驚いた顔をしていた。
「こんなところでどうしたんですか？」
「なんでも、ない」
　気まずそうに視線を地面へと向け、腰を下ろしたクローバーさん。僕も同じように彼の隣に座った。
「パキラさんのこと、出迎えてあげないんですか？」
「……行く。けど」
「けど？」
「パキラ姉さん、せっかく『お姉様』に会えたから、邪魔したら、悪い」
　『お姉様』……あぁ、シスターのことか。
「『お姉様』は、パキラ姉さんの憧れ。昔から、よく、話してくれた」
「二人ともとても仲が良さそうですからね」

「俺は、会ったこと、なかった、けど、あの人の話を、するときは、姉さんはいつも嬉しそう。だから、俺も楽しい」
　ふとクローバーさんの顔が曇る。
「でも、その後には、決まって悲しそうな顔する。だから、俺も悲しい」
「悲しそうな顔……」
　ふとシスターに出会えて号泣するパキラさんの顔が思い浮かんだ。
「『自分には何も出来なかった』って、すごい悔しそう」
「『目の前で家族がいなくなるのを、止められなかった自分が嫌い』って」
　その言葉は、僕の胸の奥の暗い部分にも突き刺さった。
　目の前で家族が、大切な人たちが徐々に悪魔に殺されていったことを、僕は何一つ知らなかった。
　何も出来なかった。
　最後の、最期まで。
「俺は、パキラ姉さんが、好き」
「うえ!?　あ、ん!?」
　急に愛の告白!?
「パキラ姉さんは、俺を助けて、くれた」

「俺が欲しかったものを、たくさんくれた。家族も、家も、名前も、俺には、無かった」
「この包帯だって、姉さんが巻いてくれた」
嬉しそうに頭の包帯に手をやる。
「そう……なんですね」
ここにいる人たちは皆孤児。経緯は知らないけど、おそらく全員が幸せな半生を送ってきたとはいかないだろう。
「グリフは、〝奴隷〟って、知ってる？」
〝奴隷〟……確かサンナ王国の南にある国で今でも容認されてるっていう……」
「そう、俺は、昔奴隷だった」
昔、本で読んだだけの知識だが、奴隷というのは低賃金かつ劣悪環境で強制的に働かされているらしい。
人身売買、人間の価値をお金で換算し取引される。このサンナ王国内ではもちろん禁止だ。
事情は様々だが、親に棄てられたり、返しきれない借金があったり、そういうやむを得ない理由で人は奴隷になる。いや、させられる。
「奴隷ってそう簡単に抜け出せるものじゃないはずですけど、ブロッサム教会がクローバーさんを買ったってことですか？」

「たぶん、違う。パキラ姉さんが、『来る？』って聞いたから、だから俺は、ここにいる」
……奴隷強奪なんて、とんでもない事なのではないか？
「俺は、パキラ姉さんに、救われた。パキラ姉さんが笑っていると、俺も笑顔になれる。あの人には、ずっと笑っていて欲しい」
「クローバーさん……」
この人は、とても一途だ。
本当に一途にパキラさんのことを思っている。
……この人の助けになりたいと思うのは、おかしなことだろうか？
「だから、グリフにも手伝って欲しい」
「っ！　僕に……ですか？」
一瞬、心を読まれたのかと思って驚いたが、多分そんなことは無いだろう。
「ダメか……？」
「……僕に出来ることなら」
「ありがとう……！　グリフは良い人だ……！」
僕の手を取り、子供のように喜ぶクローバーさん。
途切れ途切れの言葉でも、彼がとても喜んでくれているのは容易に理解できた。
「それで、僕は何をすれば？」

「友達、になって欲しい。パキラ姉さんの、友達に」
「パキラさんの？」
「姉さんは、今よりもっと小さい頃に、神の加護が発現したみたい、だから、その時の友達、皆離れていった」
「どうして離れていったんですか？」
「加護の力は、特別な力。人は自分たちの理解できない存在を、恐れ、遠ざける」
「だから……」
「余計な気遣いはいらないわ」
　気がつくと目の前にシスター……に抱きついているパキラさんが立っていた。
「どこに行ったかと思ったら、ここにいたんですかグリフ」
「シスターこそ、まだ捕まってたんですね」
「言い方が悪いわよアンタ」
　これは憧れとかもうそういう次元じゃないぞ。〝依存〟と言っても差し支えないレベルだ。
「パキラ姉さん」
「アンタって子は……何をコソコソしてるのかと思えば、そんなくだらないことを客人に相談してんじゃないわよ」

「くだらないこと、じゃない。大事なこと」
　しばらくの間クローバーさんとパキラさんの睨み合いが続いた。
「はぁ……まったく、頑固ねアンタ」
　諦めたように溜息をつき、今度は僕の方へ向き直る。
「まぁ？　アタシの可愛い弟からの頼みだし？　アンタがどうしてもって言うなら友達になってあげてもいいわよ？」
　照れくさそうに、けれどどこか嬉しそうに、二つに結んだ金髪の片方を指でクルクルといじるパキラさん。
「グリフ、姉さんは、恥ずかしがってるだけ」
「あ、それは何となく分かります」
「ちょっと!?」
　僕もいつまでも座ってる訳にはいかないので、立ち上がって僕よりほんの少し背の高いパキラさんと目線を合わせる。
「……で？　アンタはどうしたいの？」
　少し不安げにそう尋ねるパキラさん。
　彼女はさっき、クローバーさんに「頑固だ」と言ったけれど、この人も充分頑固で素直じゃない。

「何笑ってんのよ」
「え？　あ、ごめんなさい」
どうやら無意識のうちに笑みが零れてしまっていたらしい。
これ以上機嫌を悪くさせない方がいい。
「あの、じゃあよろしくお――」
「しょうがないわね！　そこまで言うなら友達になってあげてもいいわ!!」
「……」
まだ言いきってない……けどまぁいっか。
「姉さん、よかった」
「アンタは心配しすぎよ！　そしてグリフ！」
「は、はい？」
「改めてよろしく頼むわ！　友達として！」
「はい！　よろしくお願い……」
あれ？　友達だからもう少しくだけた口調の方がいいのか？
「これからよろしく！　パキラちゃん！」
手を差し出し、出来る限り笑顔で僕は握手を求めた。
その一方で、パキラちゃんは口をポカーンと開けている。

「……ちゃん付けされるあの赤頭巾の気持ちが分かった気がする」
　分かりたくもなかったけど、そんな嫌味を言いながら、彼女は僕の手をとった。
「それとクローバーさんも」
「俺、も？」
「ほら、せっかくこうやって知り合えたんですし、この街のこととか、教会のこととかもっと教えて欲しいですから！」
「……うん。ありがとう」
　座ったままの自分に差し出された手を、彼は少し躊躇いげに、けれどしっかりと握りしめた。
「クローバー、でしたね。私からもお礼を言わせてください」
「私は自分の都合でパキラや家族の側にいることができませんでした。彼女たちには寂しい思いや不安な思いをさせたと思います。だから……」
「妹の側に居てくれてありがとう」
　相変わらずの無表情で、感謝の言葉にも感情はこもっていなかったが、シスターの気持ちは確かに伝わっているようだった。
「どう、いたしまして、で、いいのかな」
「ほら！　いつまでもへたりこんでんじゃないわよ！　立ちなさい！」

「あっ」
　パキラちゃんに言われ、クローバーさんはようやく立ち上がった。
「それとねクローバー。アンタ、久しぶりにお姉様に会えたアタシに気を使ってこんなとこに隠れていたみたいだけれど、余計な気を回しすぎだわ」
「……ごめん」
「久しぶりにアタシが帰ってきたのよ？　弟のアンタが誰よりも先に出迎えないでどうするのよ！」
「ごめん……」
「背筋伸ばしてもっと堂々としてなさい！」
　パンパンとクローバーさんを叩いてから、思い切り威張るような仕草をしてパキラちゃんは言い放った。
「アンタはなんてったってこのアタシ、『銃天使』パキラの弟なんだから！」
　そう言い切る姿には、シスターと離れ離れになり不安と後悔で泣いていた女の子なんてどこにも見当たらない。
「うん、ありがとう」
　どこまでも自信に満ち溢れた、弟想いの天使の姿だった。

「そういえばクローバーさんっていくつなんですか？　明らかに僕とパキラちゃんより上な気がするんですが」
「確か、十八？　よく、分かってないけど」
「身長も僕より全然大きいですし……」
「な、何よ、何なのよその目は！」
「パキラちゃんって傍から見たらお姉さんというよりかは」
　妹に見える。と言い終えるよりも先に――
「教会に入ったのは私のが先だから私が『お姉さん』なの!!」
　怒られてしまった。かなりの声量で。
「俺も、それが、いい。弟、がいい」
「ほらね!?」
「ほらねって……」
「まったく、失礼しちゃうわ！　それに！　アタシのお姉様はロゼお姉様とマリーお姉様だけ……っ」
「え？」
　マリーお姉様？

「マリー……？　そんな人、いない、気がする」
「クローバーさんでも知らない人なんですか？」
「え、えぇ……その……」
　言い淀んでしまったパキラちゃん。やってしまったというような表情でシスターを見る。
「マリーは私の親友です」
「あ、そうなんですね。じゃあ後で挨拶しに行かないと」
「もういません」
　……もういない？
「それは、教会を出ていったってことですか？　それともシスターみたいに破門にされた――」
「死にました」
　あまりに自然に、無感情にそう言うから、聞き返すことすらできずにその場に立ち止まった。
　少し前を行くシスターが、こちらを振り返ってもう一度告げる。
　先程クローバーさんへ感謝の言葉と同じように。感情の無い言葉で。
「マリーゴールドは七年前に死にました」

～【???】～

「さぁ……時は来た！」

「目標は王都ブルーティカス！　及びブロッサム教会!!」

「皆の者！　今こそ復讐の時だ!!　あの忌々しい人間どもを残らず踏み潰せ!!」

《font:u87》ウ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　《/font》!!!!!

「『悪魔の行進（スタンピード）』の開幕だッ!!!」

悪魔の行進編

11：聖なる光と悪魔の行進

「いい？　よく見てなさいよ？」

僕を含めたクローバーさんや教会の子供たちが、息を飲んでパキラちゃんを見守る。

「⊠天使の回転式拳銃（エンジェリックリボルバー）⊠！」

空中に放り投げられたのは一個の真っ赤なリンゴ。

それに照準を合わせ、パキラちゃんは拳銃の引き金を引いた。

銃声とともに光り輝く弾丸が銃口から発射され、寸分狂わずリンゴの真ん中を撃ち抜いた。

「まだまだ!!」

流れるように左手に持ち替え、続けざまに二発。

二発とも一発目に空いた穴に通す、とてつもない正確性。

「まっ、ざっとこんなもんね」

「おぉ……！」

穴の空いたリンゴをキャッチし、こちらへ自慢げに掲げる。

「な！　パキラねぇちゃんかっけぇだろ!?」
「はい！　カッコイイです！」
「当然、姉さんだから」
　どうやら子供たちはもれなく全員パキラちゃんのファンのようで、皆目を輝かせていた。
　かくゆう僕もその一人である。
「でも、一体どうなってるんですか？　普通リンゴを拳銃で撃ち抜いたら、こうバーンって弾け飛ぶ気がするんですけど」
　パキラちゃんの手にあるリンゴは真ん中に綺麗な空洞ができている以外は、元のリンゴと何ら変わらない。
「それはアタシの加護の力のおかげかもね」
「パキラちゃんの加護の力は確か……銃弾に光の力を乗せて放つ、でしたっけ？」
「赤頭巾から聞いたのね。まぁそれで大体は合ってるわ」
「あの城壁で七匹目の鳥の悪魔を撃ったのって……」
「え？　あぁ、☒天泪（ヘブンズクライ）☒のことね」
　パキラちゃんは持っていた白い拳銃から銀色に光る銃弾を取り出した。
「☒天使の回転式拳銃（エンジェリックリボルバー）☒ってのは、この銀製の弾丸の威力と速度を加護の力で底上げす

るものなの」
「でも☒天泪(ヘブンズクライ)☒は銀の弾丸を必要としない。１００％加護の力だけで作った光の弾丸を放つ」
「威力も段違いだけどその代わりに生命力の消費が多いの。気軽にバンバン撃てるようなものじゃないわ」
「へーー！」
　なるほど、レフさんの言っていたようにあの技はパキラちゃんの『奥の手』のようだ。
「他にももう一つ技があってね」
　するとパキラちゃんの黄色の瞳が光を持ち始めた。
「☒天眼(キューピットアイズ)☒。悪魔の位置や核の場所が分かるの。まぁこれも結構生命力使うからだいぶ疲れるんだけどねぇ……」
「パキラちゃん、その”生命力”ってなんですか？」
「そういえばアンタ、加護の力について何にも知らないのね……せっかくだしアタシが軽く教えてあげる！」
「本当ですか!?」
　実はものすごく気になっていた。それが今やっと分かる……！
「と言っても加護の力については分からないことだらけらしいから、分かってない所も

多いけど」
「構いません！　教えてください！」
「そんな目をキラキラさせちゃって……あんまり期待されても困るのだけれど」
そんな前置きを置いてからパキラちゃんは説明を始めた。

「まず、”加護の力”というのは名前の通り神から授かった聖なる光の力のことよ」
「銀製の武器と同じ、人間が悪魔を殺せる数少ない手段の一つ……だけど銀製の武器と違うところもあるわ」
「一つはその威力」
「銀製の武器とは段違いの火力で悪魔を屠れるのが加護の力の一つの利点ね」
「次に扱える人間が限られているところ」
「銀製の武器は使おうと思ったら誰でも使えるけど、加護の力は基本的にアタシたち聖職者、その中でも限られた人間にしか使えないわ」
「一つの教会で加護持ちが一人二人いれば、そこはいわゆる大教会ね。……うちは相当異常だけど」
「……あぁ、そう。なんで聖職者にしか使えないのかってのが加護の力について分

かってないことの一つよ」
「一度神父様に聞いたことがあったけど、”神への祈り”がどうとか……正直よく分かんなかったわ」
「そして最後に……力の代償」
「神の加護を使う、それは言い換えれば神から力を借りてるのよ」
「強い力にはそれ相応の対価が必要になる。神もタダで力を貸すほど心が広くないってことよね」
「でもそんなもんよ。『何かを欲するのなら、それと同等の何かを支払わなければならない』昔、神父様によく言われたわ」
「アタシたちは自分の生命力を代償に、悪魔を殺せるこの力を神から借りてるわけ」
「……もしも生命力を使い切ったらどうなるのかって？」
「すぐに死ぬ……訳じゃないらしいわ」
「アタシたちだって生命力を使えば普通に疲れるけど、限界まで生命力を消費しきると体が全く動かなくなるらしいの。生命力は文字通り人間の命の源だから当然よね」
「もちろん加護の力も使えなくなる。……でも仮に、限界を超えて力を使い続ける(支払い)と」
「病気になるんだって」

「神へと至る病（ニルヴァーナ）」

「神の力を使いすぎた人間は、やがて人間を超え、そして神になる」

「はい、これがアタシの知ってること全部よ。どう？　満足した？」

……思わず聞き入ってしまった。

「は、はい。ありがとうございました。とても分かりやすかったです」

「そっ、なら良かったわ」

神から借りた加護の力。その取得方法は不明。悪魔への特攻を持つ代わりに、使いすぎると己の命そのものを削り、やがて神になる……

『神になる』とはどういう事なのか、どうやらパキラちゃんにもよく分かっていないらしい。

「あの、一つ質問いいですか？」

「アタシに答えられることなら」

「加護の力を得るためには”神への祈り”が必要だって言ってましたけど、それは聖職者になって、祈れば誰でも力が手に入るってことですか？」

もしそうなら僕にも……

「詳しいことは神父様に聞いてちょうだい。でもそうね……」

少し考える素振りを見せた後、パキラちゃんは続けた。

「確か、三十年間毎日祈り続けても加護の力が得られない人もいれば、アタシやシスター・ガーデンみたいに若い頃から力を授かった人もいるって話よ」

「ガーデンさんもですか？」

「そうですよ」

振り向くとガーデンさんが後ろに立っていた。

「あ、ガーデンさん。こんにちは」

「はい、こんにちは」

気づくと誰かが後ろに立っている、という状況に慣れてしまった自分がいる。

「お庭の手入れ中ですか？」

「ええ、そうですよ。後は加護の力を無闇に発砲する修道女（シスター）への説教……でしょうか？」

ギラリとガーデンさんの目が光る。

その視線の先にいるパキラちゃんは、顔から滝のような冷や汗を流しながらクローバーさんの背中に隠れていた。

「いや！　パキラちゃんは僕に加護の力について説明してくれただけで！」

「知ってますよ。冗談です」
　全く目が笑ってないんですけど……
「しかし実際に使用するのは頂けませんね。貴方の☒天使の回転式拳銃（エンジェリックリボルバー）☒は実弾を消耗します。聖教会から支給されるとはいえ、銀の弾丸もタダじゃないんですよ」
「ごめんなさい……」
「実演なら私が引き受けましょう。グリフさんには一度見せたことがあるはずです」
　そう言うとガーデンさんの周囲から植物のツタが生えてきた。
　植物がまるで生きた動物のように動いている。これがガーデンさんの加護の力？
「植物を自在に操る。そんな人智を超えたことも加護の力なら可能です」
　ガーデンさんの声に反応するように、植物のツタから色とりどりの花が咲きみだれる。
「もしかして、この教会の庭も……」
　ここブロッサム教会は植物に囲まれた教会だ。
　入口（エントランス）を抜け、大聖堂へと続く道の途中に広大な庭園が広がっている。僕たちが今いるのもそこである。
「全てが私の加護の力ではありません。入口にある花壇は子供たちが植えたものですよ」

庭で思い思いに遊ぶ子供たちを、とても優しい目で見守るガーデンさん。
「それより何故加護の力について聞いたんですか？　……もしや我々の仕事に興味を持ったとか？」
「ただ単に僕が気になっただけですよ。僕、好奇心が抑えられない質みたいで……」
「ふーん？　何でもいいけど、あんまり余計なことに首を突っ込んで死なないようにね！」
なんだろう……同じことをどこかの誰かさんに言われたような……
「パキラ、言い方というものがあるでしょう」
「本当のことです！　それに……なーんか見てて危なっかしい気がするんだよねアンタ」
「え？」
「アタシの直感だけどさ。意外と当たるのよ」
僕が危なっかしい……か。
「他にも質問があったら何でも聞いてください。ロゼの……シスター・スオンの友人は丁重にもてなさなければなりませんから」
「……じゃあ」
これを口に出すのは躊躇われたが、どうしても聞かずにはいられなかった。

「シスター・マリーゴールドって、誰なんですか？」
「っ……」
　パキラちゃんが「アンタ言ったそばから」という目で見ている。
「シスターが確かに言っていたんです。シスター・マリーゴールドは七年前に死んだと」
「もしかしたらシスターの感情が奪われたのに何か関係があるかもって……あと、僕の記憶が無いのも」
「アンタの記憶？」
　僕はクローバーさんとパキラちゃんとガーデンさんの三人に、僕が七年より昔の記憶を全て失っていること、僕とシスターが出会った経緯を軽く説明した。
「なるほど、そんなことが……」
「村人全員が悪魔憑きってだいぶヤバい状況だったわね。それを一人で殲滅するなんて流石はお姉様！」
「姉さん、そういうこと、じゃないと思う」
「そ、そうよね、ごめんなさい……」
「いいんですよ、シスターは確かに凄かったですし……悪魔に魂を殺された皆を、シスターは救ってくれました」
　そして僕も救ってくれた。

「辛い目に会いましたね」
「確かに悲しいことでしたけど、いつまでも泣いてばかりじゃいられませんから」
だから僕はシスターと共にここまで来たんだ。
僕がセルトグラへに棄てられた理由を、僕が生まれてきた理由を、記憶の全てを、取り戻すために。
「なるほどねぇ……その時にお姉様には感情が無いって話を聞いたわけか……」
「グリフさん、シスター・スオンはその時に感情を失った経緯については説明したのですか？」
「『悪魔に奪われた』とだけ……」
「なら私たちも話す訳にはいきませんね」
「え……」
「あの子がぼかしたことを、私たちが勝手に話していいわけはないんですよ」
「そう……ですよね」
僕は馬鹿か。他人の過去を詮索するなんて普通に考えれば駄目に決まっている。
例えそれが僕の記憶を取り戻すために必要なことでも……
「そのうちお姉様に教えてもらう機会もあるんじゃない？　それを待つしかないでしょ」

「……はい、そうします」
　修道女（シスター）について、悪魔について、色々な知識を得てきたけどまだまだ知らないことも多い。
　かと言って別に焦る必要はない。これからもっと色んなことを知っていけばいいんだ。
「パキラ、これを」
　話も一段落ついたところで、ガーデンさんは持っていたものをパキラちゃんに渡した。
「パキラちゃんそれは……弾丸ですか？」
「ただの弾丸じゃなくて悪魔を殺せる銀の弾丸よ。聖教会からの特注なんだから！」
「それが分かっているのなら今後は無闇に発砲しないように」
「はーい」
　受け取った銀の弾丸を慣れた手つきで銃に込めていく。
「銃弾ってそうやって交換したりするんですね」
「みたいね。アタシのは神父様が作ったから普通のは分からないけど」
「へー神父様が作ってええええ!!!??」
「きゅ、急に大声出さないでちょうだい！　ビックリするでしょ！」

神父様が手作り……!?　というか拳銃ってまず作れるの!?
「確かにイメージとは少し違うかもしれないですね」
「少しじゃないですよ!」
「グリフ、落ち着いて」
そっと肩にクローバーさんの手が添えられる。
「えっと……それじゃ神父様は、神父だけじゃなくて鍛冶屋みたいなことも出来るんですか?」
「神父様は、趣味、って言ってた」
「趣味!?」
趣味で銃作っちゃうのあの人!?
「なんか昔友達から教えてもらったらしいわ」
「それ、どんな友達なんですか……」
「さぁ?　神父様は謎が多いから。シスター・ガーデンなら何か知ってますか?」
「そういえば、シスター・ガーデンは、神父様と古くからの付き合いだって、聞いたことが、ある」
「……ええ、確かに彼は器用でした」
「「……?」」

一瞬、ガーデンさんの目が教会の子供たちを見る時と同じようなものになった気がした。
「それよりパキラ、奥の聖堂でロザリオとレフが待っていますよ」
「赤頭巾がぁあ???」
「うわすごい顔」
本当にレフさんが嫌いなんだな……というか、二人は何でここまで仲が悪いんだ？
「そうですか……ロゼがパキラを呼んだ方がいいと言っていたのですが、嫌なら仕方ないですね」
「聖堂ですね！　すぐに行きます!!」
土煙と「お姉様」とギリギリ聞き取れる奇声をを上げながらパキラちゃんは走り去っていった。
本当にシスターが大好きなんだな……二人が仲がいい理由もあるのだろうか？
「行っちゃいましたね」
「まったくあの子は……単純すぎると言うかなんと言うか」
「それが、姉さんの、いいところ」
「お姉様大好き度なら貴方もパキラに負けてはいませんよ」
「あはは……」

さっきの話でのガーデンさんの違和感、上手く流されちゃったな。
それについても別に焦る必要はない、か……
「っ！」
「ガーデンさん？　どうかしましたか？」
ガーデンさんの纏う空気が一気に張りつめたものへと変わる。
「何かがこちらへ向かってきます。クローバー、子供たちを連れて聖堂へと避難を」
「分かった」
「ガーデンさん、その何かって……」
「少なくとも人では無いようです」
「グリフ、行くよ」
「は、はい！」
クローバーさんと一緒に、外に出ていた子供たちを聖堂へと避難させる。
こっちに向かってる、しかも人じゃない何かって……
「ちょっと！　何の騒ぎ!?」
「どうやら外で何かあったみたいだね」
「おいグリ坊、説明しろ！」
「僕にも分かんないですよ！」

聖堂の中にはガーデンさんを除く、教会の全ての人が集まっていた。
「私達も行きましょう」
「ちょ、お姉様!?」
「しゃあねぇ……オレらも行くぞ！」
シスターに続いてレフさんとパキラちゃんが外へ出ていく。
「ぼ、僕も……」
「待った」
「うぐっ」
僕も皆に続こうとしたが、やはり神父様に止められてしまった。
当たり前だ。皆と違って力の無い僕が行っても足でまｔ
「僕も一緒に連れていきたまえよ」
「……え？」

なぜか神父様の手を引いて中庭へと駆けていく。
中庭では先に向かった四人と知らない人が対峙していた。
いや、知らない”人”と呼ぶべきではないだろう。

僕の知る限り、羽の生えた人間なんてものはこの世に存在しない。
「あ……れは……」
「見ての通り悪魔さ」
その異形を見慣れているからか、何食わぬ顔で平然と言ってのける。
「ギャヒャヒャヒャヒャア!!!!　愚カナ人間ドモォ!!　コレカラ言ウコトヲ!!　一語一句漏ラサズ聞キヤガレェ!!!!」
爆音で叫び散らす悪魔に、僕を含めたこの場にいる全員が不快感を覚えた。
「……るっせぇな、ぶっ殺すぞ」
「ねぇシスター・ガーデン、こいつ撃っていいですよね？」
「待ちなさい。彼はどうやらただの伝達係のようです。情報を全て吐くまでは殺してはいけません」
「どうやらブルーティカス中に同じような悪魔が出現しているようですね」
教会の外からも、悪魔の不快な叫び声と街の人々の叫び声が混じった声が聞こえる。
「ワレラガ主ハ！　ココ二『悪魔の行進（スタンピード）』ヲ宣言サレタ!!」
「ワレワレハ今ヨリ二時間後!!　コノ街ヘト進行スルッ!!」
「恐レ！　逃ゲ惑イ！　蹂躙サレヨ!!!」
「ソシテ覚エテオクガイイ!!　貴様ラ人間ドモヲ踏ミ潰ス、コノ偉大ナ名ヲ!!!」

「魔帝ヘルズゲート!!!　ソレガ――」
ヘルズゲート。
聞き覚えがある名前をその悪魔が発した瞬間、悪魔の身体に無数の穴が空いた。
「⊠天使の回転式拳銃（エンジェリックリボルバー）⊠」
全身空洞だらけになった悪魔は、黒い灰となって空中に消えていった。
「ヘルズゲート……」
あの悪魔は確かにそう言った。
その名前を聞いただけで、身体の芯から震え上がってしまう。
あの白髪の悪魔。
恐怖の塊と言うべき存在。
『俺の名はフィア・ヘルズゲート。俺の存在は恐怖によって確立される』
まさかあの悪魔が……
「さて！　面倒くさいお客さんも来るみたいだし、僕らは僕らでおもてなしの準備をしようか！」
「そうですね」
「相手の戦力も聞いておきたかったのですが……パキラ、貴方という子は……」
「ごめんなさい……シスター・ガーデン」

「ハッ、テメェは後先考えねぇならいつまで経ってもアホ天使なんだよ」
「眉間に穴ぶち空けて欲しいのかしら？」
「あ、あの！」
　いつも通りといった様子で聖堂へ戻ろうとする皆を呼び止めた。
「さっきの悪魔、『ヘルズゲート』って言ってましたよね……？」
「うん、言ってたね。それがどうかした？」
「その悪魔、僕たち知ってるんです！　ブルーティカスに来る直前に僕たちを襲った悪魔で！」
　もしシスターにもレフさんにも倒せなかったあの悪魔がやって来たら……
「あぁ、なんだそういう事か」
「え？」
「安心するといいグリフくん、今やって来たのは君たち三人が出会った悪魔の使いなんかじゃないよ」
　あの白髪のフィア・ヘルズゲートじゃない……？
「完全なる偽物さ」
「に、偽物？」
「うん、偽物」

「偽物です」
「偽物よね」
「偽物だな」
　皆が僕の方を見て頷く。
「もし奴らが本物のヘルズゲートの軍勢なら、あんな馬鹿げた宣戦布告なんかしてこないさ」
「ハッキリ言って茶番でしたね。パキラが早々に切り上げようとするくらいの」
「ごめんなさい……ついイライラして……」
　気まずそうに顔を伏せるパキラちゃん。慰めるシスターにも尋ねてみた。
「シスターも気づいてたんですか？」
「はい。なんとなくですが」
「あの胸糞悪い気配も近くにないみたいだしな。あんなもんが来たらすぐに分かるぜ」
　自嘲と恐怖が混ざったような複雑な顔でレフさんが笑う。
「ブルーティカスに攻め込むって言ったその悪魔が、どうして『ヘルズゲート』なんて名前を名乗っているかは知らないけど、僕たちを舐めてかかるのは賢い行いとは言えないね」
「ブロッサム教会に対して戦いを挑むのならなら、一匹残らず全力で灰にしてあげま

しょう」

いつものレフさんの笑顔と同じ、不敵な笑みを浮かべる神父様とガーデンさん。

……悪魔より恐ろしい神父と修道女（シスター）だ。

「とりあえずは作戦会議をしようか。この街全土に悪魔が進行するとなると市民にも被害が及ぶだろうね」

「教会を開放しましょう。クローバーと加護の力を持っていない一般の修道女（シスター）で怪我人の治療を」

「そうしようか。じゃあパキラ、皆を聖堂に集めてくれ」

「了解しました」

「レフィリアちゃん。悪いけど悪魔退治に付き合ってくれるかい？　報酬は出すよ。……国が」

「悪魔をぶっ殺すのがオレの仕事だ。それにちょうどあの白髪野郎にやられてムシャクシャしてたとこだぜ。協力してやるよ」

「そいつは頼もしい！　それじゃあレフィリアちゃんも準備してくれ」

「だからその名前……っあぁもういい！　好きに呼びやがれクソ神父!!」

そんな捨て台詞を残してレフさんは聖堂の中へと消えていった。

１２：悪徳王子と開戦前

神父様を中心にテキパキと、けれど落ち着いて物事が回っていく。
僕にも何かやれることは……
「あの……神父さ――」
「これはこれは！　皆様お揃いのようで！」
「!?」
神父様に声をかけようとした僕の真後ろから、男の人の声が突然聞こえてきた。
振り返ると白と赤で彩られた軍服に身を包んだ男性が立っていた。
「ん？　おやおやすみません、驚かせてしまいましたか？」
「あ、いえ大丈夫です……」
僕よりも背の高いその人は、少し屈んで目を合わせてから丁寧に謝罪をした。
オレンジ色の髪を額が出るように上にあげ、その細い目からはどこか見覚えのある黄色の目が覗いている。
「ちょっとグリフ！　こっち来なさい！」
「え、パキラちゃん!?　聖堂に行ったはずじゃ――」

「いいから来なさい!!」
パキラちゃんに手を引かれ、何故かとてもつもない勢いでその人から距離を取らされた。
「どうしたんですか急に!」
「あいつは危険なの！　すっっっごい怪しいのよ!」
「ええ!?」
細い目でこちらを見る彼は、確かに不自然なくらいニコニコとしているけど……
「ククク……相変わらず『銃天使』様はワタクシの事がお嫌いのようで。ワタクシ傷ついてしまいます」
「思ってもないことをペラペラと……!」
表情を笑顔から一切変えずに話すその姿には、どこかシスターに似たものを感じるような……
「ククク……」
「ッ……!　あんたねぇ……そのにやけ顔やめなさいよ!!」
「パキラちゃん落ち着いて!」
「離しなさい!!」
暴れるパキラちゃんを羽交い締めにして、今度は僕が距離を取らせる。

「お、アポロくんじゃないか！　ちょうど良かった。僕の方から行こうと思ってたとこだよ」
「神父様、この人と知り合いなんですか？」
「うん、紹介するよ。こちらサンナ王国第一王子のアポロ・サンナくん。仲良くしてあげてね」
「よろしくお願いいたします」
「あ、よろしくおね……」
……？　今なんて……
「第一王子!!??」
「はい、第一王子です」
　見ると教会の外には荘厳な甲冑を身につけた兵士たちがズラっと整列している。
「え、えぇ……？」
「ククク……またまた驚かせてしまったみたいですねぇ」
　ニコニコ……いやニヤニヤとした笑顔で笑うこの人が第一王子とは……申し訳ないけど何か裏があるように見えなくもない。
「ほらね！　グリフも怪しいって重いでしょ!?」
「パキラちゃん、この人王子ですよね？」

「知ってるわよ!!」
「じゃあ国のトップに暴言吐くのはやめた方がいいと思います」
　こんな態度でよく怒らないな……いや、実は怒りを笑顔で隠しているだけだったりして……
「これはまた面白い方が加わったようですねぇ、ロザリオ殿?」
「グリフくんは教会の子じゃないんだけどね」
「おや、ではあちらの見慣れない修道女(シスター)のお嬢さんもでしょうか?」
「あぁ……この子は――」
「お初にお目にかかりますアポロ王子。私の名前はシスター・スオンと申します。以後お見知りおきを」
　神父様から紹介されるよりも前に、シスターはいつも以上に丁寧に頭を下げた。
「これはこれは、ご丁寧にどうもありがとうございます」
「そして妹の非礼を謝罪します。申し訳ありませんでした」
「お姉様!?　そんな奴に頭を下げる必要は――!」
「パキラ、少し黙ってなさい」
「ん!?　んんんんーーッッッ!!!」
　ガーデンさんの加護、植物のツタで口と動きを封じられたパキラちゃんは、必死の形

相で暴れ回っている。怖い。
「はぁ……お見苦しいところをお見せしました」
「お気になさらずガーデン殿。それではそろそろ本題に入りましょうか」
「うん、そうしてくれると助かるよ」
どうやら神父様はこの人を信頼しているらしい。だから本当に悪い人ではないんだろうけど……
「ダール」
アポロ王子がそう呼ぶと、他の騎士よりも派手な甲冑を身にまとった、どこか不機嫌そうな大男がやってきた。
「なんでこんな花臭い教会なんぞに……」
「彼はワタクシの側近で、王国騎士団の団長をしている者です。ダール、王命を」
「……承知しました」
その男は明らかに嫌そうに、しかし高らかに王の勅命らしき文書を読み始めた。
「つい先程、王都に悪魔の侵入を確認した！　その魔物の言葉によると――」
「あぁ、それなら僕らもさっき聞いたよ」
「……チッ」
……なんだろう、このダールとかいう人、とても感じが悪い。僕らを下に見ているよ

うな、そんな気がする。
「それで王からの命令ってなんだい？」
「ダール」
「……よって！　貴殿らブロッサム教会には、我ら王国騎士団と共にブルーティカスに進行する悪魔の討伐を命じる！　これは王命である！　謹んで承れ!!」
「りょーかーい」
「っ……！」
　この場にいる全ての人が思っただろう。
「（返事軽っ……!!）」

「ま、まぁ、ロザリオは国王とも何度か顔を合わせていますし、もともとああいう性格ですし……」
　ガーデンさんは自分にそう言い聞かせたあと、深くため息をついた。
　ガーデンさんも大変だな……
「んじゃ、こっちの条件を言うね」
「じょ、条件だと!?」
「ええ、ぜひお聞かせ願いたい」

アポロ王子が満面の笑みで部下を遮り、神父様が屈託のない笑みで指を三本立てた。
「まず一つ。僕たちはこの教会を市民の避難所として、ついでに怪我をした人の治療所として開放するつもりなんだよ」
「ブロッサム教会にはクローバーや加護を持っていない一般の修道女もいるけど、それでも圧倒的に人手が足りないんだ」
「承知しました。最高級の薬品と、医学に通じる者たちを派遣しましょう」
満足そうに頷いてから、神父様は続ける。
「二つ目。それに関してここの警護をお願いしたい。僕やパキラが前線に出ている間に強襲されたら敵わないからね」
「承知しました……ですが悪魔たちがここを襲う動機はないのでは？　王都の中央に位置し、なによりあの『悪魔神父』に『銃天使』に『花園の守護者』がいる、悪魔にとっては最悪の教会です。奴らも戦闘になるのは避けるのでは？」
「いや、確実にここまで攻め入ってくるだろうね」
「その理由は？」
「奴らの狙いがブロッサム教会だからだよ」
「!?」
「簡単な話さ。目的がここじゃなかったらわざわざ僕らの所にまで宣戦布告しに来ない

でしょ？」
「た、確かに……」
何でもないかのようにそう告げる神父様だったが、僕を含め、他の皆は呆気に取られていた。
「それで最後の三つ目ね」
「全軍指揮を僕に執らせて」
「貴様ッ！　ただの聖職者風情が!!　あまり調子に――」
「やめろダール」
怒鳴るダールさんを強い口調で静止し、アポロ王子は神父様に問いかける。
「全軍指揮……それはつまり我々王国騎士団の指揮も、ということでしょうか？」
「もちろん！」
まるで母親からお菓子をねだるように、この少女の姿をした神父（悪魔）は今、国の第一王子から戦争の全軍指揮をねだっている。
「恐ろしい人だ、と思っていますね」
「分かりますかシスター」

「ええ、でも神父様は昔からずっとあんな感じなので慣れるしかありませんよ」
「はは……」
　笑うしか無かった。
「……ロザリオ殿、分かっているとは思いますが全軍の指揮を執るというのは責任が発生します。それも王国騎士団ともなるとそれ相応の」
「もし仮に、万が一にもこの悪魔との戦争に負ければ、大勢の国民が命を落とすでしょうねぇ……」
　笑顔は一切崩さず、神父様に詰め寄る。
「貴殿にその命が背負えますか？」
　辛うじて笑みを保ってはいるものの、その細い目の奥から光る眼光は真剣そのものだった。
　少しの沈黙の後、神父様が答える。
「僕を誰だと思ってるんだい？」
　少女のようなあどけない容姿で、神父のような慈愛に満ちた声で、悪魔のように。
「十字架なら、嫌という程背負っているさ」
　悪魔神父は笑った。
「ククク……どうやら愚問でしたねぇ、お詫び致します」

「安心しなよ、万が一にも奴らにこの街の人を殺させやしないからさ」
僕はこの人に出会って間もない。だからこの人のことをよく知っている訳でも、よく見てきた訳でもない。
けれどこれだけは断言出来る。
この人は信頼出来る人間だ。
「それでは先程おっしゃった三つの条件、全て承諾する旨を国王へ報告します」
「王子!!」
先程より穏やかな雰囲気で帰ろうとするアポロさんを、ダールさんが制する。
「王子いいのですか!? こんな教会の神父気取りの小娘に、我らの全軍指揮を執らせるとは! 正気とは思えません!!」
「……ッ!」
「口を慎みなさいダール」
あの人がどれほど偉い人なのかは知らないけど、今の言葉が決定的だったのは違いない。
「あの野郎……殺していいわよね……?」
いつの間にかガーデンさんの拘束を解かれたパキラちゃんの殺気が、僕の背中を鋭く刺してくる。

「（その質問は僕に対してじゃないよね……!?）」
パキラちゃん、レフさんと同じくらい口悪いよ……
今度はチラリと横のガーデンさんを伺う。
「……!!」
「（すっごい怒ってる……!!）」
見なきゃ良かった。
「アッハッハッハッハッ!!　言っとくけど僕は男だよ？」
「王子！　どうか考えを改めて下さい!!」
「あっ、そう。無視するのね」
神父様だけは普段とあんまり変わんない、冷静なままなのか……
「……ダール、ロザリオ殿は男性ですし、剣の実力も足元にも及びませんよ」
「私がですか？　はっ、ご冗談を！」
「なら試してみるかい？」
「ロザリオ殿」
「いいっていいって。これも僕の仕事だからね」
「……っ！　申し訳ありません……それではよろしくお願い致します」
一瞬言葉に詰まったように見えたが、すぐにアポロさんは二人から距離を取った。

「それじゃあ王子様の許可も取れたし、早速始めようか！」
　そう言った神父様の顔はこれ以上ないほど眩しい笑顔だったけれど、どこか不気味さを感じるものでもあった。
「たかが教会の神父風情が……あまり舐めた口を聞くなよッ!!」
　神父様を脅すようにダールさんが腰のロングソードを抜く。
「ガーデン！　僕にもけｎ――」
　「僕にも剣をちょうだい」と言い終わるよりも前に、ガーデンさんから細い木の枝を放り投げられた。
「その程度の騎士ならそれで十分でしょう？」
　ニヤリと口を歪める。
　……パキラちゃんの口が悪いのって、もしかしてガーデンさんの影響だったりする？
「どいつもこいつも……王国騎士を舐め腐りやがって……!!」
「団長（トップ）がそんなだから舐められるんだよ？」
「後悔してももう遅いぞぉぉッ!!」
　猛々しく剣を振りかぶり、神父様へと襲いかかる！
「だあああッッッ!!!」
　頭上に振り下ろされた剣、それを神父様は木の枝で軽く受け止めた。

「なっ……!?」
「レフィリアちゃんの三分の一……もないかな」
「クソがあああああ!!!!」
何度も何度も振り下ろされる剣撃を、まるで鬱陶しいハエを払うようにいなしていく。
「昔はいい剣士だったんだね……ごめん」
「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”ッ!!!!」
「もういいよ」
そう神父様が言った直後、轟音を立ててダールさんの身につけていた甲冑が粉砕した。
「……え!?」
攻撃の瞬間も見えなかった。それに言うまでもなく、向こうが身につけていたのは金属製の鎧だ。それを木の棒で粉々に砕いた……？
あまりの衝撃に、白目を剥いて気絶したダールさんは神父様に抱えられアポロさんの部下へと引き渡された。
「重いけどよろしくね！」
「え、あ、はい!!」

まさか自分たちのトップが、こんな小さな女の子に負けたとは思えなかったのだろう。目を白黒させてダールさんを運んで行った。

「数々の非礼、重ねてお詫び致します」

申し訳なさそうな顔にはとても見えない、いい笑顔でアポロさんは謝った。

「いいってこと！　んじゃ！　後のことはよろしく頼むよ、アポロくん」

「お任せください」

「それじゃあ僕らも準備を始めようか！」

その呼び掛けに応えるように、僕を含めた教会の皆が神父様に続いていく。

こうして王都中を巻き込む悪魔対人間の戦争、『悪魔の行進（スタンピード）』が幕を開けた。

「……っ！　こ、ここは……!?」

「おや、目覚めましたかダール」

「王子！　私は一体……それにここは！」

「ご存知の通り城の地下牢ですよ」
「なぜ私がこんな所に！」
「なぜって……自分が一番分かっているでしょう？　貴方はこのワタクシに恥をかかせ過ぎた」
「ククク……後でロザリオ殿にはたっぷりお礼をしなくてはいけませんねぇ……」
「お、王子……何を言って……」
「これはこれは、貴方の処遇をまだ伝えておりませんでした」
「拷問官、徹底的にやりなさい」
「な、なんだコイツら！　どこから出てきた!?」
「おや知りませんでしたか？　彼らはこの地下牢を統べる拷問官。これから貴方がお世話になる人たちですよ」
「やめろ！　私に何をするつもりだッ!!　王子ッ!!!」
「無駄ですよ。既に手足はこの特注の鎖で拘束済みです。それに拷問官たちの羽織っているローブにも特殊な加工を施しておきました。貴方がここから出るのは不可能、と言っておきましょうか？」
「キ、キサマァッ!!!」
「それじゃあ後はお願いします」

「来るなぁぁぁ!!　ま、待て!!　待ってクレ―

「さて……スタンピード、悪魔の行進ですか……クククッ!!　柄にもなくワクワクしてきましたよ……!」

１３．開幕と殲滅

あの悪魔が伝えた悪魔の行進（スタンピード）開始時刻まで、時間はあっという間に過ぎていった。

約束通り、王都所属王国騎士団、総勢数万人の全軍指揮を神父様が執ることになり、現在神父様は王宮に集められた部隊長の騎士たちに嬉々として作戦を説明しているらしい。

一方僕はと言うと……

「ふぅ……こっち終わりました！　クレピスさん！」

こうして怪我した人を治療する班の準備を手伝っている。

「あら～！　ありがとうね～♪」

「あ、あの！　撫でないでください！」

「あら～ごめんなさいね、つい教会の子供たちと同じふうに接しちゃうのよねぇ～」

「僕もう子供じゃないです！」

僕にも何か出来ることはないかとガーデンさんに相談したところ、この人、クレピスさんの下で手伝うように指示されたのだ。

クレピスさん。綺麗なピンク色の長い髪をした、いかにも”お姉さん”と言った感じ

の優しそうな人だ。
ガーデンさんやパキラちゃんが言うには面倒見が良くて頼れる人らしいけど……なんか妙におっとりしてるし、僕を子供扱いしてくるし、後……
「ん～？　何かしら～？」
「い、いえ！　何でもないです！」
……大きいのだ。何がとは言わないけど、とても大きいのだ。
「……あ！　こ、これ！　持ってきますね!!」
「行っちゃったわね……よく働いてくれてとっても助かるわ～」
「はぁ……」
本当、何と言うか……
「心臓に悪い……」
「何がですか？」
「シ！スター……でしたか……」
感情を失っているからか、存在感がまるで無いんだよなぁ……シスターの方が心臓に悪いよ！
「シスターは何でここに？　確かパキラちゃんたちと一緒に神父様の作戦を聞いていたんじゃ……」

「既に終わりました。なので戦闘前にこうして挨拶を」
「……っ」
「グリフ？」
そうだ……今から始まるのは戦争……シスターやパキラちゃんは確かに強いけれど、相手は悪魔。人ならざる化け物たちだ。
シスターたちだって無事に帰ってこられるかどうか分からない。……もしかしたら、これが最後の会話になるのかも……
「……シスター、大丈夫、ですよね？　皆、ちゃんと無事に帰ってきますよね？」
「心配はいりません。敵の戦力はほとんど判明していますし、なにより神父様があの王子の前で誓いました」
『万が一にも、この国の人達を殺させやしないよ』
「あの人は昔から、決して約束は破らない人でした」
「でも、相手は悪魔ですよ？」
「はい。知っています。そしてそれを倒すのが我々修道女（シスター）です」
……ダメだな僕は。シスターに助けられた僕がシスターたちの勝利をしんじないでどうするって言うんだ！
「シスター」

「はい」
「ちゃんと帰ってきてくださいね」
「はい。約束します」
いつも通りの無表情でそう告げた。

～【サンナ王国・王宮】～

「ここまでしっかり戦闘準備ができたのは本当にラッキーだったけど、奴らにはそんなに自信があるのかね？」
「ロザリオ殿！　報告します！　全軍所定の位置に展開完了しました！」
「ん！　ごくろーさん！　君も戻っていーよ」
「はっ！　失礼します！」
「これはこれは、随分と立派に指揮を執られていますねぇ……」
「お、アポロくん！　君のおかげだよ！　君が声をかけてくれたから比較的楽に命令が伝達できた！」
「いえいえ、ワタクシは当然のことをしたまでですよ。……それにしても、これまた面白い戦闘配置ですねぇ。悪魔の主力部隊が陣取る東門を、この二人が守るのですか……」

「こっちの戦力は多く見積っても二千ちょっと。向こうはその倍以上はあると言っていいだろう」
「だからここに戦力を割きすぎるのは避けたい……だから通常の兵士の戦力を減らして、この二人に頑張ってもらうって訳さ！」
「安心しなよ。これなら確実に奴らの戦力を根こそぎ潰せる」
「クククッ！　これはこの目で見られないのが残念で仕方ありませんねぇ！」
「君はあくまで指揮監督だから仕方ないさ……っと、それじゃあ始めようか」
「行進を滅茶苦茶にしてやろう」

「ヘルズゲート様！　進軍ノ準備完了シマシタ！」
「皆の者!!　これより『悪魔の行進（スタンピード）』を開始するッ!!　全ての人間を蹂躙し、踏み潰せぇッ!!!!!」
「《font：u87》ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ《／font》!!!!!」
「進軍開始イッ!!!」

～【ブルーティカス東門】～

正直に、簡潔に、もっと簡潔にして一言で今の状況を言うなら……

最悪。

この一言に尽きるだろう。

おかげでさっきから戦場には舌打ちとため息が行き交っている。

少しは周りの士気とか考えないのかしら？　兵士たちが怯えてるのも見えないのね……

「ほんと最っ悪……」

何度目か数えるのも嫌になるほど、このセリフを吐き捨ててきた。

「それはこっちのセリフだよクソが……」

「何で神父様はこんなやつとアタシを同じ所に所属させたのかしら……」

「オレだってテメェとだけは死んでもゴメンだったのによ！」

「ならここで死んでおくというのはどうかしら？　今なら一発で楽に逝かせてあげるわよ？」

「ハッ！　テメェのオモチャみてぇなピストルじゃ傷一つ付けられねぇよ！」

「アンタが背中に背負ってる骨董品みたいな猟銃よりかはマシだと思うけどぉ!?」

「んだとアホ天使!!」
「何!?　やろうってのバカ頭巾!!」
「あの……」
「「あ”あ!?”」」
「そ、そろそろ作戦開始……」
　あーあ、またビビらせちゃったじゃない！　このバカ頭巾がもう少し自分を客観視できたら……はぁ……
「アンタと口喧嘩するのもそろそろ疲れたわ……」
「誰のせいだと……」
「もういいわ。ここは一つ勝負といきましょう」
「勝負ぅ？」
「えぇ、どっちが悪魔を多く殺れるか。負けた方は勝った方に絶対服従。どう？」
「乗った」
「あ、言っとくけど流れ弾に気をつけてよね。何せオモチャだから間違えて当てちゃうかも」
「テメェもせいぜい骨董品が暴発しねぇように祈っとけよ」
「「……」」

「弓兵撤退!!　歩兵戦闘準備!!　城門間もなく破られます!!!」
「……ッッッ!!!」
「ギャハハハハァ!!!　人間は一人残らず皆殺――」
「皆殺しだあああああッ!!!!」

「……ハ？」

「敵の本陣にぶつける一般兵士の数を減らす代わりに、パキラとレフィリアちゃんを投入。余った兵士は他の守りに専念してもらう」
「銃天使殿の瞳はとても強力ですねぇ」
「パキラの☒天眼（キューピットアイズ）☒は悪魔の位置、数、核の有無まで見えるからね。作戦が立てやすいよ」
「しかし恐れながらロザリオ殿、あのお二方の実力は存じておりますが、仲の悪さも承知しております。仲間割れなど、そんなつまらないことは流石にしませんよねぇ？」
「それは大丈夫だと思うよ。二人が仲悪く見えるのは性格の問題だね。二人とも似たもの同士だから、同族嫌悪ってやつだね」

「けど戦闘になると別さ」
「前に一度、仕事でパキラとレフィリアちゃんがブッキングしたことがあるんだけどね、それはもうすごい戦いぶりだったらしいよ」
「ほぉ……」
「だから何も心配はいらない！　僕が保証しよう！」

「あー手が滑っちゃったわー」
「⊠天使の回転式拳銃（エンジェリックリボルバー）⊠ッ!!」
「ギャアアアアアア!!!!」
　惜しいッ!!　後ちょっとで当たったのにッ!!
「んのアホ天使……今のオレ狙ってやがったろ……!!」
「死ネヤァクソ女ァ!!!」
「おっとオレも手が滑ったあー！」
「ンナアアアアッ!!??」
　銀の斧が悪魔の肉を削ぎながらアタシに向かって飛んでくる。
　アタシはそれを間一髪で躱した。

「チッ！　外したか！」
「アンタねぇ！　今完全にアタシ狙って斧投げたでしょ!!」
「そっちが先にぶっ放してきたんだろうが!!」
「ナンダアノ人間……仲間割レカ……？」
「クソ……舐メヤガッテ……！　スグニブッ殺シテヤル！」
「油断スルナ！　コノ女タチダケデ、ドレダケ仲間ガ殺サレタト思ッテル！」
「コイツラサエ殺セレバ、他ノ鎧ヲ着タ人間ハ雑魚ダ！　全員デ囲メ!!」
「……おい、アホ天使」
「何よバカ頭巾」
「コイツら、どうやらオレとテメェだけをロックオンしたみたいだぜ」
「ふんっ！　そんなの見れば分かるわよ！」
　アタシたちを囲む大量の悪魔。
　今この場にいる悪魔の八割はアタシたちを狙っている。まぁ残りの二割くらいなら一般の兵士だけでも対処出来るはずだから逆に好都合かもね。
「ちょうど良かったわ。これで神父様の作戦の成功率も上がるし」
「こっからはおふざけ無しで頼むぜ」
「はいはい、分かったわよ」

不本意にも程があるけど、今は、今だけは、この気に食わない『赤頭巾』と背中を合わせて共闘する。
「全軍！　ソコノ人間ヲブッ殺セェ!!!」
「殺れるもんなら殺ってみろやああああああ!!!!」
「穢らわしい悪魔が!!　身の程ってものを教えてあげるわッ!!!」

～【ブロッサム教会・救護班】～
いよいよ『悪魔の行進（スタンピード）』が始まった。
皆が食い止めているので、僕たち救護班と避難してきた人たちのいるブロッサム教会の近くまでは悪魔たちは攻め入って来てはいない。
しかし、ここに居ても外からは人や悪魔の叫び声が聞こえてくるし、怪我をした人や避難してきた人でこの場は溢れかえっている。
クローバーさんや教会の修道女（シスター）、王都の医療班の皆さんのおかげで、奇跡的に死者は一人も出ずに持ち堪えてはいるものの、戦局が把握できない以上、他にどれだけ死傷者がいるのかも分かっていない。
医療の心得がない僕は、怪我をした街の人を教会に案内したり、親とはぐれた子供を

避難させたりと、とにかく王都中を駆け回っている。
「はぁ……はぁ……なんか僕……ここの所、走ってばっかな気がする……」
それでも今は、僕に出来ることを。
「ん……あれって……っ!?」
空から飛来してくる無数の物体。
「まずい……!!」
走り疲れた体にムチ打って、僕は全速力で教会へと引き返す。
間違いない……あれは……!
「悪魔……!　城壁を飛び越えてきたんだ!!」
走りながら周りを確認すると、四方八方から同じように羽の生えた黒い物体がこちらへ飛んでくる。
おそらくあの悪魔の目的地はこの国の中心部。
「ブロッサム教会……!」
このまま走って間に合うか？　いや、そんなこと考えるな。
ただ走ることだけ考えるんだ。
「大丈夫……!　このまま走れば僕の方が先に教会に着く!　間に合う!　何とかなる!!」

そう自らに言い聞かせるのは、やはり悪魔への恐怖からだろうか？　けれど不思議と足はすくまない。
やることはハッキリしている。やれることは限られている。何を恥じる必要がある？　何を悔しがる必要がある？
例え無力な僕には、力のある皆にこの脅威を知らせることしかできないとしても……
「……ッ!!」
行き場のない無力感と焦燥感を振り払うように、僕は走った。
もう、すぐそこまで悪魔が来ている。

「ギャハハハハハハ!!　ドンダケテメェラガ強カロウガ、戦ワナケリャア良イダケノ話ダロウガヨォ!!」
「おいアホ天使!!　空に逃げられんぞ!!　早く撃ち落とせ!!」
「……ふふっ」
「聞こえてんのか!!　おいッ!!!」
「うるさいわね、そんな大きな声出さなくても聞こえてるわよ」
アタシの抑えきれずにこぼれた笑みを見て、バカみたいな顔でこちらを見てくる……

あぁ、こいつはもともとバカか。
「ふふふっ……！　いいんじゃない？　空だろうが何だろうが、戦いたくない奴はさっさと飛んでいけばいい」
「何言ってんだお前！　王都に侵入されちまうぞ!!」
「だから行きたい奴は行けばいいわ」
「は……？」
　どうでしょうね？　きっとコイツらはここでアタシたちに殺された方が幸せだったって思うかしら？
　そうね……きっとそう。
「あの人の庭に、穢れたアンタたちが土足で踏み込めば……」
「そこから先は、ただの地獄よ」
「精々栄養分にでもなってちょうだい」

「あと……ちょっと……!!」
　教会が見えてきた。
　足がもう限界に近い。

走る速度が落ちてきているのが、自分でも分かる。
それでも気力で前へと進む。
「悪魔たちは……え？」
きっとすぐ後ろまで、少なくとも肉眼で捉えられる位置まで迫ってきているに違いない。
そう思って後ろを振り向いたのだったが……
悪魔がいない。
一匹たりとも、だ。
空を見上げても、ただ雲の切れ間から青空が見えるだけである。悪魔なんてどこにもいない。
「……」
その代わりと言っていいのか、悪魔ではない別の何かがいる。
民家と同じくらいの大きさの生物。
「いや……植物？」
ツタが寄り集まって形成された足のような部分に、触手のように伸びた無数のツタ、身体の倍はあろう横に広がる緑色の大きな口。
それはまるで村にあった図鑑で見た、虫を誘い出して食べる植物の様だった。

「何か食べてる…………ってまさか!?」
「オ？　アンナトコニ人間ノガ――」
僕の予想は、空から舞い降りてきた悪魔によって証明された。
いや、空から舞い降りる直前の悪魔と言うべきだろう。
悪魔の足が地面に着く直前、物凄いスピードで飛んできたツタに全身を絡め取られ、叫び声一つ上げずに悪魔はその植物型モンスターに食べられた。
「へ……？」
何あれ……いやホントに何あれ!?
「悪魔食べてる……」
その長い触手を器用に扱い、空を飛ぶ悪魔たちを捕まえては口に運び、目につく悪魔を全て喰らっていく。
「何ナンダヨ！　コノバケモノハ!!」
「好キ放題食イヤガッテ!!　ブッ殺シテヤアアアアアアア!!!???」
「バカヤロオ!!　距離ヲトッテ戦アアアアアアアア!!!!!」
「全員退避シロオオ!!!」
僕はその光景に、ただただ立ち尽くしていた。
本来人間を襲うはずの悪魔が、一方的に捕食されるという何とも不思議な光景は、僕

の思考を停止させるには十分すぎる。
「というかこれ……大丈夫なのか？　僕も食べられたりしない？」
「その心配はありませんよ」
　一体の植物型モンスターの頭上から人の声がしたので、見上げてみるとやはりガーデンさんが見下ろしていた。
「ガーデンさん！」
「そんな所にいると危ないですよ。こちらへどうぞ」
　そう言うと、僕は植物型モンスターの触手にガーデンさんの元まで抱え上げられた。
　ガーデンさんと僕が立っているのはこの生き物の頭上。やはり高い。
「ガーデンさん、この生き物は……」
「これは悪魔を喰らう植物、食魔植物と言います」
「名を⊠悪魔喰（ベルゼイター）⊠」
　悪魔を食べる植物……？
「これも加護の力なんですか？」
「ええ、そうです」
　確かガーデンさんの加護の力は、植物を操ることだったはず。けどこんな植物がこの世にいるなんて……

「⊠荘園（ガーディアン）の守護者⊠」
「え？」
「聖なる力を流し込んだ植物を自在に操る、私が授かった神の加護の名前です」
「今、このブルーティカスの地下には植物の根が無数に張り巡らされています。そしてそれらは全て私の支配下」
「ブルーティカスは既に、私の庭です」
　王都が庭って……怒られないか？
「そういえば皆は大丈夫ですか？　レフさんもパキラちゃんも戦ってるんですよね？」
「ええ、二人は協力して東門にいる悪魔を殲滅しています」
「きよ、協力……」
「……言わんとすることは分かります」
　あの二人が協力してるとこなんて全然想像つかないぞ？　どさくさに紛れて互いを攻撃し合う方がまだしっくり来る。
「ですがこれも全てロザリオの指示ですから」
「神父様の？」
「あの人は確かにいつもヘラヘラしています。しかしこれは悪魔との戦争、しかも人の命が懸かっているとなれば、ロザリオも本気でしょう」

「信用してるんですね。神父様のこと」
「長い付き合いですから」
　あの少女の姿をした神父は、やはり周りから絶大な信頼を得ているようだ。
　人は見かけによらない、というのはどうやら本当らしい。
「悪魔の主力部隊を東門で二人が殲滅。北、西、南門からの悪魔と空からの悪魔は王国騎士団と☒悪魔喰（ベルゼイター）☒が対応する……このまま上手くいくと良いのですが」
「なるほど……ってあれ？　そういえばシスターは？」
　ガーデンさんの話では東門にはいないみたいだけど……
「あそこに山が見えるでしょう？」
「え？　あ、はい……」
　確かにガーデンさんの指差す先には山が見える。城壁の向こう、かなりの距離だ。
「兵士達の情報によれば、あそこに謎の建築物が確認出来るそうです」
「建築物？」
「パキラの☒天眼（キュービットアイズ）☒では、そこにいる悪魔の反応が最も強いらしく、恐らくはあそこにヘルズゲートを名乗る悪魔がいるものだと考えられます」
「へー……ってまさか」
　ガーデンさんは小さく頷いた後、こう続けた。

「奇襲というのは少数で行うのが基本です。というよりあの娘の場合、一人の方が力を発揮できます」
「……一人で？」
「一人で、です」
「……」
シスター……案外メチャクチャだよね……

～【ヘルズゲート軍・本拠点】～
「東門ノ主力部隊ハホボ全滅……他ノ門カラノ地上部隊ト飛行部隊モ壊滅状態……」
「クソッ！　小賢シイ人間ドモガ!!」
「ヤハリ、アノブロッサム教会ノ連中ガ邪魔カ……」
「ヘルズゲート様、如何シマショウ？」
「なに、案ずることは無い。全ては計画通りだ」
「低級がいくら死んだ所で何も問題は無い。全てはアレを召喚するために必要な犠牲だ」
「ブロッサム教会。確かに厄介だが手は既に打った。今頃は新世代も前線に到着してい

ることだろう」
「オォォ……流石ハヘルズゲート様！　悪魔ヲ統ベルオ方！」
「ふっ……何を当然のことを」
「ヘルズゲート様ッ!!」
「何だ、何事だ？」
「テ、敵襲デス!!」
「敵襲だと!?　ここにか!?」
「敵の数は!?」
「修道女（シスター）ガ一人！　ソレモ恐ロシク強イ女ガ……」
「何だと!?」

「【Ｇｏｔｔ　ｉｓｔ　ｔｏｔ】」

「祈る必要はありません」
「神は既に死んでいますから」

14．奇襲と逆襲

～【ヘルズゲート軍・本拠点】～

「あなたが『ヘルズゲート』ですか……確かにこれは偽物ですね」

「キサマッ！　ヘルズゲート様ニ何――」

”怒り”。

それも、私には無い感情ですね。

「【制裁（ザンクツィオーン）】」

「ガアアアアア!!???」

たかる羽虫を払うように、辺りの悪魔を薙ぎ払っていく。

「貴様、その禍々しい加護の力は……」

「知る必要はありません」

そう、必要ない。この悪魔は本物じゃないから。

「【天罰（ネーメズイス）】」

完全に捉えた……ように見えたけれど。

あの悪魔は無傷だ。躱した？

「……外しましたか」
「助かったぞ。モフク」
「これ程早く死なれては、我々も困ってしまいます」
　この悪魔、どこから現れたのでしょうか？
「ヘルズゲート様はどうぞお逃げ下さい。ここは私が引き受けましょうぞ」
「フッ、頼もしいことだ」
「老体をあまり当てにされても困りますが」
「逃げるのですか」
「戦争においてはな、王を取られたら負けなんだよ」
「あなたは本物の王ではないでしょう」
「この女……ッ」
　また〝怒り〟……
「モフク、殺せ」
「御意のままに」
「【制裁（ザンクツィオーン）】」
　二人まとめて拳を叩き込んだ、はずだ。
「消えた……」

攻撃は命中せず、ヘルズゲートを名乗る悪魔と、途中から乱入してきた謎の悪魔は私の目の前から姿を消した。

途中から乱入してきたあの悪魔。彼の仕業なのは間違いないでしょうが、何をしたのかが分からない以上、手の出しようがありません。

「こちらですよ。お嬢さん」

「【制裁(ザンクツイオーン)】」

背後から声が聞こえる。それと同時に拳を叩き込む。

「おっと危ない危ない……普通、気配なく背後に回られたら驚きませんか？」

「私には”驚く”こともできませんので」

「……おや、まさかお嬢さん――」

「【天罰(ネーメズイス)】」

間髪入れずに攻撃を入れるが、ヒラリと身を翻し、またも躱される。

「やれやれ、少しは耳をお貸し頂けませんか？」

「お断りします」

「そうですか……残念です。『骸の修道女』シスター・ローズさん」

この悪魔……私を知っている？

「……」

「どうですか？　話、聞く気になりましたか？」
「……私の名前は、スオンです。ローズというのは既に死んだ人間の名です」
「そうでしたか、それは失礼致しました」
　一呼吸置いて、その悪魔は名乗る。
「それではシスター・スオン殿。改めまして、私はヘルズゲート様に仕える悪魔、モフクと申します」
　上下を黒のスーツで揃え、同じく黒のシルクハットに、顔にはひび割れた奇妙な仮面を着けている。
　人間に取り付いた悪魔……何かが引っかかる。
「シスター・スオンです。今からあなたを殺します」
「それは何とも恐ろしい……ご覧の通り、私は既に老体の身。戦闘も不得手でして、どちらかと言うと逃亡の方が得意なんです」
　饒舌、かつ謎の魔法を使う。噂の”他とは違った上級”かもしれない。
「それに私が殺されると、色々困るのです。ひいては主人の損失に繋がりかねません」
「主人とはあの悪魔のことですか」
「フッ……アレに価値が無いということはお嬢さんもお分かりでしょう？」
　悪趣味な笑顔の仮面で表情は見えない。が、どうやら仮面の下も笑顔のようだった。

『アレに価値が無い』？　それはつまり……あの悪魔が本物のヘルズゲートではないことを知っている？

「……あなた、まさか」

「初めに言ったはずですよ。私はヘルズゲート様にお仕えしていると」

この悪魔は本物のヘルズゲートに繋がっている……そう考えるのが自然。

「やはり殺すのは辞めます。あなたは生け捕りにして教会に引きずり出します」

「それも困りますな。それでは皆さんが逃げる時間も十分稼げたことですし、私も逃げさせていただきます」

「皆さん……？」

そういえば周りにいた悪魔達がやけに静か……

「誰もいない……あなた何を――」

消えていたのは周りの悪魔だけではない。

モフクと名乗ったあの悪魔も、私の目の前から消えていた。

そういえばあのモフクという悪魔は何も無いところから突然現れ、そしてヘルズゲートを名乗るあの悪魔も、今のように突然消えた。

ここにいた悪魔達だって、逃げようとする素振りを見せたら追撃は十分可能だったのに。

「瞬間移動……いや」
『それでは皆さんが逃げる時間も十分稼げたことですし――』
あの悪魔の口振りからして、ここにいた悪魔が逃げるのには時間がかかる。
考えられる可能性は……
「【制裁（ザンクツオーン）】」
拳を一点集中ではなく、この空間全体を薙ぐように繰り出す。
「グッ――」
拳が何かに当たった。
流石は『骸の修道女』……よく分かりましたね……」
「考えてみれば簡単な事です」
何も無い空間から、徐々にモフクの姿が明らかになっていく。
『逃げる時間を十分に稼ぐ』必要があるということは、あなたの魔法は瞬間移動の類では無さそう……あと考えられるのは”透明化”くらいでしたから」
「それだけの理由で、ですか？」
「半分、当たればいいな程度で振り回しました」
「……フフフフフッ」
突然笑いだしたけれど、何がそんなに面白いのだろう？

私にも”喜び”があれば分かるのだろうか？

「ご明察、と言っておきましょうか。いくら当てずっぽうで私を攻撃できたと言ってもね」

「【逃避行（ハイドアンドシーク）】」

「それが私の魔法です。能力は先程お嬢さんが言った『透明化』と言った所でしょうか」

こう見えてもかくれんぼは得意なんですよと、無邪気に笑う。

……彼は何がそんなに楽しいのだろう？

「この力は自分だけではなく、他者にも有効な魔法でしてね。周りにいた悪魔達を透明化させて逃がしました」

「随分能力について話してくれるんですね」

「ええ、余裕がありますので。それでは、かくれんぼの第二ラウンドと行きましょうか」

「遊びに付き合っている時間はありません」

「つれませんね、骸のお嬢さん

先程よりもゆっくりと、自慢の魔法を見せびらかすように、モフクの身体が薄くなっていく。

「【逃避行（ハイドアンドシーク）】」

さて……どうやって捕まえましょうか。

～【ブルーティカス東門】～

疲れた。

その一言に尽きる。

悪魔を殺しまくって興奮した脳みそに反して、もう身体がガッタガタだ。

婆ちゃんの形見の斧も血でドロドロだぜ……

「はぁ……はぁ……はぁ……」

「あー……くっそ……」

俺の隣のアホ天使も酷ぇ面してやがる。コイツの生命力ってのも、どうやら限界超えずに済んだみてぇだな。

「うそ……だろ……」

「あの数を……たった二人で……」

ハッ、ヒヨっ子騎士団共が……何ビビってやがんだよ……

「アタシの……勝ちね……」

「あ”？」

「忘れたわけ……？　始まる前に言った勝負のことよ……」

「アタシが２００、アンタが１５０ちょっとかしら……惜しかったわねぇ……？」
　こんのクソガキ……ッ！　いっつも勝負事になると要らねぇ意地はりやがる……!!
「ボケてんじゃねぇよアホ天使……オレが１５０だぁ？　２００対２５０でオレの勝ちに決まってんだろうが……！」
「アンタこそ、悪魔にやられてボケたんじゃないでしょうね？」
「無傷だクソ野郎!!」
「無傷なわけないでしょ!?」
「な、何で二人は喧嘩してるんだ……？」
「さぁ……」
「ならアタシは３００よ！　３００対２５０！」
「ならオレは４００だ！」
「５００!!」
「６００!!」
「９００!!」
「９９９!!　そんでテメェを記念すべき１０００匹目にしてやらぁぁぁあッ!!!」
「上等よ！　返り討ちにして完膚なきまでにアタシの勝ちにしてやるわバーカバーカ！」

「じ、銃天使様！」
「何よ!?」
　アホ天使が兵士の呼び掛けに気を取られた！　今がチャンス!!
「オラ死ねぇ！」
「悪魔達の様子が変ですッ!!」
　思わず斧を振り下ろす手を止める。
「ン……だと……？」
「見てください！　この悪魔達の死体を！」
「……？」
　殺しに殺しまくった悪魔達の死体はその辺に転がっている。これの何が変な――
「「……は？」」
　オレとアホ天使の間抜けな声が重なってしまった。
　いや、そんなことより気にしなければならない異常事態が、目の前で起こっている。
「おい、アホ天使」
「最悪ね……アンタと同じこと気づくなんて」
　心底嫌だという顔で、転がっている悪魔の死体を睨む。きっとオレも似たような顔してやがるな。

オレたちの視線の先には悪魔の死体がある。
血塗れになり、首やら腕やらがぶった切られ、頭も心臓も蜂の巣になって、
そこに、転がってやがる。
「悪魔ってのは銀武器や神の加護でしか殺せねぇ……」
「そして死んだ悪魔の身体は灰となって消える……」
「だったらよ」
「なら」
「「なんでこいつらは消えない……!?」」
嫌な予感がオレの脳内を駆け巡る。
その時だ。
「な、何だ!?」
「これは……」
悪魔達の死体、散乱しているそれらが集まって、真っ黒い一つの球体に変化した。
そしてここにあった悪魔の死体を全て吸収し終わった後、その球体はブルーティカス内部へと向かって行く。
「⊠天使の回転式拳銃(エンジェリックリボルバー)⊠!」
すぐさまアホ天使が球体に狙いを定め撃つ。が……

「弾かれた……!?」
　続けざまに何発か撃ったがその全てが弾かれ、銃の残弾も無くなってしまった。
「逃がすかッ！　⊠再装(リロード)天⊠!!」
「アホ天使！　テメェどこ行く気だ!!」
「決まってんでしょ!?　アレを追いかけんのよ!!」
「追いかけるっったって……」
「レ、レフ殿！」
「今度は何――っておいアホ天使!!」
　兵士の一人がオレの言葉を遮り、その間にアホは走り去ってしまった。
「んのアホが……ッ！」
「レフ殿あれを!!」
「だから何だよ……ッ！」
　兵士の指差す方向には更に悪魔の軍勢が……
「援軍……だと!?」
「援軍、とは少し違うな」
　周囲の空気すら凍らせるような冷たい声と、自分の心臓が飛び跳ねる音が聞こえた。
　背筋を駆け上がっていく……これは一体何だ？

「”恐怖”だ。人間」
「アガッ!?」
「アオオオアアオアアッ!!!」
「ヴヴヴゥゥゥッ!!」
「何だ？　一体何が――」
　そして呻く悪魔達は、いつかのように首を吹き飛ばされ、その灰は集まって黒い球体へと変貌する。
　だがそれよりも、オレの視線はもっと別のヤツに引き付けられた。
「ひっ!?」
「な、何だあいつは!!」
「おいおい……随分お早い再会だな」
　この寒くもねぇ日に、黒いコートとマフラーを着た白髪の悪魔。
　ったく……マジで勘弁してくれよ……
「レフ殿……」
「テメェら……オレが時間を稼ぐから、さっさとブルーティカスに逃げろ。アレはテメェらが束になっても止められやしねぇ……」
「ですが！」

「いいかッ!!　一秒でも長く時間を稼ぐ！　死ぬ気で逃げて悪魔神父に伝えろッ!!」

「ヘルズゲート（本物）が来ちまったってな!!」

さて……どうやって遊んでやろうか？

15．天使と再会

～【ブロッサム教会・聖堂】～

「グリフ、おかえり」

「クローバーさん！」

ガーデンさんに連れられ、僕はブロッサム教会に戻ってきた。

「シスター・ガーデンも、おかえり」

「ただいま戻りました」

あの悪魔を食べる植物、⊠悪魔喰（ベルゼイター）⊠は自動的に悪魔を捉えて捕食するらしいので、ある程度は放っておいてもいいのだそうだ。なのでガーデンさんも一緒に戻ってきている。

「そちらはどう……とは、言うまでもないですかね」

「うん、忙しい」

悪魔との戦いで負傷した兵士、逃げる際に怪我を負った街の人、そしてそれらの手当てをするクレピスさんたち教会の聖職者と、王都の医学に詳しい人で教会の中はいっぱいだった。

「クローバーさん！　急患です！」

そう叫ぶクレピスさんには、少し前のおっとりとした雰囲気など微塵も感じさせない、切羽詰まった様子が簡単に見て取れる。

クローバーさんは無言でクレピスさんの方へ向かい、手持ち無沙汰な僕も一緒に着いて行った。

そこで僕が目にしたのは一人の兵士だった。

「この人……腕が……」

床に倒れ弱々しく呻くその兵士には、右腕が無かった。

もっと正確に言えば右腕、右肩、さらに胸にかけてグチャグチャに吹き飛ばされている。

鼻の奥をつく強烈な血の匂いと、目の前の惨状で、僕は思い出す。

「そうだ……」

「グリフくんは見ちゃダメ!!」

怒気のこもった声でクレピスさんに咎められるが、僕はその光景から目が離せなかった。

そうだよ。とっくに分かっていたはずだ。

僕らをブルーティカスまで連れてきてくれた御者さんも、あの悪魔に一瞬で殺され

た。

さっきまで普通に喋って動いていた人間が、あっという間にただの肉の塊になる。

「……っ！」

目を逸らすな。

これが現実。

残酷な、現実だ。

「心配、ない。俺が、助ける」

「クローバーさん……」

「皆は、離れてて」

クローバーさんは強い瞳で、今にも死んでしまいそうなその兵士に手をかざした。

「あれは……」

クローバーさんの手からは、柔らかく温かい光が溢れだし、兵士を包み込んでいく。

「あれがクローバーが授かった加護の力です」

『この教会運ばれてときには、君たち怪我してたからね。彼がその治療をしてくれたんだよ』

神父様の話によれば、クローバーさんも神の加護を受けた聖職者。

人を癒す加護の力を、この人は持っている。

「☒命を与える幸福の花☒」

光が一層強くなったかと思うと、兵士の傷がみるみるうちに治っていく。

「うそ……」

損傷した部位は綺麗に修復され、大量に出血したことで真っ青だった兵士の顔には生気が戻り、腕も元通り生えてきた。

「はい、終わり」

「人間業じゃない……」

「それが神の加護です」

これは、本当にすごい……いや、すごいなんてものじゃない……

これが神の加護……とんでもない力だぞ！　これは！

「いや～ほんとーに助かりましたよ～！　私一人じゃどうしようもなかったので～」

「クレピス、この人、安静に、させておいて」

「了解で～す♪」

クレピスさんがあののんびりした口調に戻ったということは、どうやらもう心配はないらしい。

「治ったんですよね……良かったぁ」

「……」

「クローバーさん？」
なぜかクローバーさんの表情が暗い。一体どうし――
「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”あぁぁぁぁ!!!??」
「っ!?」
教会に響き渡ったのは怒号に近い悲鳴。誰あろう、先程クローバーさんが治した兵士その人のものだった。
「大丈夫ですからね～怪我は綺麗さっぱり治りましたよ～」
「悪魔がああああ!!　やめてくれぇぇぇ！　殺さないでくれぇぇぇぇぇぇ!!!!!!」
「もう悪魔はいませんよ～大丈夫ですからね～」
大丈夫と何度も声を掛けられながら、錯乱した兵士はクレピスさんに付き添われてどこかへ行ってしまった。
「俺の、加護の力は、傷を、治せる。瀕死の重症も、完璧に」
「けど、死にかけた人の、心の傷は、癒せない」
パキラちゃんに巻いてもらったという頭の包帯に手を当てて、クローバーさんは苦々しくそう言った。
僕だけじゃない。誰もがきっと、心に傷を負っている。
クローバーさんにも、消せない何かがあるんだろう。

「……あの人も、もうダメ。心が、壊れてしまった……俺は、また、救えなかった……」

「……そんな事ないですよ」

『救えなかった』

その言葉が、僕の中で意味を持ちつつある。

セルトグラへで誰一人救えなかった僕を縛る、重い鎖のような意味を。

「クローバーさんのおかげで、今もあの人は生きてます。……生きてさえいれば、心の傷もいつかは治りますよ」

これは慰めになっているのだろうか？　……それ以前に、僕はこれを誰に言っているんだ？

クローバーさんか？　それとも……

「……ありがとう」

「……なんで頭撫でるんですか」

「そこに、頭が、あった、から？」

「僕に聞かないでくださいよ！」

何でここの人たちは僕を子供扱いするんでしょうね!?

「それでは、ここの様子も確認できましたし、私はもう行きますね」

「あの、ガーデンさん。僕は……」
「グリフさんのお陰で、街の人々の避難はほとんど完了しました」
なんとか避難が間に合ったみたいで良かった……
「ですが悪魔の数も増え、東以外の門からも徐々に悪魔が突破してきています。危険ですのでグリフさんは医療班の支援を」
「分かりました！」
「クローバー、教会は任せましたよ」
「了解」
僕とクローバーさんの返事を聞き終えたガーデンさんは、再び悪魔のいる戦場へと向かった。
「……」
「グリフ？」
羨ましいと、純粋にそう思った。
戦場に出られる力があることを、皆を守れるだけの力があることを。
「クローバーさん！　僕は何をすれば!?」
その力がない僕は、僕に出来ることをするしかない。
「グリフ」

「はい！」
「クレピスに、聞いてくれ」
「……はい」
　それじゃあクレピスさんに――
「神父様ッ!!」
「パ、パキラちゃん!?」
　突如教会内に響き渡るパキラちゃんの叫び声。
　見ると全身血だらけで、息も荒い。もしかして、パキラちゃんが守っている東門で何かあったのか!?
「どうしたの!?　すごい血だよ！　すぐにクローバーさんを！」
「神父様はどこ!?」
「え、神父様？」
　神父様なら王宮で指揮を執ってるは……ず……
「っ!!」
　その時、急に全身に悪寒が走った。
「ちょっとグリフ！　一大事なの！　悪魔達が何か企んでて！　でも私じゃどうに……も……」

顔面蒼白な僕を見てか、それとも僕と同じ悪寒を感じたのか、パキラちゃんの動きが止まる。
「……いる」
僕はこの悪寒を……空気すら凍りつかせるような恐怖を、僕は知っている。
『”恐怖”しているな、人間』
「フィア・ヘルズゲート……！」
「っ!!」
震えが、止まらない。
脳の奥深く、最も深い場所にあの光景が刻み込まれている。
視界を染める真っ赤な血。
圧倒的な、絶望。
「なん……で……ここに……」
「グリフ！　落ち着きなさい!!」
「ふぐっ!?」
勢いよくパキラちゃんが僕の顔を両手で挟み込んだ。
無理やり僕の視線を奪い、パキラちゃんはまるで弟達に諭すように話し始めた。
「今、悪魔達が何か企んでいるわ。多分アタシ一人じゃどうにも出来ないことを」

「ふぁひふぁひゃん、ふぁあひへふふぁふぁひ……」
「パニックになるのも分かる。よーく分かるわ。けどね、悪魔達は待っちゃくれないのよ」
「死にたくなかったら、死ぬ気で冷静を保ちなさい。それがアンタに今出来る最大のこと。いい？」
「ふぁい……」
　僕の肯定が伝わったらしく、パキラちゃんは手を離した。
「安心しなさい。アンタ達の命はアタシが守ってあげるわ」
　そう断言する彼女の姿は、素直にとても頼もしかった。
　歳は一つしか違わないけれど、僕と彼女には圧倒的な差があるのが嫌でも分かる。
　……眩しいな、この人は。天使と呼ばれるのも納得出来るくらいに。
「それで神父様はどこ？　異常事態だからあの人の力が要るんだけど」
「神父様なら王宮にいるはずですけど……一体何があったんですか？」
「それが……私にもよく分かんないのよ。殺した悪魔の死体が消えないと思ったら急に――」
「グリフ、姉さん」
「……クローバーさん？」

声がした方を見ると、クローバーさんがこちらを睨んでいる。

いや、僕とパキラちゃんの、その向こう側を……

「……ッ！　全員！　怪我人を連れて今すぐここを離れなさい!!」

パキラちゃんの号令が飛ぶのとほぼ同時、そいつは突然僕らの目の前に姿を現した。

「ふむ……どうやらモフクの【逃避行（ハイドアンドシーク）】が切れてしまったようだな。あれには射程距離があるのか？」

「っ!!」

そこに居たのは背の低い小太りの中年男性だった。顔には悪趣味なピエロの仮面を着け――

「下がりなさいグリフ!!」

「なっ!?」

パキラちゃんに突き飛ばされ、僕は思いっきり後ろへ尻もちをついた。

パキラちゃんは僕を突き飛ばすとほぼ同時に拳銃を抜き、すぐさま照準を定め、僕の身体が地面に到達するよりも早く引き金を引いた。

「⊠天使の回転式拳銃（エンジェリックリボルバー）⊠！」

「無駄だ」

パキラちゃんの銃から放たれた銀弾が着弾することはなかった。

吸収……いや、消滅したのだ。その男に当たる直前に。
「嘘……パキラちゃんの加護の力が……」
「クソが……どいつもこいつもアタシの弾丸を簡単に……!!」
パキラ……ちゃん……？　口がレフさんぐらい悪くなってるよ……？
「賭博場（カジノ）で暴力は御法度だろ？　銃天使さん」
「寝言は寝て言いなさいよ。上級か何だか知らないけど、アンタがいるのはブロッサム教会。アンタら悪魔の天敵の巣窟よ！」
「いいや、ここはたった今カジノになった」
「パ、パキラちゃん……！」
僕は突如目の前に広がった異様な光景に、声をかけずにはいられなかった。
「何……よ？」
こちらに振り向き、パキラちゃんもその異変に気づいた。
「教会が……！」
備え付けられたステンドグラスや、等間隔に並べられた椅子は全て消え去り、温かくて神々しい雰囲気だった聖堂は悪趣味な空間へと変わっていく。
こんなことが可能なのは悪魔の使う魔法だけだ。
「転移……いや違う。アンタ！　一体何をしたの!?」

「そう興奮するなよ、銃天使さん」
不気味なピエロの面が、こちらを嘲笑う。その口調には、言いようもない不快感があった。
「ゲームはこれからなんだから」
突然変化した教会の内装、それにゲーム……？　この悪魔、何を考えているんだ？
「クローバー、あんたもグリフ連れて奥に逃げなさい」
パキラちゃんが小声でそう言った。周りを見回してみるとほぼ全ての人達が聖堂の奥へと避難している。
「こいつはアタシが何とかするから、絶対に他の皆を近づけさせるんじゃないわよ。分かった？」
「姉さん……」
クローバーさんの顔から悔しさが滲み出ている。姉を置いて逃げたくないのだろう。
「その必要はない」
パキラちゃんの提案を断ったのは、なんとあの悪魔だった。
「このゲーム――いや、ギャンブルは人が多い方が有利になる……特にお前達にとっては」
「アイツの言葉に耳を貸しちゃダメ！　早く行きなさい！」

「……あぁ、そうだった」
「奴隷のお前には、誰も救えやしなかったなぁ！」
今……なんて言った……？
「……ど……れい……」
奴隷？　奴隷って言ったのか？
誰に？
「クローバー……さん……」
『”奴隷”……確かサンナ王国の南にある国で今でも容認されてるっていう……』
『そう、俺は、昔奴隷だった』
何で……この悪魔がそれを……
「何でアンタがそれを知ってんのよッ!!」
それは悲鳴に近い、怒りの叫びだった。
これ程までに怒ったパキラちゃんは初めて見る……
「何故？　教えてやろうか」
その男がピエロの面を取ると、嫌味な顔をした髭面の太った中年の顔が現れた。
普通の人間……なのか……？
「うそ……でしょ……」

そいつはパキラちゃんとクローバーさんの驚いた顔を見て、満足そうに笑った。
「お、まえ……ッ!!」
「久しぶりだな救急箱。この教会でも道具のように使われているのか？」

１６．不幸と旅立ち

昔々あるところに、それはそれは不幸な少年がいました。
少年は生まれた時から不幸で、とある理由で実の親には棄てられ、生まれた国から遠く離れた、見ず知らずの貧しい老人に拾われて育てられました。
それでも少年は自分の境遇を、不幸だと嘆くことはありませんでした。
それどころか、自分が拾われたことを、今日も命があることを、毎日神に感謝していました。
そんなある日、少年の育ての親だった老人が、病に倒れてしまいました。
貧しかった老人には医者に診てもらうお金はありません。
少年はとても悲しみ、老人の手を握って彼の回復を神に祈り続けました。
すると少年の想いに応えるように、老人の身体が光り輝き始めました。
すると、先程まで顔色も悪く、息も絶え絶えだった老人が、すっかり元気になっているのです。
少年は驚き、そして喜び、これは神の奇跡だと老人と共に神に感謝しました。
そう、少年は神の加護を授かったのです。

傷を癒し、病を治し、人の命を救う力を。

これが少年の、不幸の始まりでした。

「変わりないようで何よりだよ救急箱。それに銃天使。私を覚えているかね？」
「……ッ」
クローバーさんが握る拳から血が滴っている。
「クローバーさん、大丈夫ですか？」
「……あぁ」
僕がクローバーさんの拳に手を添えると、クローバーさんは少し力を弛めたが、それでも目の前にいる悪魔に向けた眼光の鋭さは消えなかった。
「あの人は一体誰なんですか？」
「……俺を、買っていた、奴隷として、縛り付けていた、男……！」
「何でこいつがここに……それにこの魔法は……アンタ人間じゃなかったの!?」
「人間？　そんな下等なもの、とうに捨ててやったわ」

人間を捨てたって……
「悪魔憑き……」
「そんな矮小な存在と同じにするなッ！」
「っ!?」
そいつは僕に向かって大声で怒鳴った。
悪魔憑きじゃない？　でも人間じゃなくなったって……
「我々は悪魔憑きなどではない！　自らの意思で動き、下級の悪魔なんぞ話にならない力を身につけた新たなる存在！」
「『新世代』だ」
「新……世代……」
上級でも下級でもない、『新世代』って一体何なんだ？
「その『新世代』とやらが、単身ここに突っ込んできて、一体何の用かしら!?」
「そんなもの、決まっているだろう」
男が指を鳴らすと、目の前に黒い机と、同じく黒い椅子が二脚現れた。
「復讐だよ。銃天使」
「お前への復讐の為に、私は人間を捨てたのさ」
その言葉が開戦の合図だったのか、少ししてパキラちゃんと悪魔は向かい合って椅子

に座った。
　真っ黒な机の上には、それと対比するように真っ白なパキラちゃんの銃が乗っている。
「ルールは単純。あの時と同じく、お前の銃に銀の弾を一発だけ込め、互いに向かって一発ずつ撃ち合う。相手に銃を渡す前にリボルバーを回転させてな」
「把握したわ」
「但し！　加護の力の使用を禁ずる！」
　悪魔がそう大声で宣言する。
「私の魔法、『大博打（ジャックポット）』の中でのギャンブルでこのルールを違えば、その時点でそいつは死ぬ！」
「お前がこのルールを破ればそこでお前の死は確定する……いいか銃天使、あの時と同じようにはいかんぞ……！」
「何をそんなに興奮しているのか、さっぱり分からないわね」
　目を血走らせる悪魔に、パキラちゃんは顔色ひとつ変えずに返した。
「……まぁいい。そして次に、このギャンブルの勝利条件は”相手が死んだら”だ」
　……？　相手が死んだら勝ちって……何でそんな……
「痛めつけたいのよ。アタシを。少なくとも一発当てただけで終わらせる気は無いみた

いね」
　疑問が顔に出てた僕に、パキラちゃんは何でもないかのように言う。
「よく分かってるじゃないか」
「どうでもいいから早く始めましょう。ルールはそれで全部？」
「いや、あと一つ。ギャンブル中の他の人間の介入を禁ずる」
　悪魔は僕を、クローバーさんを見て言う。
「そこの救急箱にお前の傷を治療されたら敵わないからな」
「……この子の名前は”クローバー”よ」
　落ち着きを取り戻しつつあったパキラちゃんの怒りが、静かに再燃した。
「二人とも、手出ししないでよ」
「姉さん……」
「分かってるわ。クローバー、お守りはちゃんと持ってる？」
　『お守り』。そう言ったパキラちゃんの目はとても真剣で、クローバーさんがほんの少し驚いた気がした。
「……うん」
「ならよし。そこでグリフと一緒に大人しく見てなさい」
「アンタの仇、今度こそ蜂の巣にしてあげるから」

そこから先、パキラちゃんがこちらを振り向くことは無かった。
「クローバーさん、『仇』ってどういうことですか？　それにあの悪魔は……クローバーさんの知り合いなんですか？」
「グリフになら……友達になら……話しても、いいのかも、しれない」
そして、クローバーさんは目線を二人から離さないまま、僕へ語り始めた。
クローバーさんとパキラちゃんの出会い、そしてあの悪魔との因縁を。
「銃の確認は終わったかしら？」
「あぁ、今度こそ不正は無いな」
「それじゃ、始めましょうか」

加護の力を手に入れた少年は、それを人の為に使うことを決めました。
どんな病気も、どんな怪我も、少年の加護の力でたちどころに治ってしまう。
人々はそんな少年の力に感謝し、そしてそれ以上に恐怖しました。
例え不治の病だとしても、どれだけ命に関わる重症だったとしても、人々は死ねないのです。
少年が死なせてはくれない。

いつしか少年の周りに住む人々は、不死者の集団と言われ、周囲の村々から恐れられるようになりました。
そして人々は、人を超えた力を操る少年を、自分達を救ってくれたはずの少年を、次第にこう呼ぶようになっていきました。
「悪魔」と。
そうして徐々に人々は少年から離れていき、育ての親であった老人でさえも、少年を遠ざけました。
他人を救う少年の力が、少年自身を苦しめていたのです。
少年は再び、孤独になってしまいました。
今まで救ってきた人に見放され、孤独な少年は宛もなく彷徨い続けました。
どれくらい時間が経ったでしょう、歩き疲れた少年がふと目線を上げると、そこに人が立っていました。
それが人攫いだとすぐに気がつけない程、少年の心は疲れ果てていました。
抵抗もむなしく、少年は奴隷として売り飛ばされました。
『人智を超えた力を持つ少年』
欲深い人間達が、少年を見逃すはずがありません。
人でも悪魔でもない、ただの”モノ”になった少年は、絶望の淵でこう思いました。

この世で最も不幸なのは、きっと自分だろう、と。